

平成 14 年度 長期研修生

研究報告書

平成 15 年 3 月 山形県教育センター



平成十四年度
長期研修生
研究報告書

山形県
教育センター

は し が き

本年度、完全学校週5日制、義務教育における新教育課程が完全実施され、21世紀を展望した教育改革がスタートしました。本県においては独自の改革の大きな柱として本年度から「小人数学級編制」を導入し、一人一人に行き届いた教育を推進し、「学ぶ楽しさ」を実感させるとともに、「共生の心」の基盤づくりに努めております。

山形県教育委員会では、教員の資質能力の向上を図るため長期研修制度を実施しております。当教育センターにおいては、昭和50年から昨年度までの27年間で475名が研修し、その研究成果を児童生徒に還元してまいりました。本年度も、小学校から8名（3か月2名・6か月3名・12か月3名）、中学校から2名（6か月）、高等学校から1名（3か月）、特殊教育諸学校から1名（12か月）の計12名の研修生の皆さんが当教育センターに入所しました。それぞれ教科指導・情報教育・教育相談・特殊教育・総合的な学習の時間・専門科目について、熱心にしかも意欲的に研修に励み、指導力の向上に励んできました。

この研究報告書は、研修生の皆さんの弛みない研鑽による成果をまとめたものです。それぞれの研究は、研修生の日々の教育実践から必然的に求められた課題であり、その成果は児童生徒に向かうものであります。教育課題の直視、実態調査、問題点の整理・分析、検証などの研究プロセスは研修生自身の今後の指導のみならず、本県の学校教育の充実発展に寄与するものと確信しております。

終わりに、長期研修生の研修に温かいご配慮と懇切丁寧なご指導をくださいました関係各位に対し、心からお礼申し上げます。

平成15年3月

山形県教育センター

所長 鈴木 強 太

目 次

(前期研修・6か月)

- 1 「伝え合う力」を着実に育てる学習指導のあり方
～「伝え合う力」の学習内容の分析と系統立てられた音声言語の指導～
山形市立宮浦小学校 教諭 伊藤 直之
- 2 ALTとのティーム・ティーチングを生かした指導の工夫
～「聞くこと」「話すこと」を中心とした実践的コミュニケーション能力を
育てる指導～
上市市立北中学校 教諭 川崎 京子
- 3 予防的・開発的カウンセリングをいかした学級経営の研究
～問題を未然に防ぐプログラムの試行を通して～
東根市立神町小学校 教諭 奥山 勇

(後期研修・3か月)

- 4 学級において児童一人一人が楽しくかかわり合える望ましい人間関係づくり
～支持的風土を生み出す児童主体の活動を通して～
松山町立内郷小学校 教諭 鈴木 有人
- 5 主体的な学びにつながる総合的な学習の創造
～体験活動から課題設定の場面のあり方を考える～
酒田市立十坂小学校 教諭 武田 裕一
- 6 工業科目「工業管理技術」における効果的な指導に関する研究
県立山形工業高等学校 教諭 佐藤 利昭

(後期研修・6か月)

- 7 授業改善のためのグループウェアの活用とその有効性についての研究
～授業の設計・分析・評価・改善への利用～
天童市立第四中学校 教諭 工藤 実
- 8 子どもたちの心と学級集団の実態を的確にとらえ、あたたかい人間関係を
育てる学級経営の研究
～アンケートによる実態調査と構成的グループエンカウンター及び
ソーシャルスキルトレーニングを通して～
高島町立高島小学校 教諭 小野 諭

(12か月研修)

- 9 情報通信ネットワークによる交流を効果的に用いた学習の研究
天童市立成生小学校 教諭 三宅 茂晴
- 10 学習障害(LD)児や注意欠陥/多動性障害(ADHD)児等の学級集団の中での
支援のあり方についての研究
新庄市立立新小学校 教諭 野尻 裕子
- 11 児童の自尊感情を育て、仲間とともに課題を解決する学級づくり
～教育相談の考えや技法を生かした授業を通して～
酒田市立鳥海小学校 教諭 小松 泰弘
- 12 障害のある児童生徒が前向きに生きる意欲を育てる支援のあり方
～視覚障害児における社会生活能力の向上に向けた指導を通して～
県立山形盲学校 教諭 安部三喜子

平成14年度山形県教育センター長期研修

「伝え合う力」を着実に育てる学習指導のあり方

～「伝え合う力」の学習内容の分析と系統立てられた音声言語の指導～

学校名 山形市立宮浦小学校
長期研修生氏名 伊藤 直之

【目次】

I 研究主題・主題設定の理由・研究の仮説と内容

II 研究の内容

- 1 「伝え合う力」の分析
 - (1) 国語科の目標における「伝え合う力」の位置と考え方
 - (2) 「伝え合う力」の分析
- 2 「伝え合う力」の系統表と年間指導計画
 - (1) 系統表について
 - (2) 年間指導計画について
- 3 音声言語の系統的指導
- 4 音声言語の評価について
- 5 研究授業について

III 研究のまとめ

- 1 研究の成果
- 2 今後の課題
- 3 終わりに

IV 主な参考文献

『小学校学習指導要領』	文部省	1998
『小学校学習指導要領解説 総則編』	文部省	1999
『小学校学習指導要領解説 国語編』	文部省	1999
『伝え合う力の育成と音声言語の重視』	小森 茂著 明治図書	1999
『小学校学習指導要領Q&A～解説と展開～』	本堂 寛・大熊 徹編 教育出版	1999
『話し方・聞き方 新教材と授業開発』	市毛 勝雄編 明治図書	1999
『新しい教育観と音声言語の教育』	瀬川 栄志著 明治図書	1999
『よく聞き、よく話す力が育つ国語科の授業』	満田 幸四郎監修 大阪市小学校国語教育研究会編	1997
『学校のリ・デザイン』	無藤 隆著 東洋館出版	2001
『総合的な学習の時間 ～実践へのアプローチ～』	嶋野 道弘著 全国教育新聞社	2000

I 研究主題・主題設定の理由・研究の仮説と内容・研究計画

(1) 研究主題

「伝え合う力」を着実に育てる学習指導のあり方
～「伝え合う力」の学習内容の分析と系統立てられた音声言語の指導～

(2) 主題設定の理由

新しい学習指導要領では、「伝え合う力を高める」ことが国語科の「目標」の中に新たに位置付けられ、「話すこと・聞くこと」の言語活動が国語科の「内容」としてこれまでに増して重要視されている。一方、近年、身近な子どもたちの様子を観察していると、次のような傾向のあることに気が付く。

- ・ 「自分の知らせたいこと」を相手にわかるように話すことができない、対話を成立させることのできない子が増えている。
- ・ 相手の考えをしっかりと聞き、感想を言うことができない子、進んで話し合いに参加することができない子が増えている。

こうした状況を改善するには、国語科の授業の中で、「伝え合う力を高める」という目標のもと「話すこと・聞くこと」の指導をしっかりと行うことが不可欠であることは、明らかである。ところが、これまでの国語科の授業については、「読解偏重」と批判されるように、「読むこと」の学習にのみ偏りがちであり、「話すこと・聞くこと」の学習が系統立てて行われることはほとんどなかった、というのが実状である。また、「話すこと・聞くこと」の言語活動を中心とした授業が行われる場合には、「活動あって学習なし」と言われるような、児童同士の話し合い等の「活動を中心とした」、その一方で「学習内容として後に残るものの不確かな」授業になってしまいがちであった。

「伝え合う力」を着実に育てるためには、①「伝え合う力」の「基礎・基本」となる学習内容を分析・把握した上で、②発達段階に応じて、各学年に、適切に学習内容を配置し、③「関心・意欲・態度」を重視する視点を保ちながらも「技能」や「知識」を系統的に習得させる視点をもった学習計画と学習指導を作成し実践する、ことが必要であると考えて、上記の研究主題を設定した。

(3) 研究の仮説と内容

研究の仮説

「伝え合う力」の「基礎・基本」となる学習内容を明らかにし、それを踏まえて系統的に音声言語の指導を行えば、「伝え合う力」を着実に育てることができる。

研究の内容 (①～③・・・基礎研究 ④・・・発展的実践)

- ① 「伝え合う力」の「基礎・基本」となる学習内容の分析・把握。
- ② 児童の発達段階に応じて、各学年に学習内容を割り当てた、系統表の作成。
- ③ 学習計画の作成と具体的な学習指導のあり方の研究。
- ④ 指導案の作成。研究授業の実践。
- ⑤ 研究授業の反省・分析・考察。
- ⑥ 研究の整理とまとめ

II 研究の内容

1 「伝え合う力」の分析

(1) 国語科の「目標」における「伝え合う力」の位置と考え方

小学校学習指導要領には、国語科の「目標」として、「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。」と記されている。「伝え合う力を高める」は、前回の学習指導要領までには、「目標」の中になかった言葉である。また、『小学校学習指導要領解説 国語編』(文部省)においては、「伝え合う力」とは、「人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら、言語を通して適切に表現したり正確に理解したりする力」であると説明されている。

さらに、文部科学省初等中等教育局小学校課教科調査官であった小森氏は、『「伝え合う力」とは音声言語と文字言語と表現力と理解力の両方を含むものであり、音声言語中心に使用されるコミュニケーション能力より広いものである。』と述べている。そのような考えに立って、小森氏は、子どもたちの現状と課題を次のようにとらえている。『小学校新学習指導要領の解説と展開』(教育出版)

- ・ おしゃべりはよくできるが、人前できちんと説明や発表、話し合いができない。
→ そのため、自分の考えを持ち、論理的に意見を述べる能力を育成する必要がある。→ 「A. 話すこと・聞くこと」の領域で意図的、計画的に育成する。
- ・ 目的や意図に応じて筋道立てて文章を作成したり、必要なメモや資料を作成したりする力が不足している。(喜怒哀楽を自分の言葉で表現はできるが) 自分の考えを持ち、目的や場面などに応じて適切に表現する能力を育成する必要がある。→ 「B 書くこと」の領域で意図的、計画的に育成する。
- ・ 国語科の授業では、時間をかけて気持ちの読み取りをしているのに、目的に応じて的確に読み取ったりする力や、自分の考えを広めたり深めたりする読書力が十分でない。自分の考えを持てるように目的に応じて的確に読み取る能力や、読書に親しむ態度を育てる必要がある。→ 「C. 読むこと」領域で意図的、計画的に育成する。

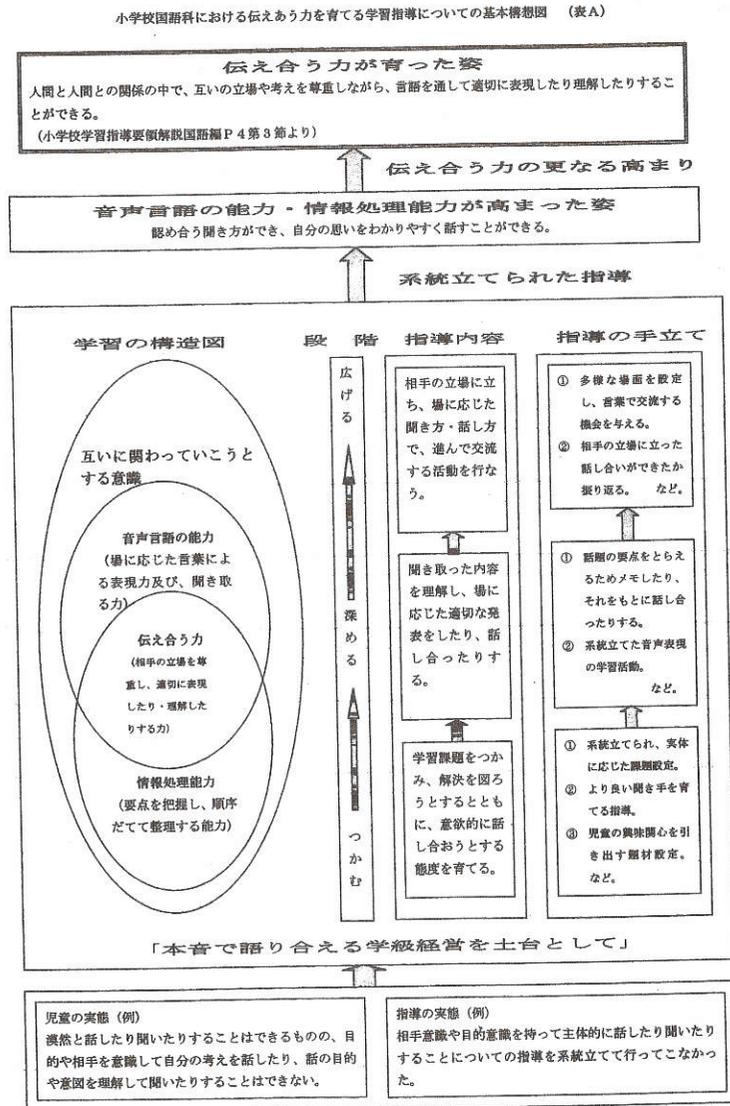
(小森、前掲書)

以上に引いた中で、小森氏が育成する(育てる)必要があると述べている諸能力は、「伝え合う力」の内容を構成するものである。

このように、「伝え合う力」は、互いの立場や考えを尊重し合う人間関係を基盤とし、「A. 話すこと・聞くこと」、「B. 書くこと」、「C. 読むこと」の3領域を調和的に育成していく中で、育てていくものであると考えられている。

(2) 「伝え合う力」の分析

(1) で述べたことをもとに、「小学校国語科における伝えあう力を育てる学習指導についての基本構想図」を作成した(「表A」を参照)。



まず、「本音で語り合える学級経営」を土台として学習が成り立っていくものとする。そうした「学級経営」があり、はじめて「伝え合う力」を形成していくことが可能となる。

次に「伝え合う力」として学習されるべき事柄とその形成過程を示したものが「学習の構造図」である。まず、「互いに関わりあう」という意識を育てていく必要がある。そうした意識(意欲・態度)の育成の上に立って「音声言語の能力」と「情報処理能力」の発達を図ることになる。「音声言語の能力」とは、言葉を使ったコミュニケーション力であり、自分の考え方を伝達したり、相手の考え方を聞き取ったりする力である。「情報処理能力」とは、相手から聞いた事柄を、「すでに獲得している情報」や「生活の中で体験した事」などと結びつけることにより、自分の考えとしてまとめたり、相手の話の要点をメモに記録したりする力である。

「伝え合う力」は、「音声言語の能力」と「情報処理能力」という2つの能力が重なり合うことで初めて成立するものと考えた。このように考えると、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の3領域が螺旋的に絡み合うことで「伝え合う力」は伸びていくものと図式化される。

「音声言語の学習」と「情報処理能力」を身につける学習を、系統立てられた指導計画のもとで段階を踏んで行っていくと、「伝え合う」ことが可能になる状態(お互いにきちんとした聞き方や話し方ができ、その点でお互いに相手を認め合っている状態)になると考えた。このようにして、系統立てた指導を計画的に行っていけば、「伝え合う力」が確かに深まり、「小学校学習指導要領の目標」に位置付けられている「伝え合う力」、つまり「人間と人間との関係の中で、互いの考えを尊重しながら、言語を通して適切に表現したり理解したりすることができる力」にまで育つことになると考える。

2 「伝え合う力」の系統表と年間指導計画

(1) 系統表について

小学校学習指導要領では、学習内容を定着させるにあたって、2学年にまたがり、児童の実態に応じ、ゆとりを持って指導にあたることとしている。そのため、「伝え合う力」を発達段階に応じながら、系統立てて指導していく基準となる系統表を作成するにあたり、低学年、中学年、高学年と3つの段階に分けた。3つの段階のそれぞれについて系統表を作成したが、紙面の都合上ここでは低学年を対象とした表のみを載せる(「表B」)。

この系統表は「言語の基礎技能」と「言語活動の基本的能力」を、『小学校学習要領解説 国語編』を参考にしながら分析し、作成したものである。また、重要な「言語の基礎技能」と「言語活動の基本的能力」に絞って記してある。

「言語の基礎技能」とは、「言語活動の基本的能力」を身につける上で必要な技能であり、繰り返して練習したり、活用したりすることによって獲得される、発音のし方や、表記、文の構成などを含む技能的要素であるものとした。また、「言語活動の基本的能力」とは、「音声言語の力」や「情報処理能力」を身につける上で必要な能力であり、関心、意欲、態度面も含んだ、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の領域の中で、「音声言語の学習」に、特に深く関わっている能力のことと考えた。

系統表では、「言語の基礎技能」を意識して、指導にあたることによって、「言語活動の基本的能力」が高まり、「音声言語の力」と「情報処理能力」の2つの力が高まっていくことを示している。この2つの力が調和的に身につけば、「伝え合う力の統合発信力」が身につく、小学校学習指導要領の目標である「互いの立場を尊重しながら、言語を通して適切に表現したり理解したりすることができる」ことに着実につながっていくものと考えた。「伝え合う力の統合発信力」とは「伝え合う力」が育った姿を示すものであり、互いの立場や考えを尊重しながら、言語を通して適切に表現したり理解したりすることができる力と考えた。

第1～2学年における系統表 (表B)

音 声 言 語 の 力	情 報 処 理 能 力
<ul style="list-style-type: none"> ◎好きなところや興味を持ったところを見分けたり、それらを人に伝える。 ◎身近な事柄について話題に沿って話し合う。 ◎落ち着いてゆっくりと楽な気持ちで話し合う。 ◎返事、伝言や指図などをする。 ◎相手や指図などにはっきりとあいさつや返事、伝言や指図などをする。 ◎相手に伝わるようにはっきりとあいさつや返事、伝言や指図などをする。 ◎相手に対して簡単なあいさつや返事、伝言や指図などをする。 ◎話してのほうを見て、気後れせずに話し合う。 ◎身近な事柄について話題に外れないようにして話し合う。 ◎身近な事柄について話題に外れないようにして話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎身近な生活の中から興味ある言語情報を見つける。 ◎知らせたい事を経験や行動、時間的経過などの順序をたどって組み立てる。 ◎言語情報の大体を聞いたとき読み取ったりする。 ◎言語情報を求める事に興味をもつ。 ◎身近な生活の中から言語情報を進んで選ぶことができる。 ◎知らせたい事を経験や行動、時間的経過などの順序を整理して組み立てる。 ◎言語情報の概略を聞いたとき読み取ったりする。 ◎情報事実を正確に離したり書いたりする。

伝え合う力の統合発信力

読むこと	書くこと	話すこと聞くこと
<ul style="list-style-type: none"> ◎身近にあるやさしい読み物を読む。 ◎文章の大体を読み取る。 ◎場面の様子などについて想像しながら読む。 ◎語や文としてのまとまりを考えながら読み出す。 ◎やさしい読み物に興味をもつ。 ◎時間的な順序、事柄の順序などを考えながら内容の大体の様子などについて、想像をひろげながら読む。 ◎文章の内容や言葉の響きなどについて考えながら、声に出して読む。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎身近にあるやさしい読み物を読む。 ◎文章の大体を読み取る。 ◎場面の様子などについて想像しながら読む。 ◎語や文としてのまとまりを考えながら読み出す。 ◎やさしい読み物に興味をもつ。 ◎時間的な順序、事柄の順序などを考えながら内容の大体の様子などについて、想像をひろげながら読む。 ◎文章の内容や言葉の響きなどについて考えながら、声に出して読む。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎知らせたい事を選び、相手に分かるように話す。 ◎話し手を見ながら、話の内容の大体を聞き取り、読み取る。 ◎身近な事柄について興味をもって話し合う。 ◎事柄の順序を考えながら、相手に分かるように話す。 ◎大事な事柄を簡潔に、相手に分かるように話す。 ◎最後まで聞く。 ◎身近な事柄について話題に沿って話し合う。 ◎身近にしている相手を見つけて書く。 ◎書くための事柄を考えたり、見つけたりする。 ◎自分の考えが伝わるように、簡単な組み立てて書く。 ◎事柄の順序をたどりながら、語と語や文と文との就き方に注意して文章を書く。 ◎自分の書いた文章を読み返して、間違えなどに注意する。 ◎相手や目的を考えながら書く。 ◎自分の考えが明確になるように簡単な組み立てて書く。 ◎書くことと読むこととを関連させながら書く。

言語活動の基本的能力

言葉遣い	文の構成	表記 文字	発音・発声
<ul style="list-style-type: none"> ◎文中における主語と述語との関係に注意して読み書きする。 ◎丁寧な言葉と普通の言葉との違いに注意して読み書きする。 ◎敬体と常体で書かれた文章の違いが分かり、敬体で書かれた文章に慣れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎文中における主語と述語との関係に注意して読み書きする。 ◎文中における主語と述語との関係に注意して読み書きする。 ◎文中における主語と述語との関係に注意して読み書きする。 ◎文中における主語と述語との関係に注意して読み書きする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎片仮名や平仮名を読み取り書きする。 ◎第一学年に配当されている漢字を読み、書くことができる。 ◎平仮名や片仮名の読み、書きができ、片仮名で書く話や文章の中で使う。 ◎第二学年までに配当されている漢字を読み書きすることができる。 ◎第一学年までの漢字を書き、文や文章の中で使う。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎はっきりした発音で話す。 ◎姿勢・口形に注意して、はっきりとした発音で話す。

言語の基礎技能

○は1年生、◎は2年生を示す。

(2) 年間指導計画について

「話すこと・聞くこと」の領域は、特に小学校学習指導要領の中で「他教科や総合学習、その他の領域でも活用することが望ましい」とされている。そのため、この「年間指導計画」は、勤務校の実情と児童の実態に応じ、各学年の発達段階や学習の系統性を踏まえ、適切な単元を配置していかうとしたものである(「表C」参照。この表は、筆者の勤務している宮浦小学校で使用している国語科の教科書「光村図書」や、勤務校の教育課程を参考にして作成したものである)。紙面の都合上、第1学年から6学年までのうちの第3学年のものを載せる。

第3学年 「話す・聞く」年間指導計画 (表C)			
単元	1学期	2学期	3学期
音楽めがね	<ul style="list-style-type: none"> ・耳をすましているいろいろな音を聞き、メモを取る。イメージをふくらませ発表する。(独話の基本・伝言・説明) 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達とできるだけ長く話をする。いろいろな話しかけの形を体験する。(伝言) 	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ本や同じ作者の本を読んで、話し合う。(フリガナ・リー)
情報収集し、伝えたいことを相手にわかりやすく話す力、要点をつかみ、聞く力を育てる。(伝言・説明)	<ul style="list-style-type: none"> ・友達とできるだけ長く話をする。いろいろな話しかけの形を体験する。(伝言) 	<ul style="list-style-type: none"> ・得意なものを持つている人と話し、話の中心を落とさず聞き取り、メモを取る。(伝言・紹介) 	<ul style="list-style-type: none"> ・市や地域の広域行事、等に目を向け、調べたことを発表しあう。(独話の基本・紹介・意見等)
音当てイメージ遊びをする。感じたことをメモにし発表する。(学級会)	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちのよさ言い合いを相互理解を行う。(遊戯) 	<ul style="list-style-type: none"> ・俳優の名人、音楽の名人、図工の名人、折り紙の名人等(総合) 	<ul style="list-style-type: none"> ・名所、交通、祭り、人、今と昔の移り変わり等をインクペーパーしたり、まとめたたりしたことを発表する。(社会・総合)
学習指導要領に示されている学習活動の注意点を、児童の生活に密着した語彙や問題を取り上げ、少人数グループから少しずつ大きなグループの中で話したり聞いたりする。いろいろな目的のために、「要点などをメモを取りながら聞くこと」等を通して、情報収集の技能を高める。観察や調査の学習活動の結果や感想を、伝える内容に応じて資料や具体物などを利用して、分かりやすく伝えるように工夫する。	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちのよさ言い合いを相互理解を行う。(遊戯) 	<ul style="list-style-type: none"> ・俳優の名人、音楽の名人、図工の名人、折り紙の名人等(総合) 	<ul style="list-style-type: none"> ・名所、交通、祭り、人、今と昔の移り変わり等をインクペーパーしたり、まとめたたりしたことを発表する。(社会・総合)

平成14年7月5日(金)2校時
 学校名 山形市立宮浦小学校
 場所 4年1組教室
 指導者 伊藤 直之

＜研究授業の仮説＞

基礎・基本をふまえて計画的に音声言語の指導を行えば進んで自己表現する子どもを育てることができる。

1. 単元名 「無人島SOS」(「話すこと・聞くこと」)

2. 指導目標

- ① いろいろな考えがあることに気づき、友達意見を尊重することができる。
- ② 聞き手として話し手の意見を最後までしっかりと聞き、それについての自分の考えを相手分かるように話すことができる。
- ③ 自分の考えと友達の考えとの共通点や相違点を聞き分け、話し合うことができる。

3. 単元(教材)について
 省略

4. 児童について
 省略

5. 指導にあたって

この単元では「無人島で生き延びるために必要なもの」について考えさせ話し合わせる。その中で、音声言語の「基本的能力」と「基礎技能」の指導を行う。

(1) 「基本的能力」について

- 1 伝えたい事を選び、話の中心が分かるようにして、筋道を立てて話し合う力。(具体的な活動)

- ① 無人島で生き延びるため必要なものを選択する。
- ② 話題からそれないためにメモを取る活動を行う。

- 2 考えを明確に伝えるために理由や根拠をあげて話し合う力。(具体的な活動)

- ① 話したいことを事前にカードに書いておき、理由を考えて記録しておく。

- 3 相手の意見や考えを大切にしながら聞くことができる力。(具体的な活動)

- ① 聞き方のポイントを大切にさせる。今回は児童の実態に合わせて次の二つの点に絞って指導する。
 - ・ 人の話は最後まで黙って聞く。
 - ・ 相手の方を見て、理解できた場合には頷きながら聞く。

この題材では、何を言っても大きな間違いにはならないので、リラックスした雰囲気の中で、相手の立場を尊重する態度を身につけることができるように指導を行いたい。また、それと同時に聞き取った情報から質問などをさせて、伝え合う力を育てていきたい。さらに、次に示す「基礎技能」の学習にも力を入れ、「基本的能力」の育成をはかる。

(2) 基礎技能について

- (1) の基本的能力を養うために、以下の指導を行う。

1 についての「基礎技能」

- ・ 話題とその話題の大切な点を意識する。
- ・ 場の状況や目的に応じた適切な音量や速さで話す。

2 についての「基礎技能」

- ・ 要点を書き留めておき、大切なところを抜かさないように気をつけて話す。
- ・ 場に応じた丁寧な言葉で話す。

3 についての「基礎技能」

- ・ 最後まで口を閉じて。
- ・ 相手の顔を見て。
- ・ 相手が何を言いたいのか、理解できた場合には頷いて。

6 本時の目標

- ・ 相手の立場に立ち「無人島に必要なもの」を相手に理由を説明しながら順序立てて話すことができる。
- ・ 相手の話をしっかり聞き、自分の考えを持つことができる。

7 本時の指導過程(2/2)

学習活動(子どもの活動○ 予想される反応●)	指導上の留意点(支援☆ 評価◎)
<p>○本時の学習内容を確認する。 「船が嵐に合い無人島にたどり着きました。みなさんは生き延びるために、ものを3つ選べることになりました。何を選びますか。」</p> <p>●魚をつるから、つりばり、それから・・・</p> <p>○一人ひとり必要なものを考え、学習カードに記入する。(第1時から継続)</p> <p>・3つ選び、選んだ理由等を自由に学習カードに書かせる。</p> <p>○3人組で話し合い活動をする。</p> <p>● マッチを選びました。理由は・・・</p> <p>● ～さんに質問します。ライターのほうが・・・</p> <p>○きちんとした話し方ができている児童が、全体で発表する。</p> <p>○3人組で、話し合う活動を、1人につき1つのものについてもう一度行う。</p> <p>○自己評価カードを書く。</p>	<p>☆話し合いの約束と仕方を掲示する。</p> <p></p> <p>☆考える時間を十分に与え、理由までしっかり考えさせる。 ☆選ぶことができても、理由が思いつかない子どもには、今の生活と対比して考えさせ、その道具の必要性について考えさせる。</p> <p>☆話し合いを苦手としている子どもは1つでもよいこととし、教師が助言し、認める。 ☆思いつかない子どもは友だちから意見をもらってもよいこととする。 ◎理由を言い、相手の立場に立って、話題にそれずに説明できたか。 ◎大切だと思うところはメモを取りながら聞くことができたか。 ☆話が進まない班については教師が聞き手になる。 ☆よい話し方をしている児童を見て、よいところはみんなを取り入れ、共有する。</p> <p>◎話し合い活動ができ、友だちのよさを見つけたことができたか。</p>

本時の視点

- ・ 相手の立場に立ち、自分の考えを楽しく筋道立てて話すことができたか。
- ・ 大切なことを聞き落とさずに相手の話を聞くことができたか。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

- ① 国語科における「伝え合う力」の分析をすることで、「伝え合う力を育てる学習指導についての基本構想図」(表A 参照)を作成することができた。
- ② 国語科の学習指導要領をもとに、児童の発達段階に対応した「系統表」(表B 参照)を作成することができた。
- ③ 国語科の指導要領や児童の興味・関心、児童の発達段階、地域性、勤務校の教育課程等を考慮しながら、「話すこと・聞くこと」の領域について、全学年分の「年間指導計画」(表C 参照)を作成することができた。
- ④ 国語科の指導要領と児童の発達段階を考慮しながら、「音声言語の系統的指導一覧表」(表D 参照)を作成することができた。
- ⑤ 音声言語の評価について研究を深めることができた。

《研究授業を通してわかったこと》

- ・ 教師が獲得させたい指導事項に合った、ゲーム性の強い単元を配置するようにしたい。
- ・ 生活科や総合学習、他領域などの大単元の中で、音声言語の「基礎技能」や「基本的能力」が求められる場面を設定し、必要感を持たせつつ、音声言語の「基礎技能」や「基本的能力」を取り立てて指導するようにしたい。
- ・ 音声言語の能力は、積み重ねることによって大きな成果が得られるものと、今回の授業を通して感じたところである。日々の生活の中でも、教師は、発達段階や系統性を意識しながら、生活の中全体で指導にあたることが大切である。
- ・ 指導者は学習内容により、児童がより集中して活動できるように、活動の場を弾力的に変えていく必要がある。

以上のような事柄に留意し、児童の意欲と教師側の指導目標がかみ合った状態で学習が行われるように心がけたい。

2 今後の課題

音声言語の「基礎技能」や「基本的能力」の指導を、発達段階に応じ、系統立てた計画のもとで行うことによって、自己を表現する能力は確かに高まっていくものと実感した。しかし次の点に留意する必要がある。

- ・ 進んで自己表現するような児童に育てるためには、児童の興味・関心と教師の身につけさせたい指導事項がかみ合うような、単元の設定をする必要がある。
- ・ 一人ひとりを大切に、個々の学力に対応しながら系統性のある指導を行っていく必要がある。
- ・ 進んで自己表現するために、伸び伸びと語り合うことができる、温かい学級集団づくりを行っていく必要がある。

以上のことに留意して、進んで自己表現する児童を育てていきたい。

3 終わりに

児童が友達と話をする時、相手に対する配慮も、学年が進行していくにつれて高まっていく傾向が見られる。これは、児童が、自己の世界の広がりとともに、自らが社会的な存在であることに気づき、その位置を真剣に探ろうとしているためと考えられる。

しかしながら、お互いに相手の真剣な気持ちをわかっているにもかかわらず、どのように対処していけばよいのかということになると、児童は当惑してしまうことがある。つまり、お互いの気持ちを伝え合うことができないのである。また、教師までもがその対策を打ち出せず、「伝え合う力」を育てるための発達段階に応じた、系統立った指導を行ってこなかったように思う。

話し合いの中で、傍観者になってしまうような児童がいる。そんな児童たちの心の底にあるものは「無力感」ではないだろうか。教師は、国語科の中で真剣に「話し合う」・「聞き合う」態度を養ってきたと言えるのであろうかと考えると、私自身、行ってこなかったと痛切に感じる。

今回の県教育センターでの研修では、「生きて働く国語の力」の中核とされる、「伝え合う力」の育成を研究することができた。6か月という短い期間の研修ではあったが、この研修で得たことを基に、微力ながら、「児童への還元」・「職場への還元」・「自分への還元」ができそうである。

この間、いろいろな方々よりご指導、ご協力をいただいた。鈴木強太所長をはじめとする教育センターの先生方、直接ご指導していただいた平塚志信先生に、心より感謝申し上げます。また、研修の機会や研究に必要な授業実践の場を与えてくださった、山形市立官浦小学校の、志田洋史校長先生をはじめとする、諸先生方に心より感謝申し上げます。

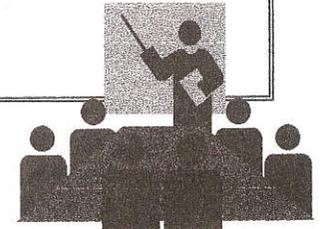
「ALT とのティーム・ティーチングを生かした指導の工夫」
～「聞くこと」「話すこと」を中心とした実践的コミュニケーション能力を育てる指導～

長期研修生氏名 川崎京子
学校名 上山市立北中学校

指導者職氏名 指導主事 佐藤俊一

☆☆☆ 目次 ☆☆☆

- I 主題設定の理由と研究のねらい
- II 研究及び研修の概要
- III 研究の仮説
- IV 研究内容
 - 1. ティーム・ティーチングの特徴
 - 2. 実践的コミュニケーション能力を育てるには・・・
 - 3. ティーム・ティーチングの現状と改善に向けて・・・
 - 4. より効果的なティーム・ティーチングの授業の実践に向けて
 - (1) 歌
 - (2) 活動
 - (3) 評価カード
- V 成果と課題



《主な参考文献》

- ・新中学校教育課程講座〈外国語〉平田和人
- ・改訂中学校学習指導要領の展開 外国語 平田和人
- ・外国語（英語）科の授業をどう創るか 平田和人・金谷憲
- ・中学校英語科のティーム・ティーチング 景浦攻
- ・アクション・リサーチのすすめー新しい英語授業研究 佐野正之
- ・HANDBOOK FOR TEAM-TEACHING Ministry of Education, Science, Sports and Culture
- ・山形県英語教育 第42号 '97
- ・平成14年度 教科とIT活用講座（英語）資料 佐藤俊一

I 主題設定の理由と研究のねらい

今回の学習指導要領外国語科の改訂に当たっては、三つの改善の基本方針が示されている。その大きな柱の一つが「実践的コミュニケーション能力の育成」である。言うまでもなく、これは実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用する力を育てていくということである。また、「聞くこと」や「話すこと」などの音声によるコミュニケーション能力の育成に焦点を当てている。実践的コミュニケーション能力の育成のためには、ALT とのチーム・ティーチングは絶好の機会であり、チーム・ティーチングを通して、一人一人の生徒にきめ細やかな指導を行い、活発な言語活動を行わせることができる。チーム・ティーチングにおいては、JTE と ALT が協力しながらお互いの長所を發揮できるようにすることが望まれる。

ところが現場においては、ALT と JTE の協力不足や、毎日の忙しさに追われて指導に工夫がないなど、チーム・ティーチングのメリットが生かされておらず、不完全な活動となっているのが現状である。したがって、生徒にも実践的なコミュニケーション能力が育たないという問題点がある。

このような現状を改善するには、生徒についてはもちろん、JTE と ALT がお互いのことをよく理解した上で、指導上の工夫をすることが大切になってくる。そこで、本研究では、より効果的なチーム・ティーチングを目指し、ALT の意識調査を行い、ALT のアイデアなどを活用し、計画的にチーム・ティーチングの指導に組み入れていくことにより、授業が活性化し、生徒の実践的コミュニケーション能力が育つと考え、上記のような研究主題を設定した。

II 研究及び研修の概要

1. 理論研究 資料、文献、教科書等の研究
2. 実技研究
 - ① ALT へのアンケートの作成と実施
 - ② 「聞くこと」「話すこと」を中心としたチーム・ティーチングに関する年間指導計画の作成
 - ③ 評価表の作成
 - ・生徒の自己評価カード
 - ・教師による生徒の評価カード (JTE、ALT)
 - ・授業を振り返るための評価カード (JTE - ALT)
3. 実践研修
 - ① チーム・ティーチングに関する講座・研修会への参加
 - ② チーム・ティーチングの授業参観

III 研究の仮説

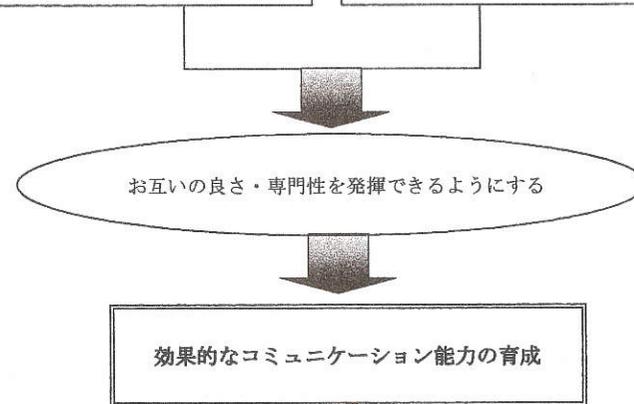
効果的なチーム・ティーチングの妨げとなる要因を明らかにして、JTE と ALT がお互いの良さを發揮できれば、チーム・ティーチングが活性化し、生徒の実践的コミュニケーション能力が育つだろう。

IV 研究内容



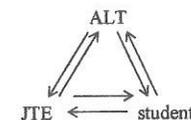
1. チームティーチングの特徴

JTE	ALT
<ul style="list-style-type: none"> ○生徒のこと、学習内容や量、生徒を取り巻く社会環境、我が国の外国語教育の特徴などに詳しい ○日本人が英語を学ぶ際の困難な点を知っている ○英語の教育者としての技術があり、生徒に上手に説明することができる 	<ul style="list-style-type: none"> ○英語のネイティブスピーカーである (言葉の使い方に詳しい) ○英語の文化的背景に精通している ○授業のアイデアが豊富である ○英語を使うための直接的な動機を与える
△外国語そのものは母語でない	△指導法や生徒の事情や我が国の教育環境についての知識は浅い



さらに、二人の指導者がいることにより

- ・ 一人で様々な役割を演じるより、場面や状況の提示がうまくできる。
- ・ 相互対話の機会が増える
- ・ 一人ひとりに対する指導の機会が増えるので、指導が効果的に行われる。



2. 実践的コミュニケーション能力を育てるには・・・

英語を話せるようになりたい

英語を話せるようになりたい、という声はよく聞く。しかし、中学・高校と勉強しているにもかかわらず英語を話せない人が多いというのが現状である。英語が苦手であるという人はしばしば「思ったことを英語で話せないから。」と言う。しかし、コミュニケーションがとれない最大の原因は、話せないことよりもネイティブ・スピーカーの英語を聞き取れないところにあることが多い。

「聞く」力をつけるには

では、どうすれば聞き取れるようになるのだろうか。英語の音声の特徴は、実際の音声をできるだけ多く、また繰り返し聞かせることで聞き分けられるようにすること。音声を聞き取る能力は理屈や知識では身に付かない。また日本人教師が教科書を2～3回範読してそれですべてといった指導では身に付かない。ALT や英語教材のテープなどを活用しながら英語の音声になじませる工夫が求められる。また、リスニングの能力は人生の早い時期であるほど習得しやすい。そのため、中学校の段階では、できるだけ多くの「自然な口調」の英語を聞かせることが効果的な指導方法である。

「話す」力をつけるには

では、話す力はどのようにして身につければよいか。英語を話す力は、実際に英語を話してみても身に付くものである。そのためにはALTの生きた英語を十分に活用し、学習した表現を実際に試してみ、通じた喜びを直接体験させることが重要である。

3. チーム・ティーチングの現状と改善に向けて・・・

ところが、現場においては、ALTとJTEの協力不足や、毎日の忙しさに追われて指導に工夫がないなど、チーム・ティーチングのメリットが生かされておらず、不完全な活動となっているのが現状である。したがって、生徒にも実践的なコミュニケーション能力が育たないという問題点がある。

このような現状を改善するには、生徒についてはもちろん、JTEとALTがお互いのことをよく理解した上で、指導上の工夫をすることが大切になってくる。そこで、チーム・ティーチングの改善を阻む原因は何かということ、ALTへのアンケートより探ってみることにした。

・「JTEとの打ち合わせの時間は、ちょうどいい、短すぎる、長すぎる、のどれですか。」という問いに対しては、「短すぎる」という答えが圧倒的に多い。

・「JTEとの授業の評価が必要だと思う時はどのくらいありますか。」という問いに対しては「頻繁に」という答えが圧倒的に多いのに対して、「JTEとの授業の評価はどのくらい行いますか。」の問いに対しては「めったにない」という答えが圧倒的に多い。

・「ALTとしての仕事は全体的にみてどうですか。」「JTEとのチーム・ティーチングの授業でどのくらいうれしいと思いますか。」という問いに対しては肯定的な答えが多いが、「学校でうれしくないと思うのはどんな時ですか。」の問いに対しては様々な考えが出されている。

以上のことをまとめてみると、次のようになる。

・ALTは有効活用されていない

・授業の打ち合わせ時間の不足

授業の5分前に言われては頭の準備が無理

ゲームをするにしても目的がないと効果がないので打ち合わせが必要

ALTが授業において何をすればいいのか教えてほしい

実際に教えるチャンスに恵まれたと思って日本に来たのに、プラン作りは

参加できない→教えているという感じがしない

授業の中にもっと会話を！

・授業後の評価不足

授業はどうだったのか、どうすれば改善するのか話し合いたい

・3年生の授業でもっとチーム・ティーチングのチャンスがあれば生徒に

もっといろいろなことをしてあげられるのに、と残念

・ヒューマンテーブルコーダーのように感じたり、何もすることがなく教室の隅に

立っているだけなのはつらい

・難しい文法の説明やスペルの難しい単語について突然聞かないでほしい

・日程の変更について聞かなければ教えてくれないので慌てることある

先日、小学校でのALTによる英語の授業の参観及び体験的参加の実践を行った。小学校でのALTによる英語の授業を体験するのは私にとって初めての経験であり、来年度この子ども達を中学校で受け入れた場合、特に年度当初の英語の授業をどう組み立てるかという点で大きな参考となった。

さらに効果的なチーム・ティーチングの授業を作っていくためには、事前の打ち合わせを十分に行うことが必要であるということ、また、ALTの方がその小学校や子ども達のことをよく知っているという、逆の立場に立ってみて、自分が今から持つ授業の中で、知らない子ども達の前に立ち、何をすればよいのか、そして授業の目標や流れなどがわからないと大変不安になるということを感じた。

また、「あなたはJTEに対してどんなことを期待していますか。」という問いに対しての答えをまとめてみると、次のようになる。

・授業でどんなことをするのか事前に教えてほしい

・日程の変更を教えてほしい

・生徒の前でできるだけ英語で話す。そのためにはALTと練習して英語をじょうずに

・ALTともっと時間をすごしてほしい。

・一緒に準備、プリントを事前に見せる

・文法指導は自分でやってほしいが、他のところではALTにも出番を

・自分の英語や教室運営に自信を持つ

・一緒に協力して成長する(お互いに)

・事前にALTにプランを見せる。そしてALTに準備する時間を与える。

・ALTはおもしろい要素を持っているので、生徒のために思ったらALTを使うべき

さらに、「日本人にとって英語の会話が必要なのはどんな場合だと思いますか。」「教科書のどんな話題や場面を広げたり発展させたいと思いますか。」という問いに対する答えをまとめ、チーム・ティーチングの活動における年間指導計画に組み入れてみた。

Team Teaching Plans focusing on Listening and Speaking

grade	the 7th grade	the 8th grade	the 9th grade
semester	• Songs	• Songs	• Songs
1	• First Meeting with ALT (Greetings・Self-Introduction) • Introduction of a person with a poster of a star • Tanabata Festival Write their wishes on the papers • Everyday Conversation	• Speech (Show and Tell) • Shopping • Diary...verbal diary • Sightseeing (place or shop to recommend) • What do you want to be? Interview with the teachers • Plans for summer vacation • Hanagasa Festival	• Japanese cultures To ALT "What would you like to learn about Japan?" • School Trip • Farewell Message What was the most impressive activity for you?
2	• At a burger shop Taking cards Order or take order with a pencil and serve • Halloween Party • Christmas Songs • Cultural Differences • On the phone1	• Asking the Way using Yamagata map using Kaminoyama map using school ground plan • Let us tell you about Japan. • Kakashi Festival • Play • Christmas or Greeting Cards E-mail	• Hiroshima listening to ALT's story about Hiroshima in English • On the phone3 (Answering machines, Messages) • Shopping • Let's Try Discussion or Debating • Christmas Game
3	• At the sightseeing spot • Making a video Introduction of our school • Kasedori Festival	• Introduction of the Movies • St. Valentine's Day • Hinamatsuri • On the phone2 (transferring calls)	• Listening Test • Collection of autographs at graduation • Farewell Messages
目標	教科書の表現を使って日常的な場面の会話を行うことができる	教科書に出てきた表現をもとに身の回りの出来事や自分の考えを表現できる (聞いて理解できる)	文化や社会的な問題などの幅広い話題について、自分の意見を既習表現を用いて表現できる (聞いて理解できる)

4. より効果的なチーム・ティーチングの授業の実践に向けて

先に述べた現状、ALT へのアンケートから出てきた問題点、そして JTE に期待することなどを考え合わせると、打ち合わせと評価を組み入れ、また、ALT のアイデアなどを生かした活動を入れて、授業を仕組むことがチーム・ティーチングの授業に有効であり、実践的コミュニケーション能力の育成に役立つのではないだろうかと考える。そこで、チーム・ティーチングの活動における年間指導計画を活用した授業のプランの例を考え、これをもとに、ALT と打ち合わせを行い、授業の準備をすすめていく、といった実践を図ってきたい。

チーム・ティーチングの授業のプラン

- (例) (1) 始めの活動 (10分)・・・あいさつ・歌 (含穴埋めなど)
 (2) 中心となる活動 (30分)・・・Activity (using the textbook)
 (without using the textbook)
 (3) おわりの活動 (10分)・・・評価カード記入 (生徒・JTE・ALT)
 あいさつ

一時間の活動を、大きく (1)、(2)、(3) の3つに分けて考えてみる。(1) では、あいさつと始めの活動を行う。始めの活動は、歌や (2) の活動の内容を考えて必要な単語の練習などをゲームで行ったりする。(2) では、教科書を使った活動や、教科書を離れた活動などを ALT と相談しながら組み入れていく。ここに前述の年間指導計画にある活動を組み入れていく。(3) では、生徒・JTE・ALT が同時にそれぞれの評価カードに記入を行い、次時に生かしていく。

ここで、(1)、(2)、(3) のそれぞれの活動の例を以下にあげてみたい。

(1) Songs for the 9th grade students

Let It Be

Over the Rainbow

Loch Lomond

We Wish You A Merry Christmas

Yesterday

The Long And Winding Road

Imagine

Please Mr.Postman

Yesterday Once More

My Heart will Go on

All You Need is Love

Top Of The World

Ob-La-Di, Ob-La-Da

Bridge Over Troubled

Water

The Sound Of Silence

Just Called To Say I Love You

Take Me Home, Country Roads

How Deep Is Your Love

Have You Never Been Mellow

My Way

※下線は教科書に記載されているもの。

○ Songs → songs can give the students confidence and they have interest in English songs and also in English



V 成果と課題

1. 成果

- ◎ ALT へのアンケートをとることにより、ALT の意識やアイデアなどを聞くことができ、チーム・ティーチングだけではなく、つきあっていく上での基本となる考え方を学ぶことができた。
- ◎ 普段は忙しさに追われて十分に案が練られないまま授業にのぞんでいることが多かったが、いろいろな活動などを学び、これからの授業に役立つ、具体的なものを考えることができた。
- ◎ 実際に ALT とのチーム・ティーチングを体験したり、ALT の研修会に参加することにより、普段の学校生活ではできない体験をすることができた。

2. 課題

- ◎ 指導要領の改訂に合わせて研究を行ったが、机上での考えである部分も多いので、現場に戻り、実際に使用することにより検討を加え、改善を図っていきたい。
- ◎ 教材の変化に伴って、活動などを見直し、さらに幅を広げていく必要がある。

生徒は ALT の授業を楽しみにしている。私一人では難しいことも、ALT といっしょならできると感じさせられる。

私は英語の教師である。生徒達に英語の知識を教えるだけでなく、英語を使うことの楽しさをも伝えていきたいと思っている。「日本人だからわからなくてもいい。」そう言う生徒もいるだろう。しかし、英語で会話ができる、そして、多くの人に出会えるということは、人生を何倍にも豊かなものにしてくれるのである。生徒とのつき合いも、ALT とのつき合いも、同じ人間として相手を尊重する気持ちを大切にしながら、私自身学び続けていきたい。



最後になりましたが、今回の貴重な研修の機会を与えてくださった山形県教育委員会はじめ上山市教育委員会の諸先生方に心から感謝申し上げます。

また、ご指導下さいました山形県教育センター鈴木強太所長はじめ諸先生方にも心から感謝申し上げます。直接、指導をしてくださった佐藤俊一指導主事にはこの場を借りて心から感謝申し上げます。

さらに今回、快く研修に出して下さった勤務校である上山市立北中学校東海林裕校長先生はじめ諸先生方にも感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

「予防的・開発的カウンセリングをいかした学級経営の研究」

——問題を未然に防ぐプログラムの試行を通して——

東根市立神町小学校
教諭 奥山 勇

目次

I 研究の概要	
1 主題設定の理由と研究のねらい	1
2 研究仮説	1
3 予防的・開発的カウンセリングをいかした学級経営が求められる背景	1
4 本研究の構造	2
II 問題を未然に防ぐプログラムの試行	
1 問題を未然に防ぐプログラム作成の流れ	3
2 アンケートの結果と考察	4
III 問題を未然に防ぐプログラム	
1 プログラムの作成にあたって	5
2 問題を未然に防ぐプログラム	5
IV 研究のまとめ	
1 成果	9
2 課題	9

主な参考文献

「変化する子どもと信頼関係を築く学級経営の研究（2年次）」		県教育センター
「学級崩壊指導の手引き」	松原 達哉	教育開発研究所
「教師のためのカウンセリング技術」	松原 達哉	教育開発研究所
「実践入門教育カウンセリング」	小林 正幸	川島書店
「学校現場で使えるカウンセリング・テクニック上・下」	諸富 祥彦	誠信書房
「子どもの心を育てるカウンセリング」	國分 康孝	学事出版
「カウンセリングを生かした授業づくり」	松原 達哉	学事出版
「サイコエジュケーション」	國分 康孝	図書文化
「やさしいブリーフセラピー」	森 俊夫	ほんの森出版
「エンカウンターで学級が変わる」	國分 康孝	図書文化
「ソーシャルスキル教育で子どもが変わる」	國分 康孝	図書文化
「学級づくりスタートダッシュ」	諸富 祥彦	図書文化
「ショートエクササイズ集」	國分 康孝	図書文化
「実践的研究のすすめ方」	群馬県教育研究所連盟	東洋館出版社

I 研究の概要

1 主題設定の理由と研究のねらい

学級では、日常的に様々な問題が発生している。学級崩壊という現象も起きている現在、問題を早期に発見し対応していくことが、学級経営に求められている。

そこで、よりよい学級経営をするために、予防的カウンセリング（問題を未然に防ぐカウンセリング）と開発的カウンセリング（問題をまねかないために子ども達の心理的な健康を増すカウンセリング）を導入することが有効なことと考え、この主題を設定した。

研究では、「休み時間、特別活動、授業」の児童の実態に対応した「問題を未然に防ぐプログラム」を作成し、協力学級で実践し、検証していく。

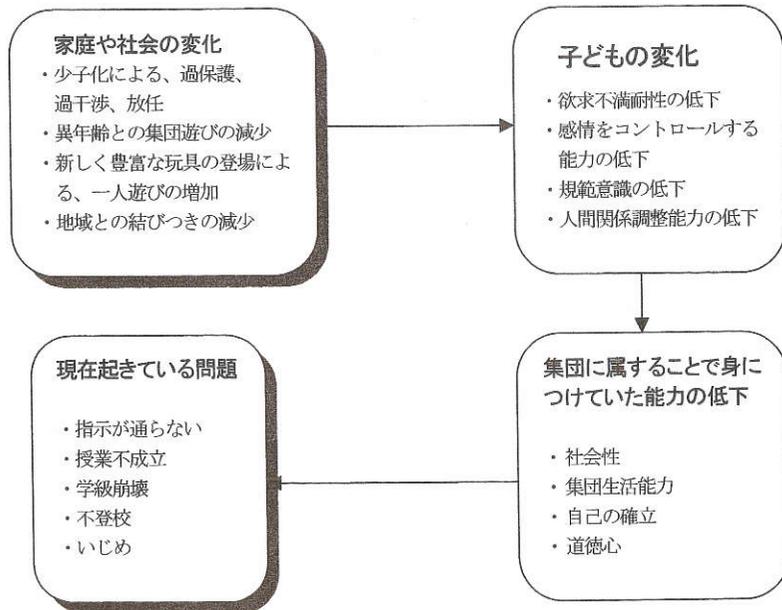
2 研究仮説

休み時間、特別活動、授業などの活動場面に応じて、予防的・開発的カウンセリングの手法を導入すれば、問題を未然に防止して、健全な学級づくりができるだろう。

3 予防的・開発的カウンセリングをいかにした学級経営が求められる背景

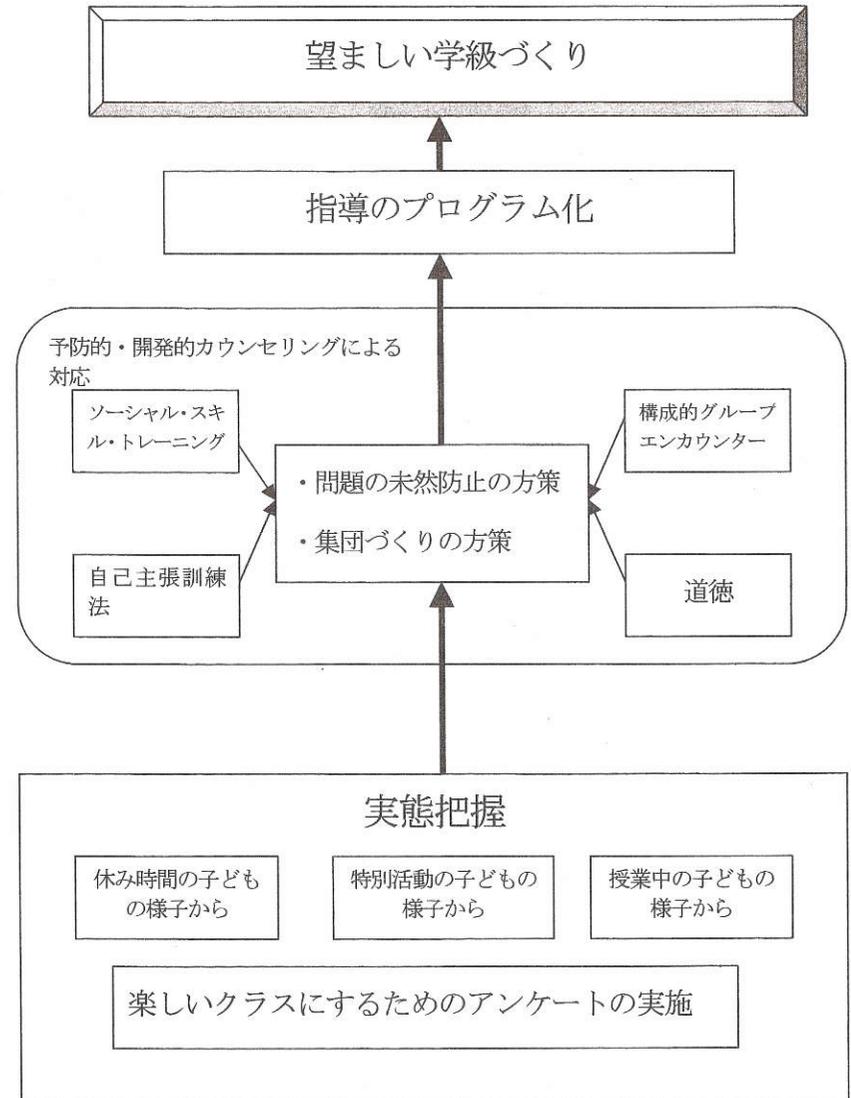
家庭や社会の変化によって、子ども個人が変わってきた。変化した子ども達の集団では、本来、集団に所属することで身につけていた能力が育成されにくくなっている。

よって、このような集団に、問題対処的な学級経営を行っても、子どもが指導を受け入れにくくなっている。その中で、様々な問題が起きているという背景がある。



4 本研究の構造

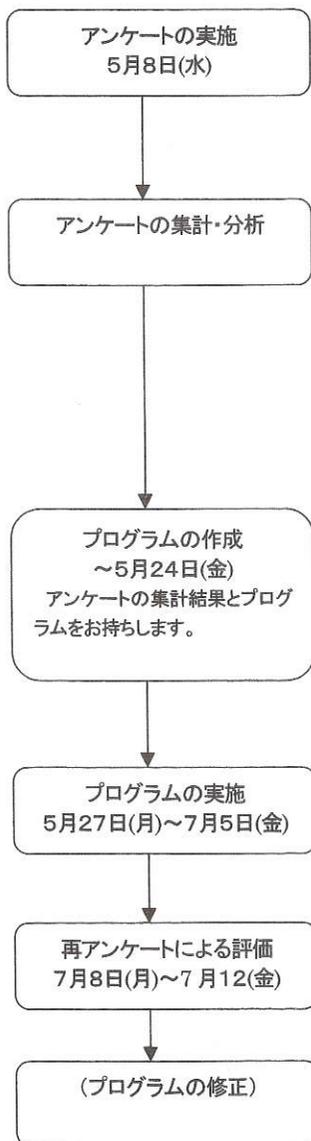
以上のような背景を考えると、画一的な学級経営や、問題が起きてから対応するような学級経営では、望ましい学級づくりが難しくなっている。そこで、学級の実態を「休み時間」「特別活動」「授業中」の3つの場面から判断し、実態に合わせた対応が必要になってくる。



II 問題を未然に防ぐプログラムの試行

1 問題を未然に防ぐプログラム作成の流れ

今回の研究では、以下のようにアンケートプログラム作成、実施を行った。



- ・アンケートは「休み時間」「特別活動」「授業」に分けたものを実施。
- ・アンケートは各カテゴリーで4問。1→4にいくほど「心荒れ」の度合いが重い。

*個人集計別の分析

- ・個人の得点を集計し、各カテゴリーのポイントが12点未満の人数を求める。
- ・12点未満の人数が、学級の2割以上の人数がいる場合は方策が必要。

*質問項目別の分析

- ・解答が1、2の合計人数を求める。
- ・合計が学級の2割以上の設問について方策が必要。
- ・各カテゴリーとも1より4の方が多く場合には、早めの対応が望まれる。また、1の方が多く場合は、時間をかけて行ってもよい。
- ・プログラム例

・休み時間の低ポイント児童が多い。
・言葉づかい、口げんかが多い。
→信頼関係を深めるショートエクササイズ。
信頼関係を深めるSGE、SST。

・授業中に先生や友達の話を開かなかったり反応しない児童が多い。
→話を聞く、話すショートエクササイズ。
子どもの話に耳を傾け、受容、共感する。

- ・自己主張訓練法と道徳については、5月に理論がまとまっていなかったため、入れなかった。SGE、SST中心のプログラムになっている。
- ・神町小学校、3年1組、2組、3組、4組の4クラスでそのクラスごとにプログラムを組み、5週間実施。

- ・再アンケートをとり、学級の変化を分析・検証して再プログラムをする。

2 アンケートの結果と考察

(1) 低ポイント児童の比較

各カテゴリーのポイントが12点未満の児童の人数を示した。人数が少なくなっているほど、改善されていることを示している。(●は改善されたことを示す)

	休み時間		特別活動		授業中	
	5月	7月	5月	7月	5月	7月
3年1組	8人	10人	3人	5人	10人	11人
2組	11人	●8人	4人	●2人	7人	●4人
3組	6人	●4人	2人	4人	5人	●2人
4組	9人	●8人	4人	6人	11人	●9人
4年1組	6人	実施せず	4人	実施せず	8人	実施せず
2組	6人	●3人	1人	4人	11人	●10人
3組	7人	●6人	4人	●3人	10人	●4人

(2) 質問項目集計の比較

プログラムで示した、改善すべき項目の人数を比較した。

(回答2・1の合計が2割以上の人数。●は改善されたことを示す)

実施学級	カテゴリー	質問項目	5月	7月
3年1組	休み時間	友達とのことばづかい	7人	8人
	授業中	先生の質問にうなずいたり	12人	●8人
	授業中	友達の意見にうなずいたり	7人	13人
3年2組	休み時間	友達と口げんか	8人	11人
	特別活動	友達と協力して仕事	6人	●4人
3年3組	休み時間	友達を助ける	8人	●4人
	休み時間	友達と口げんか	9人	●2人
	休み時間	仲間はずれ、無視、悪口	6人	●3人
	授業中	先生の質問にうなずいたり	9人	●4人
	授業中	むだ話をしないように	6人	●2人
3年4組	休み時間	友達とのことばづかい	6人	●5人
	休み時間	友達とけんかしないように	10人	●5人
	授業中	先生の質問にうなずいたり	13人	●8人
	授業中	友達の意見にうなずいたり	12人	●11人

(3) 考察

① プログラム作成の方針について

プログラムで示したSGEやSSTなどにより、学級の状態が改善されることが分かった。今回利用したエクササイズは次のような視点で選択した。

- ・児童が分かりやすいように、すぐにできそうなもの。
- ・場所や時間に制約されないもの。

② プログラム作成をする際の注意点

特別活動が悪化している状況を見ると、特別活動などに、自己主張訓練法や道徳をとり入れていく必要がある。

III 問題を未然に防ぐプログラム

1 プログラムの作成にあたって

5月27日～7月5日までのプログラムの試行を経て、改めてプログラムを作り直した。アンケートの結果からも、プログラムに妥当性があるものと考えている。プログラムの試行では、道徳や自己主張訓練法は組み入れなかったため、このプログラムには入れてある。

本研究は、問題が起きる前に予兆を察知し、カウンセリングの技法や道徳などを通して、問題が起きるのを予防していくのが大きなねらいなので、アンケートの結果からすぐに対応できるようにした。

構成的グループエンカウンターとソーシャルスキルトレーニングについては、実践書がかなり出ているので、その書籍をそのまま使うこととし、出典を記号で記述した。

A：「エンカウンターで子どもが変わる」國分康孝・岡田 弘 著（図書文化）

B：「学級づくりスタートダッシュ」諸富祥彦 他 著（図書文化）

C：「エンカウンターで学級が変わる」國分康孝 他 著（図書文化）

D：「エンカウンターで学級が変わる」國分康孝 他 著（図書文化）

E：「ソーシャルスキルトレーニングで教育が変わる」小林正幸 他 著（図書文化）

また、オリジナルのエクササイズについては紙面の関係上割愛した。

道徳については、学研の副読本を使用し、単元名を載せた。

自己主張訓練法については例題等を作成したが紙面の関係上割愛した。

なお、ことばについては下記のように省略して記述した。

SGE：構成的グループエンカウンター

SE：ショートエクササイズ（構成的グループエンカウンターで、短時間でできるもの）

SST：ソーシャルスキルトレーニング

AT：アサーショントレーニング（自己主張訓練法）

2 問題を未然に防ぐプログラム

「休み時間」

質問1「言葉づかいに気をつけているか」低ポイントの場合の活動例

方針：聞く、話すことにより、自己理解・他者理解を増すような内容

活動名	出典・参照	方法	内容	時間
あいさつリレー	E-50 ページ	SST	あいさつ（基本スキル1）	学活
友達ふやそう	E-54 ページ	SST	自己紹介（基本スキル2）	学活
そうだねゲーム	E-60 ページ	SST	上手な聴き方	学活
元気の出る聴き方	E-62 ページ	SST	上手な聴き方（基本スキル3）	学活
インタビューをしてみよう	E-65 ページ	SST	上手な聴き方（基本スキル3）	学活
新聞記者ゲーム	E-65 ページ	SST	上手な聴き方（基本スキル3）	学活
おしえて下さい	E-68 ページ	SST	質問のしかた（基本スキル4）	学活

質問2「友達がこまっていたら、助けようとしていますか」低ポイントの活動例

方針：心情に訴えるものが適切なので、道徳の授業をする。

活動名	出典・参照	方法	内容	時間
ニわのことり	1年 学研副読本		仲良く助け合う	道徳
ひろったビスケット	2年 学研副読本		助け合うことの大切さ	道徳
貝がら	3年 学研副読本		信頼し助け合う	道徳
オトちゃんルール	4年 学研副読本		相手の立場を理解し助け合う	道徳

質問3「口げんかやけんかをしないように気をつけていますか」低ポイントの活動例

方針：心情に訴える道徳や、友達と仲良くするSST

活動名	出典・参照	方法	内容	時間
はしのうえのおおかみ	1年 学研副読本		相手への思いやり	道徳
ともだち先生	2年 学研副読本		助け合って生活すること	道徳
絵はがきと切手	3年 学研副読本		信頼し助け合う	道徳
いのりの手	4年 学研副読本		互いに理解し助け合う	道徳
すれちがい	5年 学研副読本		他の人の意見も大切にする	道徳
お別れ会	6年 学研副読本		異なる意見にも耳を傾ける	道徳
あたたかい言葉シャワー	E-86 ページ	SST	あたたかい言葉かけ (基本スキル7)	学活
いっしょに遊ぼうゲーム	E-74 ページ	SST	仲間の誘い方 (基本スキル5)	学活
いっしょに遊ぼう週間	E-77 ページ	遊び	みんなで遊ぶ	休み時間
いーれて	E-80 ページ	SST	仲間の入り方 (基本スキル6)	学活
クマとあなぐらゲーム	E-83 ページ	SE	仲間の入り方	朝帰
友達ふやそう大作戦	E-92 ページ	SST	気持ちをわかって働きかける (基本スキル8)	学活
私のお願い	E-98 ページ	SST	やさしい頼み方 (基本スキル9)	学活
上手な断り方	E-104 ページ	SST	上手な断り方 (基本スキル10)	学活

質問4「仲間はずれ、無視、悪口に気づいているか」低ポイントの活動例

方針：心情に訴える道徳や、問題を解決しようとするSST

活動名	出典・参照	方法	内容	時間
くりのみ 1年	学研副読本		仲良くし、助け合う	道徳
こうえんのおにごっこ 2年	学研副読本		相手の本当の気持ちを考えて	道徳
明るくなった友達 3年	学研副読本		仲良くし、助け合う	道徳
もどらない友達 4年	学研副読本		互いに信じ合い、助け合う	道徳
ことばのおくりもの 5年	学研副読本		協力して生活する	道徳
いじめられて 6年	学研副読本		互いに認め合い助け合う	道徳
勇気をためる自己会話	E-110ページ	SST	自分を大切にする(基本スキル1)	学活
解決策がいっぱい	E-120ページ	SST	トラブルの解決策を考える(基本スキル2)	学活
イライラオニを追い出そう	E-125ページ	SST	トラブルの解決策を考える(基本スキル2)	学活

「休み時間」のポイントが全体的に低い場合の活動例

方針：信頼体験を深めるSGEやSEを行う

活動名	出典・参照	方法	内容	時間
新聞パズル	B-96ページ	SGE	新聞を元通りに協力する	学活
だれのこと	オリジナル	SGE	いいところを書いて当てる	学活
無人島SOS	A-150ページ	SGE	協力して意見を述べ合う	学活
私はわたしよ	A-152ページ	SGE	自分のいいところを見詰め合う	学活
アドジャンで楽しく語ろう	B-128ページ	SGE	自分のいいところを見詰め合う	学活
あわせアドジャン	D-122ページ	SGE	同じ数を出して気持ちを合わせる	学活
聖徳太子ゲーム	A-136ページ	SE	同じ言葉を使って仲間意識を育てる	朝帰
いまなんじ?	オリジナル	SE	手を握り合い、時間をあてる	朝帰
かたもみじゃんけん	オリジナル	SE	じゃんけんして肩をもむ	朝帰

「特別活動」

質問5「自分の仕事をがんばっているか」

質問6「友達と協力して仕事をしているか」低ポイントの活動例

方針：どちらも役割の中で活動するので、道徳やアサーショントレーニングを行う。

活動名	出典・参照	方法	内容	時間
はたらけせつせ	学研副読本		自分のやることをくじけず行う	道徳
ブッパとバツパ	学研副読本		自分からすすんで整える	道徳
朝のそうじ	学研副読本		働くことの大切さ	道徳
かべにつけた手のあと	学研副読本		学校を大切にすること	道徳
まごころのボランティア活動	学研副読本		公共のためにつくす心	道徳
きえた紙くず	学研副読本		協力してよい学校を作る心	道徳
給食の後片付けで		AT	自分の主張をしながら協力する	学活
そうじのとき		AT	自分の主張をしながら協力する	学活
黒板係で		AT	自分の主張をしながら協力する	学活

質問7「クラスで楽しい活動をするとき、みんなといっしょに楽しんでいるか」

質問8「クラスで楽しい活動をするとき、仲良く活動しているか」低ポイントの活動例

方針：信頼体験を深めるSGE、SEを行う。7ページのエクササイズと同じ。

「授業中」

質問9～質問12までで、低ポイントの活動例

方針：聞く、話すに関わるSE、SGEを行う。

活動名	出典・参照	方法	内容	時間
まほうのかがみ	オリジナル	SE	リーダーの動作をまねる(聞く)	朝帰
ぱくぱくゲーム	オリジナル	SE	リーダーの口の動きを当てる(聞く)	朝帰
これなに?	オリジナル	SE	リーダーの動作を当てる(聞く)	朝帰
いまなんじ?	オリジナル	SE	時間を当てる(聞く)	朝帰
サイコロトーク	A-158ページ	SE	テーマについて話す(話す)	朝帰
無人島SOS	A-150ページ	SGE	テーマについて相談する	学活
質問ジャンケン	A-132ページ	SE	テーマについて話す(話す)	朝帰
朝の1分間スピーチ	A-52ページ	SE	自分のテーマを話す(話す)	朝帰
インタビューゲーム	B-58ページ	SE	質問に答える(話す)	朝帰

IV 研究のまとめ

1 成果

(1) 研究の概要について

様々な実践や文献、書籍に触れて、予防的・開発的カウンセリングをいかした学級経営の構造図を作成できた。今後、現場で学級経営や研修の場で実践し、一般化していきたい。

(2) プログラムの作成について

- ・ 構成的グループブウンカウンターについてはこれまで実践していたが、「ミンミンなかまづくりセミナー」などで、リーダーの心得などを集中して学ぶことができた。
- ・ ソーシャルスキルトレーニングや自己主張訓練法については、自分自身実践が少なかったが、講座や文献を通して学習することができた。授業としての流れや、時間の取り方など、具体的な取り入れ方を提案できたものとする。
- ・ 道徳については、予防的・開発的要素があることは以前から考えていたが、今回の研修で体系的に調べることができた。道徳の目標を見据えつつ、アンケートに対応した時間設定を今後行っていきたい。
- ・ アンケートを2度行ったことによって、プログラムの改善点が分かった。エクササイズを行う期間や間隔、量などで改善すべき点があったので、今後新しいプログラムに従って続けていきたい。

(3) 問題を未然に防ぐプログラムについて

今回の研修では、カウンセリングの技法や道徳を組み合わせることによって、プログラムを作ることができたことは大きな成果と考える。今後、勤務校にて実践していきたい。

2 課題

- (1) 今回作成したプログラムは、学級活動や道徳の時間を使って行うものが多い。指導計画に無理があつては、特別活動のねらいや道徳のねらいを十分に満たせないで、時間の確保が課題になってくる。総合の時間や他教科との時間の調整をしていく必要がある。
- (2) 今回作成したプログラムは、すぐに学級で使えるものを作りたいという意図があつた。プログラムの精度を高めるために、実践、修正を続けていくことが必要である。
- (3) この研究では、教科に触れることはなかったが、カウンセリング・マインドのある授業も必要と感じた。「授業中」の項目のポイントが低い時、「話を聞く」「話をする」エクササイズだけで改善しようとしても、無理がある。カウンセリング・マインドのある授業として、
 - ・ 対話のある授業
 - ・ 発言不安をなくす指導の工夫を今後研究していきたい。

おわりに

長期研修を終えるにあたり、今回の貴重な研修の機会を与えて下さった山形県教育委員会並びに東根市教育委員会の諸先生方に心から感謝申し上げます。

また、6ヶ月という長期にわたりご指導下さいました山形県教育センター所長の鈴木強太先生はじめ諸先生方、とりわけ、お忙しい中ご指導下さいました竹田真知子部長、担当指導主事の西村仁美先生はじめ教育相談部の先生方に、心から感謝申し上げます。

最後になりましたが、研修にあたり様々なご配慮を頂きました勤務校である永澤校長先生はじめ、アンケートや実践をしていただきました3年4年担任の先生方、その他諸先生方に心から感謝申し上げます。

平成14年度 山形県教育センター長期研修

学級において児童一人一人が 楽しくかわり合える望ましい人間関係づくり ～支持的風土を生み出す児童主体の活動を通して～

松山町立内郷小学校
教諭 鈴木 有人

目 次		
I	主題設定の理由と研究のねらい	1
II	研究仮説	1
III	研究方法	1
IV	研究の実際	1
	1. 基礎研究	1
	(1) 望ましい人間関係とは	
	(2) カウンセリング・マインドで子どもを見つめ直す	
	(3) 感性教育で心を育てる	
	2. 実践研究	3
	(1) ソーシャルスキル・トレーニング (SST)	
	(2) 構成的グループ・エンカウンター (SGE)	
V	研究のまとめ	6
	1. 研究の成果	
	2. 今後の課題	
VI	おわりに	6
※	参考資料 (これまでの実践例)	7
	1. 体ほぐしの運動	
	2. ユーモア詩、ユーモア俳句	
	3. 指名なし討論	
	4. フルマラソンに挑戦	

主な参考文献

- ◆ 「教師と生徒の人間づくり」第1～3集 國分 康孝 監修・ 瀝々社 1986～1988
- ◆ 「個を生かす集団活動と学級文化の創造～学級経営の秘策12の実践アイデア～」 宮川 八岐・東洋館 1997
- ◆ 「好ましい人間関係を育てるカウンセリング」手塚 郁恵・学事出版 1998
- ◆ 「夢と希望を育てる生き方の教育」内藤 勇次・学事出版 1997
- ◆ 「新しい学級づくりの技術」有田 和正・明治図書 1999
- ◆ 「笑って伸ばす子どもの力～ユーモア詩が教える子育てのコツ111章～」 増田 修治・主婦の友社 2002
- ◆ 「感性教育による学級変革～感性・心の教育③～」 高橋 史朗・明治図書 1999
- ◆ 「感性教育による教師変革～感性・心の教育④～」 高橋 史朗・明治図書 1999
- ◆ 「学級経営 重要用語300の基礎知識」高旗 正人・明治図書 2000
- ◆ 「教育相談 重要用語300の基礎知識」 鐘 幹 八郎他・明治図書 1999
- ◆ 「教師だからできる5分間カウンセリング」吉本 武史・学陽書房 2000
- ◆ 「子どもの対人関係能力を育てる」津村 俊充・教育開発研究所 2002
- ◆ 「話を聞いてよ、お父さん！比べないでね、お母さん！」 増田 修治・主婦の友社 2001
- ◆ 「明るいとーんの個が育つ学級づくり」竹川 訓由・明治図書 1997
- ◆ 「思いやりの心を育てる～学校と家庭が手をたずさえて～」 藤井 喜代美・明治図書 2002
- ◆ 「ソーシャルスキル教育で子どもが変わる」 國分 康孝 監修・図書文化 1999
- ◆ 「たのしい学校生活を送るためのアンケート Q-U実施・解釈ハンドブック」 田上 不二夫 監修・河村 茂雄 著・図書文化 1999

I 主題設定の理由と研究のねらい

21世紀を迎えたとは言え、社会では先の見えない混迷の時代が続いている。長引く不況に加え、犯罪の低年齢化等、日々目を覆いたくなるような報道が後を絶たない。

教育界に目を向けると、いじめ・不登校・学級崩壊といった問題に歯止めがかからず、児童にとって、もはや学校は、楽しい場所ではなくなりつつある。

これらの問題の多くは、少子化による人間関係の希薄化、小規模校においては幼少期からの固定化された人間関係などに起因するものが多い。事実、ここ数年、私が担任している学級における児童間のトラブルに接してみても、例えば遊びであれ、話し合いであれ、友達同士のかかわり方がもう少し上手にできていれば、未然に防ぐことができたであろう事例は少なくない。

学校・学級は児童にとって、一つの小社会である。また、時代が変わろうとも、児童は、「学校は、楽しい場所でありたい。友達と仲良くなりたい。」という願いを持っているはずである。ならば、児童にとって一つの小社会の根幹となる「楽しい学級とは何か。」ということについては私を考えるようになった。

私は、教師と児童、児童相互の望ましい人間関係づくりを円滑に進めることができれば、児童一人一人が自分の価値に気づき、楽しい学校生活を送ることができるだろうと思う。また、教師自身の感性の変革によっても児童相互に思いやりの心が育ち、支持的風土が生まれるだろうとも考える。

そこで、学級経営の基盤となる人間関係づくりの理論についての研究を通して、児童一人一人に対する自己肯定感の持たせ方や教師による共感的理解のあり方について一般化、体系化していきたいと考え、本主題を設定した。

II 研究仮説

仮説

教師が児童を共感的・肯定的に見つめ直し、明るくユーモアをもって前向きに接していけば、児童一人一人が自分や友達のよさに気づき、お互いに心を開いて認め合う雰囲気が高まり、支持的風土にあふれた温かい人間関係を作ることができるだろう。

III 研究方法

1. 文献による基礎研究

- (1) 学級経営、人間関係づくりに関する情報及び資料の収集
- (2) カウンセリング、感性教育の理論と方法に関する研究
- (3) これまでの実践分析

2. 実践研修(所内講座、所外研修会への参加等)

- (1) カウンセリング技法の演習(電話相談、来所相談)
- (2) 所属校でのソーシャルスキルトレーニングの試行
- (3) 公開授業研究会、講演会への参加
- (4) 学級経営、人間関係づくりのあり方についての考察と今後の方向性の検討

IV 研究の実態

1. 基礎研究

(1) 望ましい人間関係とは

教育という営みは、教師と児童との信頼に満ちた人間関係の上に成り立っている。今、児童に必要なのは、愛情、尊敬、信頼に満ちた援助的な人間関係づくりである。そこでは、児童は安心してありのままの自分であられ、互いに理解し認め合い、共に育つことができる。望ましい人間関係をつくり出すのは教師である。カール・ロジャースは、望ましい人間関係をつくり出す教師の基本的な態度として次の3つの特徴をあげている。

- 真実さ・・・素直で、誠実な人間であること。
- 尊重と受容・・・子どもの気持ちがあるがままに受け入れること。
- 共感的理解・・・子どもの立場、子どもの目で内面や気持ちを理解しようとする。

こうした態度を継続的に示していくことによって、私は、児童一人一人には、安心して心の居場所を獲得する「自己肯定感」が育ち、集団としては自信と信頼、思いやりに満ちた「支持的風土」が生まれるだろうと考える。

「自己肯定感」とは、長所・短所を含めて自分のことをありのまま好きになる感情のことである。どの児童の中にも、「よい自分と悪い自分」「美しい自分と醜い自分」が存在しており、その両者がうまく同居して感情をコントロールしていくことによって、人間というものは等身大の自分を受け止め、心の居場所や生き甲斐を見出していくことができるのだと思う。しかし、児童はなかなか自分から自己肯定感を抱くことはできない。自己肯定感教える

というよりは、むしろ実感させることによって生み出されるものだからである。これを児童に実感させるには、他者から認められる体験を多く積ませる必要がある。具体的には、ほめること、聴くことなどが挙げられている。

このとき大切な教師の姿勢としては、他人との比較ではなく、その子の進歩・成長に驚きと感動を示すことと伝えよう。

いっぽう、「支持的風土」とは、児童相互がプラス思考で何でも言い合えるあたたかい雰囲気のことである。学級内に支持的風土を作り出す条件は多々考えられるが、学級のきまりを柔軟にすることや、相手の失敗を責めたり笑ったりしない思いやりの態度を児童一人一人に育てていくこと、構成的グループ・エンカウンター(SGE)やソーシャルスキル・トレーニング(SST)などの活動を通して人間関係づくりのコツを体験することなどが例として挙げられている。

このとき大切な教師の姿勢としては、児童が抱く過度な競争意識を緩和し、個性を尊重することである。いわゆる「ナンバーワン」を目指すのではなく、「オンリーワン」を目指すよう、児童を励ましていきたい。

「個には自己肯定感」「集団には支持的風土」…、この二つを学級経営の中で創造していくために、教師はどんな手立てをとればいいのか。この後、もう少し詳しくふれてみたいと思う。

(2) カウンセリング・マインドで子どもを見つめ直す

とかく「カウンセリング(教育相談)」というと、1対1の面接相談や児童の問題行動解決のための言葉による話し合いを思い浮かべる人も少なくないだろう。しかし、ここで言う「カウンセリング」とは、知情意(知性・感性・意志)のすべてにわたり、全体的な一人の人間として児童を育てる教師のかかわりというように、もっと広い意味にとらえたい。

カウンセリングの本質は、援助的なコミュニケーションである。また、カウンセリングには、治療的機能と予防的機能と開発的機能とがあるが、ここでは予防的機能や開発的機能を中心に、コミュニケーションの楽しさを児童に伝える手立てについて考えたい。

児童とのコミュニケーションを楽しむためには、教師自身が過度な役割意識や権威的な立場にとらわれない姿勢が必要と思われる。この姿勢を「ワン・ダウン」と言う。「ワン・ダウン」の簡単な方法の一つは、ユーモアを使うこと、もう一つは率直さ、児童と正直に話すことである。つまり、児童を色眼鏡で見ないということであろうか。教師自身が一定の価値基準から自由にならなければ、児童一人一人の価値も、また自分自身の価値も認めることはできないであろう。

ではカウンセリングを行う場合、教師にとってどんな心のケア技術が必要であろうか。これには、次の6つのアプローチがあるとされている。

- リソースの発見(肯定し、承認すること)
～教師は、児童との間で、問題や欠点以上に、能力やこれからの可能性ということについて、大いに語る存在であってよい。
- 傾聴と共感
～傾聴とは、アクティブ・リスニングと言われるように、積極的な行動である。
～苦しみを伴う感情や攻撃欲求などの衝動には、あまり深く共感を示さず、肯定的な感情や気持ちに深い共感を示す方が、教育的な意義がある。
- チューニング(波長合わせ:児童との間に違和感をなくすること)
～意見の対立を避け、ユーモアも交えようと効果的。
- ポジティブ・メッセージ(肯定的な表現)
～決して援助の押し売りはせずに、児童が選択できるような余地を残しておくこと。
- リフレミング(もの見方を変えること)
- メタフォーカル・アプローチ(たとえの活用)

以上6つのアプローチを総括して表現するならば、「拾おうとするな、わかるうとせよ」といったところになるか。教師自身が児童の言い分をしっかりと聴き、児童と視線を同じにすることによって、児童の自己肯定感が高まることにつながるように思う。これからは、教師自身の固定的な価値観に照らし合わせて児童の言動を頭ごなしに否定するのではなく、まずは児童を信用してみようと思う。

(3) 感性教育で心育てる

「感性」とは、価値あるものに気づく感覚のことである。言い換えれば、「感性は、ときどき」と表現することもできる。

ここで問題になるのは、「価値あるもの」「気づく感覚」とは何かである。児童の心は千差万別、さらにこれらは目に見えないものであるから、感性は人によってそれぞれちがう。このように、一人一人が感性を学級集団づくりに位置づけるにはどうしたらいいのだろうか。考えられるのは、次の3つの手立てではないかと思う。

- 共に活動する体験をさせる。
- 相互に関わり合う場を設定する。
- 価値を共有できる場を設定する。

この3つを学校生活の中に位置づけていくことによって育まれる感性はさまざまあるが、

第4学年 学級活動学習指導案

望ましい人間関係づくりにおいて不可欠な感性として、私は、「思いやり」を第一に挙げたい。

児童の思いやりは、親なり教師なり、大人からの愛情によって育つ。児童に愛情を注ぐためには、教師自らが感性豊かな人間を目指さなければならないだろう。豊かな感性を持った教師とは、創造的な教師、ケアの心を持った教師、自分を開いている教師、明るくユーモアのある教師だと考えている。

教師が児童の感性に訴えていくには、児童の心の扉が自然と開けられるように、常に児童に関心を持ち続けていくことが必要であろう。本当の愛情とは、やはり、児童に肯定的関心を持ち続けていくではあるまいか。見返りを期待しない優しさを児童に伝えること、それは、大人の使命なのではあるまいか。

しかし、現代の児童に目を向けてみると、その実態は、教師が目指す思いやりとはやや様相を異にしている感じがしてならない。個性尊重を旗印に、児童は「やさしさ」と言いつつ、相手との関係の中で深入りせず、問題の起きない適度な関係を維持しながら、自分が傷つてしまうことをひたすら恐れているのではないか。言うなれば、「やさしさ」の意味の取り違えである。

そこで、感性教育において児童に身につけさせたい思いやりの中に、「勇気を持つこと」も、これから大切になっていくように思う。有田和正氏は、学級づくりにおける3つの機能として、「助け合い」「みがき合い」「牽制し合い」を掲げているが、今、最も欠けているのが、「牽制し合い」であると言う。お互いが隠し合って悪いことをするのではなく、正義感のある子が、「やめる!」とか「言いつけるぞ!」とか言って集団を統制していく光景は、事実少なくなっているように感じる。悪いことは悪いと言える児童、そんな本当の思いやりをもった児童を育てたいものである。

感性、心を育てる指導には時間がかかる。また、児童の変容もすぐには見えてこない。しかし、教師は、じっくり待つということも時には大切にしなければならない。当たり前のことを当たり前日々地道に積み重ねていけば、いつか児童の心に、美しい思いやりの火が灯り、周りを明るく温かくしてくれることを願いたい。

2. 実践研究

人間関係づくりを高める上で有効であった実践と、今後試行し、その効果を明らかにしていきたい実践を以下のとおりまとめた。

(1) ソーシャルスキル トレーニング (SST)

ソーシャルスキルとは、「良好な人間関係をつくり保つための知識と具体的な技術やコツ」のことである。授業を通して、対人関係上の問題を乗り越える方法と集団を楽しむ方法を教えるのである。

学級でSSTを行う場合は、普段はあまりしていないが、意識すればすぐにできることがちょうどよいとされている。意識さえすれば9割程度の児童ができる行動を選び、しかも、普段の生活場面では6割程度しか行われていない行動がよいとされている。

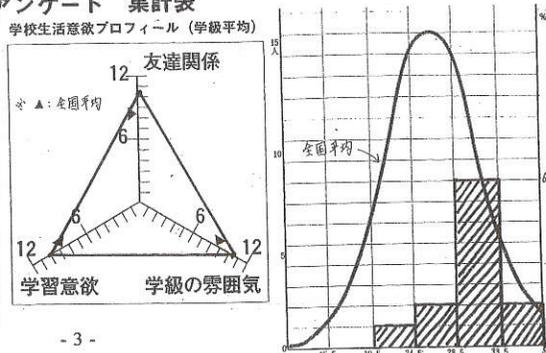
平成14年11月29日、松山町立内郷小学校第4学年児童13名を対象に人間関係づくりに関するアンケート調査を実施し、その結果をもとに学級活動の時間に授業を行った。

都留文科大教授・河村茂雄氏が考案したアンケート「Q-U〜やる気のあるクラスにするためのアンケート」の結果は下図のとおりであった。学校生活の諸活動に積極的に関わっているか、自分の活動にとっても満足している児童が多いという学級の傾向と、ごく一部の児童に対して、声かけなどを意識的にを行い、自信を持たせざる機会を多く作るという課題が明らかになった。

やる気のあるクラスにするためのアンケート 集計表

No.	名前	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	備考
1		10	9	10	17									高
2		11	11	11	33									高
3		10	10	12	32									高
4		12	11	11	34									高
5		9	11	10	30									高
6		10	10	12	32									高
7		11	10	9	30									高
8		8	11	10	29									高
9		9	8	7	24									中
10		9	7	11	27									中
11		11	11	11	33									高
12		10	10	8	28									中
13		12	12	12	36									高
平均		10.2	10.1	10.3	30.5									

学校生活意欲得点の分布



1. 活動名 「いっしょに遊ぼうゲーム」(仲間の誘い方)

2. ねらい

- 友達に誘いの言葉をかけてあげると相手がどんな気持ちになるか気づくことができる。
- 友達を誘うための具体的な方法を身につけることができる。
- 活動を通して、楽しい学校生活を送っていこうとする態度を育てる。

3. 本時の流れ

時間	主な活動	教師の発問、指示(○) 予想される児童の動き(・)	教師の支援(・)と 評価(☆)
3分	1. 児童の緊張をほぐす。 ウォーミングアップ	○ 2組に分かれてジャンケンをしませす。勝ったら、相手からカードをもらって下さい。	・あまり勝敗にこだわらず、楽しい雰囲気心がける。
7分	2. 本時のめあてを知る。 インストラクション (言語的指示)	(休み時間、一人でいる子の絵を見せながら) ○ この子は、どんな気持ちでいると思いますか? ・さびしそう ・みんなと遊びたがっている	・自分たちの学級を振り返ることはしないで、あくまでも一般的に話し合う。
10分	3. 仲間の誘い方を考える。 上手な仲間の誘い方を考えよう。 モデリング (観察・模倣)	○ 友達を誘うためには、言葉だけでなく、実は体の使い方も重要です。プリントを見て下さい。(教師や児童の実演を交えて、次の4つをおさえる。) ① 相手に近づく ② 相手をきちんと見る ③ 聞こえる声で言う ④ 笑顔で言う ○ では、先生がこの4つに注意しながら、～さんを誘ってみます。どこがよくて、どこをどう治せばもっとよくなるかを見て下さい ・声の大きさはいいです。 ・もっとちゃんと見た方がいいと思います。 ○ 誰か、挑戦してみたい人はいますか?	・プリント「心を伝える話し方」を配付。 ・左の4つのスキルは、様々な場合に共通するスキルである。以降、繰り返し学習することとする。 ・2つぐらいよくできている例を示す。 ・友達に対する言葉遣いとして、「ダメ」といった否定的な言い方は避け、「こうすると、もっとよくなると思うよ」といった肯定的な言い方を勧める。 ☆上手な誘い方を知ることができたか
12分	4. 「いっしょに遊ぼうゲーム」をする。 リハーサル (反復練習)	○ ゲームのルールを説明します。 ① 2組に分かれ、中央に児童名が記された割り箸を置く。 ② 相手チームの割り箸を引いたら、その子を誘って自分のチームに連れてくる。自分のチームの割り箸を引いた時は、戻して次の子と交代。 ③ 連れてこられた子は、全員とハイタッチする。 ④ どちらかのチームがいなくなったら終了。	・勝敗にこだわらず、4つのスキルを練習するためのゲームであることを約束する。 ・仲間が増えたことを喜ぶ言葉が出た時は大いに賞賛し、あたたかい雰囲気づくりを図りたい。 ・時間があればチームを変えて、もう一度行う。 ☆誘われた時の相手の気持ちに気づくことができたか
13分	5. 本時の感想を書く。 フィードバック (振り返り)	○ 仲間の誘い方を試してみても感じたことを書きましょう。	・代表児童数名発表 ☆これから、楽しく生活していこうとすることができたか

4. 成果 (○) と課題 (●)

- どの子どもとも生き生きと楽しく活動に取り組むことができた。
- 「遊びの中に学びあり」ゲームという疑似体験ではあったが、誘い誘われるというドキドキワクワク感を体験させられたのは児童にとって嬉しかったことだろう。これからも心地よさの体験を積ませて、児童の心を育てていきたい。
- 普段何気なくしていることでも、意識してやるとなると、仲間を誘うにはある程度の緊張と勇気があるものだということが児童の様子から学ぶことができた。人間関係づくりにも、ある程度のストレスが伴うものなのである。
- 楽しさと規範意識のバランスはどうあるべきか、学年が進むにつれてどちらも疎かにはできない問題である。
- 大人にとっては当たり前のことをここまで学校で教えなければならない時代になったのか…。

※ ふり返りカードより

今度、ぼくは、今日のように友達をたくさんさそってみんなで楽しく遊びたいと思いました。

わたしは今まで、友達をさそう時ちよつと声が小さかったなあと思いました。今度からは相手に近づき、相手を見て、聞こえる声で、笑顔で友達をさそいたいです。

ゲームで、わたしはさそわれなかったけど、声をかけられた人はうれしそうだったので、わたしもうれしくなりました。

ゲームをして〜ちゃんから「いっしょに遊ぼう。」って言われて、ぼくはずごくうれしかったです。もっと「いっしょに遊ぼうゲーム」をしたいです。

今度からは、さそい方のルールを守って友達といっしょに遊びたいと思います。でも、一番いいのは、一人ぼっちの人がいなくなるほうがいいと思います。

(2) 構成的グループ・エンカウンター (SGE)

國分康孝が開発した一技法で、近年徐々に学校で広まりつつある。特定の課題 (エクササイズ) を遂行しながら、自己理解、他者理解、自己受容、自己主張、信頼感の実感、感受性の発達などをねらいとする。また、児童相互あるいは教師と児童とのコミュニケーションを円滑にしたり、心の通い合う学級集団を作るといった効果も期待できる。とはいえ、一回の実施で学級が一変するといったような過大な期待はしない方がよい。むしろ、開発的カウンセリングとして位置づけ、継続的・系統的に年度始めに年間実施計画を立てておくといいたい。

小学校中・高学年を対象に、今後試行してみたいエクササイズの例をまとめてみた。

エクササイズ	ねらい	内容
男女争だつ破産ゲーム	男女のかかわりが自然な形で持てるようになり、集団での楽しさを味わう。	男子は女子と、女子は男子とジャンケンをし、勝ったらカードを渡す。3分たったら男女に分かれ、カードの枚数を数え勝ち負けを決める。
ブラインドウォーク	他者に身を任せるとの体験を通して、いたわりやさしさの素晴らしさを味わう。	ペアを作り、一人が目を閉じ、もう一人がその人の目になって、誘導しながら校舎内外を自由に歩き回る。誘導の際、言葉かけはしないで、いろいろな物を触れさせる。役割は交代する。
無人島 SOS	自分の考えを知り、伝え合う表現力を養う。多様な考え方に気づき、お互いを認め合える人間関係を築く。	自分が無人島に漂着したという設定で、生き抜いていくために必要な道具を個人で考えて8品目選ぶ。その後、グループで話し合っ必要品を順番に並べていく。最後にグループごとに選定理由を付け加えながら発表する。
ほめあげ大会	クラスの友達みんなを肯定的に見られるようにすることで、思いやりの心を育てる。	男女混合グループで、友達についてほめたいことを二つカードに書く。カードを見て、自分に合っていたら○、合っていなかったら×、どちらも言えなかったら△を自己評価の欄に書く。最後に、○をつけたものの中から一つを選んで発表し、認め合う。
10年後の私	自分の将来を意識化し、さらに級友と表現し合うことで自己理解を深め、学校生活を主体的に送ろうとする意欲を喚起する。	10年後の自分の姿を想像し、そこに至る軌跡を短い文章にする。一人一人が発表した後、グループで質問したり、感想や気づいたことを話し合ったりして、シェアリング (意見の分かち合い) をする。

V 研究のまとめ

1. 研究の成果

○ 自分の学級、学校を好きになることができた。

転任して間もない余裕のなきと学校週5日制元年の忙しさのせいもあって、なおかつ学級の課題ばかりが目につき、正直私は、これまで自分の学級をあまり好きになれずにいた。しかし、今回学校を離れて自分の学級を見つめ直す機会を得たおかげで、日増しに自分の学級、学校を好きになることができたような気がする。さまざまな研究を通して、学級のよさがたくさん見えてきたからだ。児童をいとおしく、ありがたく思えるようになったことに感謝している。

○ カウンセリング・マインドの不足さを実感

私は、「ほめ下手・聴き下手・認め下手」な教師である。研究が進むにつれて、自分はこの10年間、いかに多くの児童を傷つけ、苦しめてきたかがわかり、切ない気持ちで募っていた。ただ、それに今気づくことができたので、自分にとっては有意義な研究であったかもしれない。これまでの教え子たちに還元することはできないまでも、せめて現在担任している児童には、カウンセリング・マインドを忘れずに接することで償いたい。

○ 思いを活動に…策を講ずれば子どもは動く

教員業、児童の人間関係を意識してさまざまな実践を試みてきたが、それらは理論的にもあながち間違っていない活動であったことが明らかになり、自信がついた。「笑顔と思いやりのある学級」という担任の思いは、説明や理屈ではなく、活動を通して伝え実感させていくことができるのではなかろうか。

○ 人の心はわかりにくいし難しい。だから人は面白い。

カウンセリング技法の演習や電話相談・来所相談の体験によって、人の話を聴いて相手の心を探っていくことの難しさも実感した。ただ、傾聴と共感、支持の姿勢で人の話をよく聴くことで、相手が安心し、元気を取り戻す様子が表情や声から推察できたことも事実である。人間関係づくりには一つの特効薬はないけれど、接し方一つで相手の気持ちも変わらう。改めて「人って面白いなあ。」と興味を持つことができた。

2. 今後の課題

● 人間関係づくりと合わせて、リーダーの育成を

現在担任している学級は、少人数ゆえに家族的で温かい人間関係ができつつある。それは好ましい傾向ではあるが、これからは高学年として学校を支える資質が要求される。リーダーシップを発揮する機会を増やし、児童にさらに自信をつけさせていく手立てを工夫していかなければならないだろう。

● まだまだ児童理解不足

今回の研究を通して、自分はまだまだ児童の心を理解していないということがわかった。もっと児童を愛し、児童が安心して何でも語り合える雰囲気づくりに努めていきたい。

● ルールとリレーションのバランス

集団が成り立つ条件とは、ルールとリレーションがバランスよく共有されている状態をいう。児童に自己肯定感や支持的風土を持たせるとはいつても、何でもすべて認めるわけにはいかない場合もある。学級が正しく前向きに伸びていけるよう、勇気を育てる具体的な実践を考えていきたい。

VI おわりに

3か月の長期研修をふり返り、この研修が自分を見つめ直す大切な時間であったことを実感しています。このような貴重な研修の機会を与えてくださいました山形県教育委員会はじめ庄内教育事務所、松山町教育委員会の諸先生方、前任校の酒田市立塚成小学校・佐藤邦夫校長先生に御礼申し上げます。

また、3か月にわたりご指導くださいました山形県教育センター鈴木強太所長はじめ諸先生方にも感謝申し上げます。特に、お忙しい中、温かい励ましと真摯なご指導をいただきました竹田真知子教育相談部長と教育相談部の先生方には心より感謝申し上げます。

最後に、所属校である松山町立内郷小学校の今野修校長先生はじめ教職員の皆様、お忙しい中、アンケートや授業実践にも温かくご協力いただきまして、どうもありがとうございました。ご理解とご支援に厚く御礼申し上げます。

※ 参考資料 (これまでの実践例)

1. 体ほぐしの運動

平成12年11月、酒田市立塚成小学校第5学年2組児童34名を対象に行った体育の授業。

新学習指導要領体育科における改訂の目玉。体力・運動能力の低下傾向や活発に運動する者とそうでない者とに二極化している現代の児童を取り巻く状況を改善していくために打ち出された新しい運動領域である。
「体ほぐしの運動」は、心と体を一体としてとらえる視点を重視している。すなわち、いろいろな手軽な運動を行い、体を動かす楽しさや心地よさを味わうことによって、自分や仲間の体や心の状態に気づき、体の調子を整え、仲間と豊かに交流できるようにすることである。まさに、運動を通して人間関係づくりができる実践ではなかろうかと私は思う。

(指導計画)

- ◆ねらいⅠ 「コースに分かれて体力チェック」
～ 教師が作ったトレーニングコースで様々な運動に取り組み、児童一人一人が自分の体力を知る。
- ◆ねらいⅡ 「励まし合って、楽しく体力アップ」
～ ねらいⅠで見つけた個々の課題や願いの似た者同士でグループを作り、自分たちでトレーニングコースを工夫して作り、体力を高める。
～ 他のグループが作ったトレーニングコースにも挑戦し、友達同士励まし合いながら楽しく運動に取り組む。

- 校内授業研究会において、人間関係づくりに関する参観者のコメントは以下のとおり。
- 学習カードの「輝いていた友達」の欄が効果的。取り上げられた子の笑顔がとても印象的だった。
 - ペアによるマッサージで力の抜けた子どもの表情から、運動の心地よさが伝わってきた。
 - 友達への励ましやアドバイスがとても温かかった。学級における日常の人間関係のよさを感じる。 etc...

2. ユーモア詩、ユーモア俳句

人は、どんな社会になっても生きる力を身につけなければならない。今、大事にしたい生きる力とは、「人とつながり合う力」だと言えよう。その基本になるのは、ユーモアのセンスである。
望ましい人間関係づくりを進めるためには、学級を楽しいものにし、児童一人一人の居場所をつくり、児童に安心感を与えたい。日々の学校生活の中で、教師と児童、あるいは児童相互が失敗も含めて笑い飛ばしたり、心の殻を脱いで本音で生活したりすることによって、自己肯定感や支持的風土を生み出していきたく、私は常々思ってきた。
私の学級では、児童に詩や俳句をよく書かせている。作文指導というよりはむしろ児童一人一人の内面を知る手がかりとして書かせることが多い。内容は、基本的には自由である。学校でのこと、家族のこと、友達のこと、テレビ、担任…、題材は児童によって実にさまざま。書かせる際のポイントは、ただ一つ、「感じたことをありのままに表現しよう」である。
どの学級においてもそうであるが、初めのうちは、児童は何を詩や俳句に表したらいいか戸惑う。しかし、担任の姿勢は、どの作品に対しても、「よし!」と言ってすべて受け取る。「上手につくる」よりも「楽しんでつくる」ことを活動の目的としているから、たとえ、その内容が稚拙であったとしても、まずは書いたことを評価する。
そうしていくうちに、児童は次第に書くことに対する抵抗が薄れ、時として、瑞々しい感性を持った作品を書き上げていくようになる。作品例をいくつか紹介しよう。

すもう見て ジジババ二人 手をたたく (4年・男)	グループを 見せびらかして 素手でとる (4年・男)
測定中 針よ止まれと いのる人 (6年・女)	「トトロの教室」
「近所のおばさん」 11年間 私をずっと男だと思っていた。 なんてこった。悲しいね。 近所のおばさん、 もう男とまちがえないで (6年・女)	有人先生、別名「有トトロ」。 でも、よく考えてみると 5-2の教室には トトロがあと二人いる。 だれかな? 考えてみて。 名前が「と」で終わる人。 見つけた! 和トトロと正トトロ!?

5-2は、トトロが三人。
トトロの教室。トトロが三人。
(5年・女)

児童は、ユーモアのセンスをたくさん備えている。それを学校生活の中で出せるか出せないかは学級の雰囲気によるもの大きい。学級内において差別や嘲笑を許さない毅然としたルールはもちろん必要である。しかし、ルールの範囲内であれば、私たちは、児童の楽天性をもっと信用してもいいのではないかと。詩や俳句を読み合うことで一緒に笑い合うという行動は、笑はいつでも共感を生み出すものだし、癒されるものでもある。今こそ、笑いのある学級づくりを目指したい。

3. 指名なし討論

平成14年9月中～下旬、松山町立内郷小学校第4学年児童13名を対象に行った国語の授業。
(以下、学習指導案より抜粋)

1. 単元名 場面をくらべて読もう 「一つの花」 今西 祐行
2. ねらい
 - 読み取ったことや友達から学んだことを、話し合いの中で進んで発表したり文に書いたりしようとする。 (関心・意欲・態度)
 - 叙述に即して読み取ったことを、相手にわかりやすく発表することができる。 (話すこと・聞くこと)
 - 友達の意見のよさを探しながら聞くことができる。 (話すこと・聞くこと)
 - 場面の移り変わりや登場人物の心情を、叙述をもとに想像しながら読むことができる。 (読むこと)
 - 話し合いによって学んだことを、自分の好きな方法で文に表すことができる。 (書くこと)

3. 授業にあたって

《学校研究主題》 他との関わりの中で伝え合い、高め合う子どもの育成

- ◆めざす子ども像へ迫る手立て
- 思いや考えを確かに伝え合える子ども
- ・ 「光る言葉キャッチする。」…自分で作った課題に対する自分の考えをノートにメモし、根拠を明らかにしながら発表することができるようにする。キャッチする言葉は、本文中の語句と友達の話である。
- ・ 「自分だけのまとめを工夫する。」…毎時間、話し合い活動の後にまとめの時間を設定する。まとめ方は、感想や手紙、俳句、詩など自分の好きな方法を選択できる形にし、多様な表現で自分の思いを伝えることができるようにする。
- まわりの人と関わって互いに伸びていこうとする子ども
- ・ 課題解決は児童相互による指名なし討論で進めていき、教師は児童の発言を板書によって構造化し、自分と友達の考えを対比しやすしい環境作りに努める。
- ・ 話し合いの意図は、自分の読み取りに広がりを持たせるためであり、友達のおかげで学習前の自分の考えとの変容に気づかせるためである。

4. 本時について

時間	主な活動	予想される児童の動き(○)や思考(◎)	教師の支援(・)と評価(☆)
1分	1. 本時のめあてを確かめる。 ゆみ子に一輪の 子を話し合おう。	コスモスの花をあげたお父さんの心の様	・ 側面掲示をもとに、本時のめあてを考えた児童を紹介する。
5分	2. 学習場面を音読する。	・ 教師のペースに合わせて、自分が読みたい場所が来たら、自由に立って音読する。 読んだらろう。 ○～ちゃんはどうしてここを読んだらろう。	
7分	3. 課題について各自考える。	・ 読み取ったことをノートにメモする。 ○せめて最後にゆみ子の笑顔を見たかった。 ○お父さんのことを忘れないで欲しい。	・ つまずいている児童に対しては、本文にもう一度立ち返らせ、場面の情景のイメージ化を図る ☆コスモスの花にこめられたお父さんの思いを想像することができたか。
16分	4. 課題について話し合う。	・ 机を向かい合わせ、指名なしで意見を発表し合う。 ～一通り発表した後で～	・ 児童の発言を板書し、思考の構造化を図る。 ・ 話し合いが停滞した時は、補助

16分	5. 本時のまとめを書き発表する	<p>Q どの意見が光って見えま か。</p> <p>○～君の意見が光って見え ます。</p> <p>○～君のおかげで、お父さん が何も言わなかった訳がわ かりました。</p>	<p>発問によって活動の活性化を図 る。</p> <p>・根拠を明らかにした発言を促す</p> <p>・光る発言に共感・賛同し、児童に 自信を与えたい。</p> <p>☆進んで自分の考えを発表するこ とができたか。</p>
		<p>・手紙や詩、俳句など自分の好 きな方法で授業の感想をノ ートに書く。</p>	<p>・話すことよりも書くことで活躍 できる児童に光を当てたい。</p> <p>☆自分なりに表現することができ たか。</p>

4. フルマラソンに挑戦

平成13年9月下旬～平成14年3月上旬、酒田市立塚成小学校第6学年児童67名を対象に、体育および日常活動で行った実践。

運動会を終え、卒業までに何か一つみんなでやり遂げる充実感や思い出を味わわせたいと考え、児童に提案した。

右図のようなマラソンカードを児童に配布。グラウンド1周200m(体育館3周)走ったら、○に1つ色を塗り、211周分色を塗ったら、42.195kmのフルマラソンに相当する距離を完走したことになる。

完走者には賞状を与え、学級通信に氏名を掲載。実施後、早い子は約3週間で完走、個人差は大きかったものの、結果として、約半年をかけて67名全員が完走することができた。

卒業式前、ケーキとジュースで、盛大にパーティーを行った。

マラソンは、縄跳びや鉄棒と違い、誰にでもできる運動である。走ることに對する得手不得手はあるにせよ、児童相互で共に活動する体験が可能なのである。

マラソンは、孤独な取り組みである。自分の足で距離を積み重ねていく以外、完走の方法はない。しかし、最後は友達の手によって完走を達成できたような気がする。「あいつには負けれない」と寸暇を惜しんで走り続ける子、「～ちゃん、一緒に走ろう」と、声かけ合って楽しく走る子、先に完走した子がまだの子に伴走してくれる姿などを通して、一人で取り組むことではあるけれど、そこには間違いない相互に関わり合う場があった。

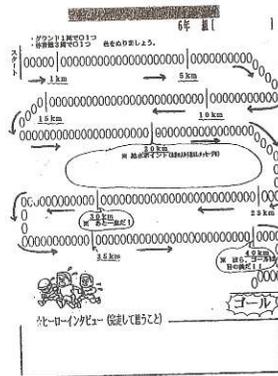
私自身、フルマラソン全員完走など、初めから望んではいなかった。さまざまな個性が集まる学年だったので、せめて半数ぐらいの児童が完走し、その子なりに達成感を味わえれば御の字と思っていた。しかし、時間はかかったが、結果は67名全員完走。児童は見事に価値を共有することができたのである。児童のがんばりには今でも感謝の気持ちでいっぱいである。この活動を提案した時に、一番難色を示した児童が卒業文集に書いた作文の一部を紹介したい。

ぼくは、走る事があまり好きではありませんでした。体育の時間に、有人先生が、「これから当分の間、42.195km目指して走ります。」と言った時も、ぼくは、「なんでこんなめんどくさいことをしなければいけないんだ。」と思いました。でも、どんなにいやでも、これも授業なので仕方がないので、しぶしぶ走り始めました。

走り始めると、汗はだらだら出るは、顔は熱いので、とても大変でした。しかし、つかれているのにとてすがすがしい気持ちになりました。こんな気持ちになったのは初めてだったので、とてもびっくりしました。

それからのぼくは、体育の時間も休み時間も、42.195km目指して一生懸命走りました。足が空気がなったみたいでした。ぼくは、とてもうれしかったです。こうしてぼくは、苦手でつまらないと思っていたことが、とてもおもしろく思えるようになりました。

ぼくは今、走る事がとても好きになりました。これからも努力して、きれいなこと、苦手なことをどんどんなくしていきたいです。



平成14年度 山形県教育センター長期研修(3か月)

『主体的な学びにつながる総合的な学習の創造』

～体験活動から課題設定の場面のあり方を考える～

酒田市立十坂小学校

教諭 武田 裕一

一 目 次

I. 主題設定の理由と研究のねらい	・・・1
II. 研究仮説	・・・1
III. 研究計画	・・・1
IV. 研究内容	・・・1
1. 基礎研究	・・・1
(1) 学習指導要領の理解	・・・1
(2) 先行研究の調査	・・・2
2. 『気づき』の場面における体験活動のあり方	・・・2
(1) 中心課題の設定	・・・2
(2) 体験活動の吟味・構成	・・・3
(3) ゲストティチャーについて	・・・4
3. 『気づき』の場面における課題設定のあり方	・・・5
(1) 所属校における実践から	・・・5
(2) 課題の焦点化までの流れ	・・・7
(3) 活動計画について	・・・9
4. 年間活動計画・場面展開試案	・・・10
V. 研究のまとめ	・・・13
1. 研究の成果と課題	・・・13
2. 研修を終えて	・・・13

主な参考文献

◇小学校学習指導要領	文部省
◇小学校学習指導要領解説	文部省
◇児童心理 10月号 「総合的な学習の時間」を苦手にならない先生	真仁田 昭 他編 金子書房
◇教職研修総合特集 誰もが活用したい「総合的な学習」100の実践ポイント	高階玲治 編 教育開発研究所
◇「総合的な学習」の課題づくり	北 俊夫 編 明治図書
◇「総合的な学習」指導の手引きNO.3 「総合的な学習」の指導体制をつくる	高階玲治 編 教育開発研究所
◇実践 総合的な学習の時間 小学校編	高階玲治 編 図書文化
◇授業研究21スペシャルワーク版 学び方技能が育つ「総合的な学習」ワーク5・6年用	瀬川築志 監修 明治図書
◇新しい教育課程と学習活動の実践 総合的な学習	天笠 茂 編 東洋館出版
◇これじゃいけない総合的な学習成功戦略 ポートフォリオ学習 プロジェクト学習	鈴木敏恵 著 図書印刷株式会社
◇ゲストティチャーと創る授業	上條晴夫 編 ネットワーク双書
◇子どもの求めに立つ総合学習の構想	藤井千春 著 明治図書
◇総合的な学習の基礎・基本 評価基準による自立への挑戦	加藤明 著 明治図書
◇小学校「総合的な学習」のテーマと解説150 テーマ別展開例&評価	有田和正 編著 学事出版
◇自然体験学習の展開と支援の方法	星野昌治 編 明治図書

I. 主題設定の理由

学習指導要領総則の「総合的な学習の時間」をめぐる配慮事項には、体験活動を重視した記述がある。多くの学校が、体験活動の良さを見直し、課題設定や問題解決の場面で体験活動を取り入れた総合的な学習が数多く見られるようになった。

所属校でも4年前より、豊富な自然や人材を活用し、体験活動を中心にすえた総合的な学習を実践してきた。私が担任した学年でも、「十坂のクロマツ」をテーマに、庄内総合支庁森林整備課の指導員や地元森林組合の方々の指導の下、学校の周囲にある松林をフィールドとして、枝打ちや伐採、苗木づくりや苗木採集、植林など、本物の活動を体験しながら学習を進めることができた。そこから生じた子ども達の疑問や驚きは、実感に基づいたもので、その後の主体的な学習に結びついてくることがわかった。

しかし、そのような中で「体験活動のみに終始してしまっただけ」「気づきを課題に結び付けられなかった子」がいたのも事実であり、教師自身が体験活動のあり方を反省させられたことが幾度とあった。

実際に、体験活動に多くの時間を割き、ゲストティチャーや体験カードなどを用いたりしながら、子ども達の興味や関心を引き出そうと苦心している学校は多い。しかし、時間や労力をかけた割には、思ったほど課題に結びつけることができなかつたこともあるのではなからうか。

「体験活動あって学びなし。」といった批判の声や「体験が課題に結びつかない。」「課題の設定が難しい。」といった現場の声も聞かれる。

そこで、本研究では、気づきを生む体験活動のあり方や課題を焦点化する手立てについて考え、子ども達が主体的に学ぶ総合的な学習を創造していきたいと考えた。

II. 研究の仮説

気づきや驚きを生む体験活動を仕組み、そこから生まれた気づきや驚きを焦点化する手立てを講じれば、体験活動を課題に結びつけることができるであろう。

III. 研究計画

図1に示す通り、研究仮説を検証するために、学習指導要領の理解、先行研究の調査、所属校のこれまでの実践研究を柱とし、それをもとに年間指導計画及び体験活動場面展開試案、評価基準の作成を目的として本研究を進めていくこととした。

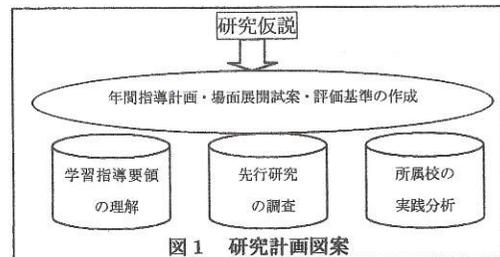


図1 研究計画図案

IV. 研究内容

1. 基礎研究

(1) 学習指導要領の理解

総合的な学習のねらいは「問題解決能力の育成」と「生き方を考える学び方の育成」である。総合的な学習では、この2つのねらいを達成するために、課題解決型の学習形態をとっている。

学習指導要領では、この学習の特性から、地域素材の活用と体験活動の重視が述べられている。

地域素材の活用は、子ども達にとって身近であるために、興味・関心を喚起しやすく、日常的な学びにつながることも期待される。また、地域での活動は、地域住民の協力を得やすいだけでなく、子ども達の活動が地域の人々に理解され、認められることで、子ども達自身が地域の一員としての自覚を深めることができる。

体験活動は、五感をフルに活用して対象に関わったり、自分の意志で対象に働きかけたりすることが

できる。これは、体験不足の子ども達が気づきを生み出すために大切なことである。

このような理論的な裏づけからも、学習指導要領において、地域素材と体験活動が重視される意図が理解できる。両者の利点をふまえて研究に役立てていきたい。

(2) 先行研究の調査

体験活動と課題設定についての図3の内容について先行研究の調査を行った。

所属校のこれまでの実践と合わせて検討し、『中心課題の設定、体験活動の吟味・構成、ゲストティチャーの関わり方、課題の焦点化の手法』について先進校に学びながら、年間指導計画及び体験活動場面展開試案、評価基準の作成を行うこととした。

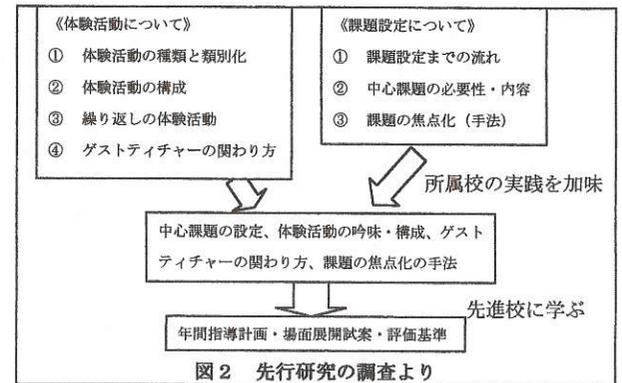


図2 先行研究の調査より

2. 『気づき』の場面における体験活動のあり方

(1) 中心課題の設定・・・中心課題とは、子ども達全員がめざす共通の目標となるものである。

- ①中心課題の有用性・・・自分を見つめる、友達と意味のある交流、地域の一員としての所属感
 - 友達と自分の活動の関係が分かり、相互に意味のある共有化が図られる。(中間発表会をより有効なものにする)
 - 中心課題と向き合いながら活動を振り返り、目的意識を持って追究活動を展開できる。(ポートフォリオのよりどころとなる・ウェビングの中心となる)
 - 個々の課題解決に終わらない(個々の課題解決が、地域に反映するものとなる)

②中心課題の内容・・・総合的な学習創設の経緯を踏まえた課題解決学習をめざす

図4に示す通り、総合的な学習は、社会の様々な変化(課題)に主体的に対応できる『生きる力』の育成をめざして創設された経緯がある。

つまり、身近な社会(地域)の課題に取り組む総合的な学習では、調べて、まとめて、わかった上で、子ども達なりに対応(働きかけ)させていくことが、『生きる力』を育む課題解決といえるのではなからうか。そこで、中心課題の内容を次のようなものにした。

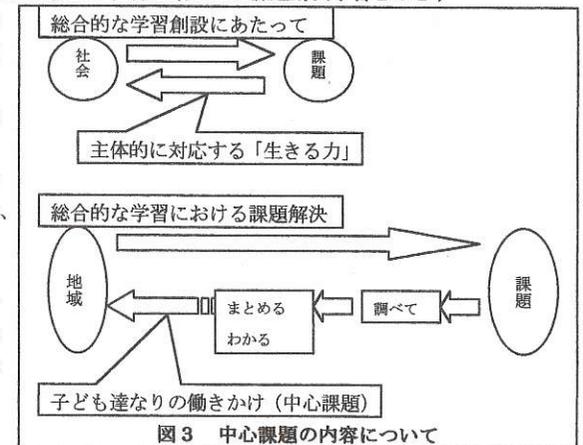


図3 中心課題の内容について

- 地域の課題を「調べて、まとめて、わかった」上で、子ども達なりの働きかけがあるもの。
- 個人の課題解決が、地域の課題解決に反映されるもの。

③所属校では

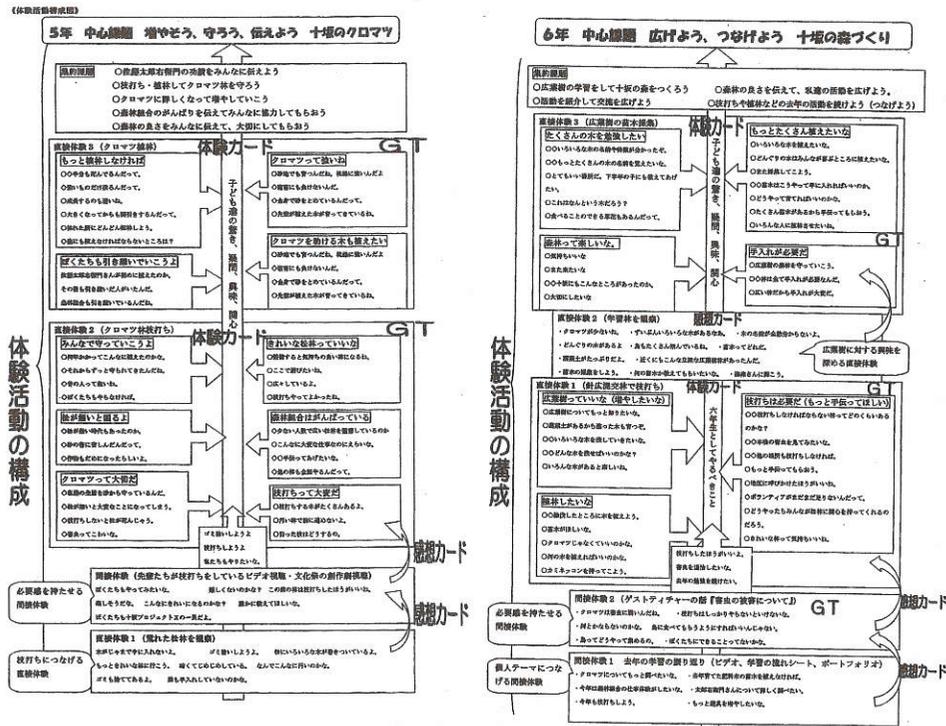
題材「十坂のクロマツ」は、総合的な学習のねらいの達成はもとより、クロマツの歴史や恩恵を知らない地域や子ども達の実態、危機的な状況にあるクロマツを守らなければならない地域の願いなど、地域の課題が色濃く反映した題材である。

子ども達が地域の抱える課題と同様の課題を抱え、総合的な学習で取り組んでいくことは、地域の一員として重要な役割を担うとともに、実感として自分と地域の関わりを感じ取ることができる。以上のことから、5・6年生2年のスパンで以下のような中心課題を考えた。

5年生「増やそう、守ろう、伝えよう 十坂のクロマツ」
6年生「広げよう つなげよう 十坂の森づくり」

(2) 体験活動の吟味、構成

これまでの体験活動とそこでの子どもの声、先行研究の結果などから以下のような構成を考えた。



(3) ゲストティチャーについて

①ゲストティチャーのあり方

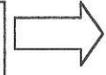
図4の通り、森林体験における子ども達の気づきは「体感して気づく」「情報で気づく」「体感と情報が伴って気づく」のいずれかであると考えられる。

中心課題を明確にし、情報や体感をどの場面ですらやってみて与えるのが、もっとも子ども達の興味・関心を喚起することができるのかゲストティチャーと綿密に打ち合わせをしておく必要がある。

ゲストティチャーと事前に打ち合わせておくこととして、

- 総合的な学習における取り組みとそのねらい（単元全体の計画・その時間の位置づけと意味）
- 協力を求める場面とその内容
- 何時に、どこに来ていただくのか
- 実際の活動で

いつ
どこで
どの子に



どのように関わって欲しいのか
どのような活動をさせて欲しいのか
どのようなことを話して欲しいのか
どのようなことを見せたいのか
そのような指導助言をして欲しいのか

配慮することとして、

- ☆ゲストティチャーには、子ども自身に気づかせたいことを明確にしておき、知識注入型の関わりにならないようにする。
- ☆講話の内容が専門的であったり、難しかったりする場合があるので、事前に教師が話の内容を把握し、講話の際にサポートできるようにする。

②子ども達への意識付け

十坂小学校の総合的な学習におけるゲストティチャーと子ども達の関わり方は、2つのタイプに分かれ、それぞれの利点は以下の通りである。

◇セッション型・・・ゲストティチャーと子ども達が一緒に活動する。

体験を共有できる良さがある。子ども達は、ゲストティチャーの苦労や思いを体感することで共感的に理解できる。体験させっぱなしではなく、振り返る機会を設けて、体験活動を自分のものとさせることが大切である。

◇ヒアリング型・・・ゲストティチャーに特別な体験や歴史的証言を聞く。

子ども達が必要感を持って臨むことができれば、欲しい情報がその場で得られるとともに、さらに深い興味や関心を持つことにつながる。話の聞き方（マナーやポイント）や質問の仕方など、事前の指導が大切である。

◇体験カードの活用

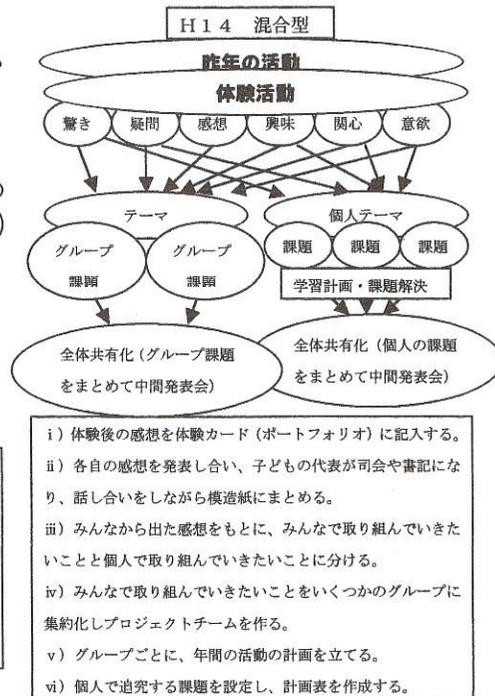
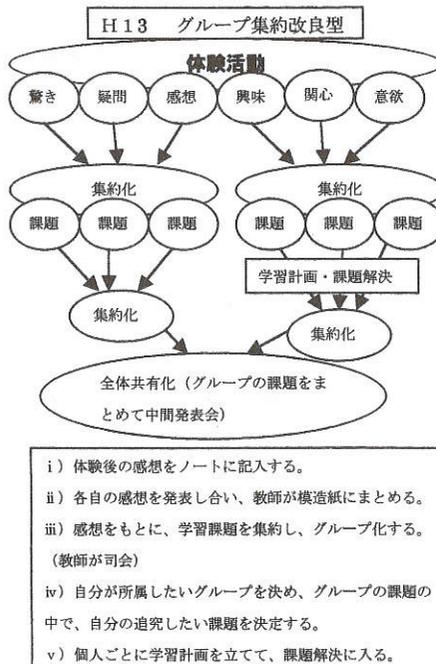
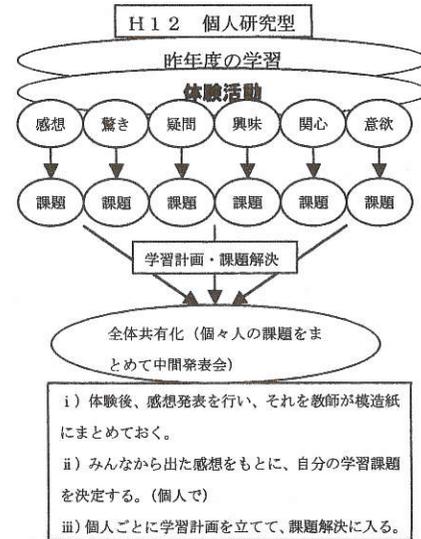
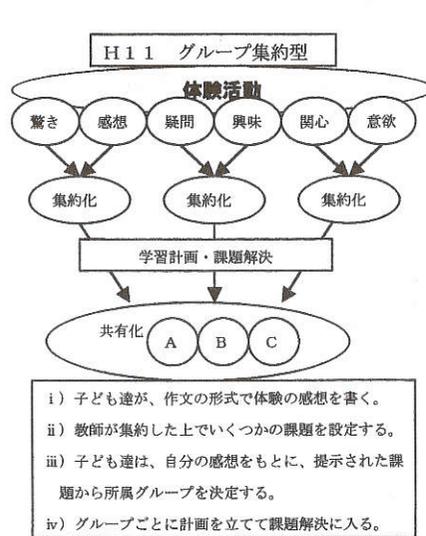
子ども達とゲストティチャーとの関わりが有効なものとなるよう、体験カードの活用を考えた。体験活動後に活動での気づきを書き込むのであるが、『ゲストティチャーの話から』『自分自身で体験して』という2つの欄を設け、子どもが体験に入る際に意識が持てるようにしたい。



図4 子どもの気づきを生み出すGT

3. 『気づき』の場面における課題設定のあり方

(1) 所属校の実践より



《成果と課題より》

◇課題を見つける目を育てるために(体験カード・課題カード)

体験カードの作成

- ・書く視点を与える体験カードの活用(体感したもの・GTからの情報)
- ・作成時間の保障
- ・活動ビデオ・写真の提示(振り返りの手立て)
- ・教師のアンダーラインやコメント

課題カードの作成

- ・体験カードをもとに作成
- ・一枚に一課題
- ・教師との対話

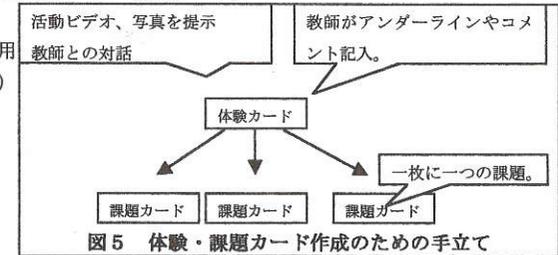


図5 体験・課題カード作成のための手立て

◇自分で課題を設定したという意識を持たせるために(KJ法・課題の選択)

課題カードの作成

・・・自分で課題を持ったという意識が持てる。

KJ法の活用

・・・課題カードをそのまま活用して、分類や話し合いに参加できる。

課題の選択

・・・個々の興味・関心を大切にするとともに、自分で課題を持ったということを自覚させる。

◇これまでの実践の利点を生かすために(集約型・個別型)

集約型・・・グループで助け合って活動できる、課題が明確である。

個別型・・・個人の興味・関心が最大限に生かされる。

そこで

5年生・・・集約型と個別型の混合型(集約型のデメリットを個別型でカバーする)

6年生・・・個別型(前年度の経験から、学び方を身につける)

◇必要感のある共有化を図るために(中心課題の設定とそれに向かう活動計画)

中心課題の設定

5年生『増やそう、守ろう、伝えよう 十坂のクロマツ』、6年生『広げよう つなげよう 十坂の森づくり』にむけて、どのように進んでいるか交流しあうことで、それぞれが違った課題で学習を進めていても、意見を出し合ったり、参考にしたりができて、互いに意味のある共有化が図られる。そのためにも、個々人がしっかり中心課題に向かうように活動の計画を立てて進めていく必要がある。

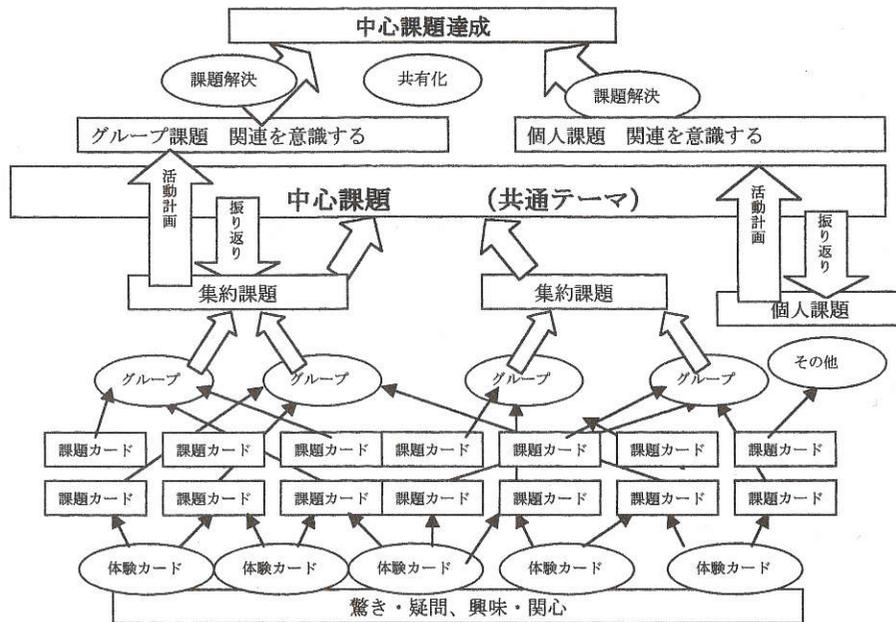
◇形骸化した問題解決型の学習から脱却を図るために(中心課題の吟味)

2の(1)②で述べたように、身近な地域社会の課題に何らかの働きかけを行うことが、総合的な学習の課題解決であると考えられる。

それによって、子ども達が地域の一員としての自覚を持ち、地域をより良くしよう、自分達の生活を豊かなものにしようとする意欲を持ってくれることを期待している。

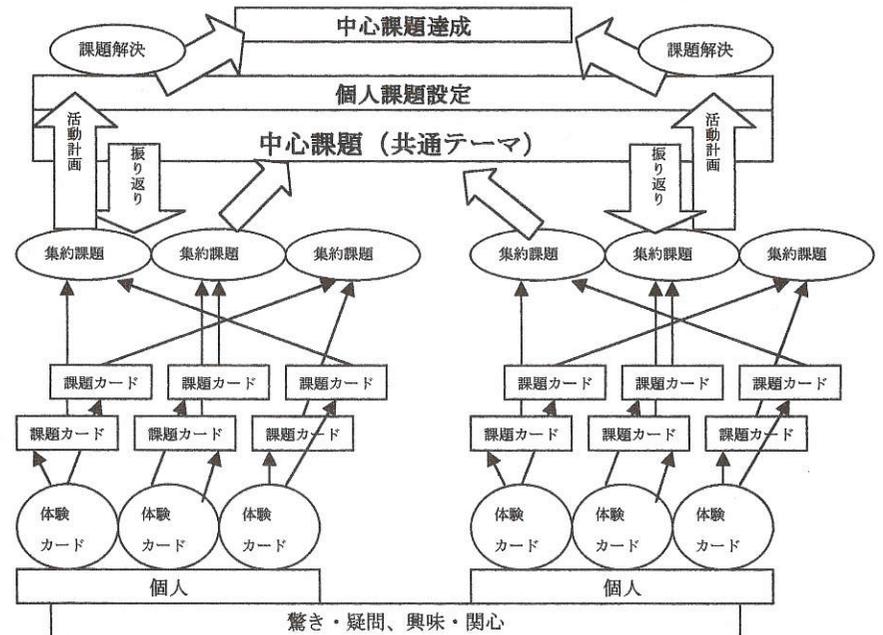
(2) 課題の焦点化までの流れ

①5年生の課題の焦点化



- 1) 課題カードの作成
- 2) 5～6人のグループを作り、課題カードを見せ合う。
- 3) みんなの課題カードを広げて似たようなものどうしのグループを作る。どのグループにも入らない課題カードは、無理をせず他のグループに入れるようにする。
- 4) グループ分けが終わったら、それぞれのグループのカードを眺めグループに名前をつける。その他の課題カードをもう一度確認し、どこかのグループに入るものはないか調べる。
- 5) グループごとに課題カードを封筒に入れ、グループ名を封筒の表に書き、黒板に貼り付ける。
- 6) 全員で封筒の名前をもとに、さらにグループ分けし、何のためにその活動をするのかまで考えた集約課題を設定する。
- 7) 集約課題を見て、自分が最も興味のあるグループを決定し、グループごとに集まる。他のグループの課題カードを読み上げ、どこかのグループに入らないか確認する。
- 8) 全てのグループを総括する中心課題を設定する。
- 9) 自分たちのグループのカードを広げ、中心課題に向かうためにはどのような活動を進めていけばよいか話し合う。(ウエッピング法を活用する)
- 10) グループ内での自分の役割を決め、大まかな活動計画表を作成する。
- 11) グループの課題以外に自分なりに追究したい課題がある場合は、自分が一人でやりたい課題を設定し、中心課題に向かうためにはどのような活動を進めていけばよいか考え、同様に活動の計画を立てる。

②6年生の課題の焦点化



- 1) 課題カードの作成
- 2) 課題カードを広げて似たようなものどうしのグループを作る。どのグループにも入らない課題カードは、無理をせず他のグループに入れるようにする。
- 3) グループ分けが終わったら、それぞれのグループのカードを眺めグループに名前をつける。(集約課題) その他の課題カードをもう一度確認し、どこかのグループに入るものはないか調べる。
※集約課題は、昨年の集約課題を参考にさせながら、働きかけのある課題にする。
昨年度の例：「枝打ち・植林してクロマツ林を守ろう」
「クロマツに詳しくなって、増やしていこう」
「森林のよさをみんなに伝えて、大切にしておこう」
「佐藤太郎右衛門の功績をみんなに伝えて、伝統を守ろう」
「森林組合のがんばりをみんなに伝えて協力しておこう」など。
- 4) 集約課題を見ながら、中心課題を設定する話し合いを行う。(これも去年の中心課題を参考に、キーワードを探していくようにする。)
- 5) 集約課題を見て、中心課題を達成するためにどんな順番で課題を解決していけばよいか考え、封筒に順番を書く。
- 6) 計画表に、課題解決の順にグループ名を記入していく。
- 7) 封筒の中身を見ながらどのような学習を進めていくのか大まかな計画を立てる。

5年『クロマツ植林』場面展開案

3時間扱い

- ねらい
- ・植林活動に意欲的に取り組み、クロマツの植生やその保全活動に興味を持つことができる。(気づき①)
 - ・先人の功績を知り、その歴史に興味を持ち、自分もクロマツの保全に関わっていきたくて意欲を持つことができる。(気づき②)
 - ・植林の意味やそれを行っている人々の思いや願いに気づくことができる。(気づき③)
 - ・壮大なクロマツ林が全て人の手によって植えられたことという史実から、その歴史の重みに気づくことができる。(気づき④)

時間	学習活動	課題との関連	支援(◇)と評価(□)
野外 2時間	<p>植林して増やそう</p> <p>①導入 こんな所に育つ。クロマツって強いね。半分は死ぬのか。たくさん植えないと。1年でこれしか育たないの。強いものだけ残っていくんだね。あつらにも砂地があるよ。</p> <p>②植林 こうやって水分を逃がさないのか。砂地でも丈夫に育っているね。肥料木と一緒に植えるといいんだね。カンワやグミって聞いたことあるよ。</p> <p>③砂地の草木 クロマツを助けている木が他にもあるんだね。たくさん植えてあげればいいんだ。土を安定させるんだって。もっとあるんだ。</p> <p>④植林の歴史 そんなに昔から植林しているのか。太郎右衛門さんだね。その後の村人も偉いよ。森林組合が引き継いでいるのか。枝打ちもあるから大変なんだね。</p>	<p>導入 GT 荒涼とした砂地(体) 先達の植えた松・クロマツの成長と生存率(体・情) クロマツの特性(情) 植林のやり方(体・情)</p> <p>植林 GT 乾燥に耐える工夫(体) 代表的な肥料木(情)</p> <p>砂地の草木 GT 砂地の植物観察(体・情)</p> <p>植林の歴史 GT 佐藤太郎右衛門から今日まで(情)</p>	<p>◇植林活動に意欲的に取り組み、クロマツの植生やその保全活動に興味を持つことができる。(行動観察・体験カード)</p> <p>◇先達の植えた松が半減している現状を認識させる。</p> <p>◇植林の意味やそれを行っている人々の思いや願いに気づくことができる。(体験カード)</p>
教室 45分	<p>活動を振り返ろう</p> <p>たくさん植林しなければならぬ。クロマツについてもっと調べてみたい。黒松を助ける木に他にもあるのかな。いろいろ調べて植えてあげよう。種から育ててみたい。佐藤太郎右衛門ってどんな人だったのかな。</p>	<p>クロマツを助ける木も植えようよ。</p> <p>植林の歴史 GT 佐藤太郎右衛門から今日まで(情)</p> <p>乗道も平成の佐藤太郎右衛門になってみないか。</p> <p>種を拾って、苗木を作るといいんだよ。</p>	<p>◇壮大なクロマツ林が全て人の手によって植えられたことという史実から、その歴史の重みに気づくことができる。(体験カード)</p>

5年『課題の焦点化』場面展開案

話し合い3時間 活動計画2/4時間

- ねらい
- ・課題カードの作成、分類などに意欲的に取り組むことができる。(気づき①)
 - ・体験カードをもとに、自分がやりたいことや調べたいことを課題カードに記入することができる。(気づき②)
 - ・中心課題を設定する際に、みんなの課題が包含される言葉を考えることができる。(気づき③)
 - ・課題をウェビングしたり、活動計画を立てたりして活動の見通しを持つことができる。(気づき④)

時間	学習活動	課題との関連	支援(◇)と評価(□)
45分	<p>課題カード作りをしよう。</p> <p>クロマツについて詳しく調べたい。枝打ちをしていきたい。クロマツを助ける木を調べたい。森林組合の仕事を知りたい。松が無いとどうなる生活だったのか。佐藤太郎右衛門の話を調べる。クロマツを増やしていきたい。</p>	<p>体験カードからやりたいことや調べたいことを見つけてよう。</p>	<p>□体験カードをもとに、自分がやりたいことや調べたいことを課題カードに記入することができる。(課題カード)</p> <p>□分類しやすいように、課題は一枚一つの課題を書ける。</p> <p>□課題カードの作成、分類などに意欲的に取り組むことができる。(行動観察)</p> <p>□自分がやりたい課題がある場合は、個人課題も設定させる。</p> <p>□中心課題を設定する際に、みんなの課題が包含される言葉を考えることができる。(発言)</p>
90分	<p>カードをグループ分けしよう。</p> <p>《グループで》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・佐藤太郎右衛門について ・枝打ちについて ・昔の暮らしを調べる ・森林組合について ・植林について ・みんなに協力してもらう活動。 ・砂地の植物 ・クロマツを調べる ・植林がポスターを貼りたい。 <p>《さらに全員で集約課題》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・佐藤太郎右衛門の功績をみんなに伝えよう ・枝打ち・植林してクロマツを守ろう ・クロマツに詳しくなって増やしていこう ・森林組合のがんばりを伝えて協力してもらおう ・森林の良さをみんなに伝えて、大切にしよう 	<p>自分の活動するグループを決定する。</p> <p>ぼくは、佐藤太郎右衛門をみんなに伝えたい。</p> <p>私はそれ以外にも、松林の歴史を調べたい。</p> <p>中心課題を決めよう。</p> <p>増やそう・守ろう・伝えよう 十坂のクロマツ</p> <p>みんながめざす活動のテーマを決めよう。</p>	<p>□課題カードの作成、分類、集約課題の設定などに意欲的に取り組むことができる。(行動観察)</p> <p>□中心課題を設定する際に、みんなの課題が包含される言葉を考えることができる。(発言)</p>
90分	<p>グループ(個人)活動計画を立てよう。</p> <p>調べたいことをウェビングしてみよう。</p> <p>ウェビングが終わったら、大まかな計画を立てよう</p> <p>自分の分担の課題をウェビングしてみようかな。</p>	<p>□夜時から交流の段階に入り、話し合いながらより詳細な活動計画表を作成していく。</p>	<p>□課題をウェビングしたり、活動計画を立てたりして活動の見通しを持つことができる。(ウェビング図・活動計画表)</p>

6年『広葉樹苗木採集』場面展開案

5時間扱い

- ねらい
- ・いろいろな草木に興味を持ち、意欲的に観察することができる。(気づき①)
 - ・いろいろな草木に興味を持ち、意欲的にグスタティチャーに質問したり、苗木を採集したりすることができる。(気づき②)
 - ・十坂の森づくりへの思いや願いに気づくことができる。(気づき③)
 - ・体験カードから課題となりそうなものを見つけることができる。(気づき④)

時間	学習活動	課題との関連	支援(◇)と評価(□)
野外 45分	<p>十坂にはどんな広葉樹があるのかな。</p> <p>とってもいい林だね。十坂にこんなところがあったの。ずいぶんいろいろな木があるんだね。名前がわからない。どんぐりの木はわかるよ。苗木ってどこにあるの。教えてもらいたいな。梅津さんに聞こう。</p>	<p>いい森林だね</p> <p>広葉樹知りたいな</p> <p>森林って楽しいな</p> <p>大切にしたいな</p> <p>もっとたくさん植えたいな</p>	<p>◇広葉樹に興味を持ち、意欲的にグスタティチャーに質問したり、苗木を採集したりすることができる。(行動観察・体験カード)</p> <p>◇必要感を持ってグスタティチャーを呼びたい。</p> <p>◇いろいろな草木に興味を持ち、意欲的にグスタティチャーに質問したり、苗木を採集したりすることができる。(行動観察・採集物)</p> <p>□十坂の森づくりへの思いや願いに気づくことができる。【体験カード】</p> <p>□体験カードから課題となりそうなものを見つけることができる。【体験カード】</p>
教室 45分	<p>梅津さんに来てもらおう。</p> <p>まず電話で日程の調整をしよう。お手紙も出そう。観察に行ってきたことも書いておこう。早速交換しよう。</p>	<p>広葉樹苗木採集 GT</p> <p>主要な広葉樹とその苗(体・情)</p> <p>子ども達の疑問に答える(情)</p> <p>苗木の採集(体・情)</p> <p>主要な草花の名前と特徴(体・情)</p>	<p>◇先日枝打ちした林よりもさらに広葉樹が優先種となっている森林に行く。</p> <p>◇いろいろな草木に興味を持ち、意欲的に観察できる。(行動観察・体験カード)</p> <p>◇必要感を持ってグスタティチャーを呼びたい。</p> <p>◇いろいろな草木に興味を持ち、意欲的にグスタティチャーに質問したり、苗木を採集したりすることができる。(行動観察・採集物)</p> <p>□十坂の森づくりへの思いや願いに気づくことができる。【体験カード】</p> <p>□体験カードから課題となりそうなものを見つけることができる。【体験カード】</p>
野外 90分	<p>苗木の採集に行こう。</p> <p>いろいろな木や花の名前がわかった。楽しい。もっと知りたい。たくさん採集して帰ろう。また来よう。いろいろ植えよう。</p> <p>梅津さんの願い GT</p> <p>大切にしたいな。これも枝打ちか、広いから大変だ。みんなで枝打ちに来よう。たくさん採集して広葉樹を増やそう。</p>	<p>梅津さんの願い GT</p> <p>海岸沿いには珍しい貴重な広葉樹林(情)</p> <p>枝打ち・下草刈りの必要性(情)</p> <p>増やしてほしいという願い(情)</p> <p>広葉樹が主役の林もたくさんあるんだよ。</p>	<p>◇必要感を持ってグスタティチャーを呼びたい。</p> <p>◇いろいろな草木に興味を持ち、意欲的にグスタティチャーに質問したり、苗木を採集したりすることができる。(行動観察・採集物)</p> <p>□十坂の森づくりへの思いや願いに気づくことができる。【体験カード】</p> <p>□体験カードから課題となりそうなものを見つけることができる。【体験カード】</p>
教室 45分	<p>活動を振り返ろう</p> <p>たくさんの広葉樹がわかった。もっとたくさん木の名前を知りたい。苗木をたくさん採集できた。今度また行きたい。広葉樹をもっと増やしたい。あの森林は大切にしたい。あそこの森林も手入れをしなければならぬ。みんなで植えたい。どこに植えようか。どうやって育てればいいのか。</p>	<p>体験カード</p>	<p>◇必要感を持ってグスタティチャーを呼びたい。</p> <p>◇いろいろな草木に興味を持ち、意欲的にグスタティチャーに質問したり、苗木を採集したりすることができる。(行動観察・採集物)</p> <p>□十坂の森づくりへの思いや願いに気づくことができる。【体験カード】</p> <p>□体験カードから課題となりそうなものを見つけることができる。【体験カード】</p>

6年『課題の焦点化』場面展開案

話し合い2時間 活動計画2/4時間

- ねらい
- ・課題カードの作成、分類、集約課題の設定などに意欲的に取り組むことができる。(気づき①)
 - ・体験カードをもとに、自分がやりたいことや調べたいことを課題カードに記入し、それらを分類して集約課題にまとめることができる。(気づき②)
 - ・中心課題を設定する際に、みんなの課題が包含される言葉を考えることができる。(気づき③)
 - ・課題をウェビングしたり、活動計画を立てたりして活動の見通しを持つことができる。(気づき④)

時間	学習活動	課題との関連	支援(◇)と評価(□)
45分	<p>課題カード作りをしよう。</p> <p>広葉樹をたくさん知りた。枝打ちを続けたい。害虫の学習も続けたい。他の学校の様子も知りた。ボランティアを呼びかけたい。広葉樹をどんどん増やしていきたい。太郎右衛門について詳しく知りた。去年▽▽さんがやっていたこと楽しそうだった。今年は□□の続きをやりたい。</p>	<p>体験カードからやりたいことや調べたいことを見つけてよう。</p>	<p>□体験カードをもとに、自分がやりたいことや調べたいことを課題カードに記入し、それらを分類して集約課題にまとめることができる。(課題カード)</p>
45分	<p>カードをグループ分けしよう。</p> <p>《カードをグループ分けする》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・広葉樹をたくさん知りた。 ・広葉樹を増やしたい。 ・森林の楽しさを伝えたい(ネイチャーゲームなど)。 ・枝打ちを続けたい。 ・今年も劇をやりたい(歴史)。 ・下学年に活動を広げたい。 ・他校と交流したい。(森林関係) <p>《集約課題》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・広葉樹の学習をして十坂の森をつくる ・森林の良さを伝えて、私達の活動を広げよう。 ・活動を紹介して交流を広げよう ・枝打ちや植林などの去年の活動を続けよう(つなげよう) <p>《中心課題を決めよう。》</p> <p>広げよう つなげよう 十坂のクロマツ</p> <p>みんながめざす活動のテーマを決めよう。</p>	<p>自分の活動するグループを決定する。</p> <p>ぼくは、佐藤太郎右衛門をみんなに伝えたい。</p> <p>私はそれ以外にも、松林の歴史を調べたい。</p> <p>中心課題を決めよう。</p> <p>増やそう・守ろう・伝えよう 十坂のクロマツ</p> <p>みんながめざす活動のテーマを決めよう。</p>	<p>□課題カードの作成、分類、集約課題の設定などに意欲的に取り組むことができる。(行動観察)</p> <p>□中心課題を設定する際に、みんなの課題が包含される言葉を考えることができる。(発言)</p>
90分	<p>活動計画を立てよう。</p> <p>調べたいことをウェビングしてみよう。</p> <p>課題ごとにウェビングしてみよう。</p> <p>ウェビングが終わったら、大まかな計画を立てよう</p>	<p>□夜時から交流の段階に入り、話し合いながらより詳細な活動計画表を作成していく。</p>	<p>□課題をウェビングしたり、活動計画を立てたりして活動の見通しを持つことができる。(ウェビング図・活動計画表)</p>

V. 研究のまとめ

1. 研究の成果

研究の内容そのものの成果は、所属校に帰ってからの実践で検証していくことになる。

これまでは、『価値のある素材で、本物の活動を行う。』ことは、子どもにとって最高の教育である。」と自負するところがあった。しかし、研究を通して、「子どもの姿で学習を考える。」という、当たり前のように気づくことができなかつた素材研究の本質に気づくことができた。

例えて言うなら「一流の素材と一流のシェフさえいれば、子どもはおいしく食べてくれるはずだ。」と信じきっていた私が、「子どもがおいしく食べるには、素材をどのように調理して、どのように食卓に並べ、どんな栄養がつくのか。」といったところまで考えが及ぶようになったということである。

こういった考え方は、総合的な学習のみならず、全ての教育活動において、我々教師が持ち続けなければならない視点ではなかろうか。

この度の研究で改めてそのような視点を思い出すことができたのが一番の成果である。次の項であげる点に留意しながら、実践検証し、子どもが主体的に学ぶ総合的な学習を創っていきたいと思う。

2. 今後の課題

これまでの実践に基づいた研究とはいえ、机上のプランであることは間違いない。研究の成果と課題は、来年度の実践から出てくるものであろう。そこで、以下の3つの点に留意して、今後の実践と検証にあたっていきたい。

- 本研究のベースとなっている総合的な学習において、子ども達につけたい力を、子ども達が身につけることができたかどうかを検証する。
- 総合的な学習において子ども達が身につけた力に、本研究がどのように有機的に機能しているのか。機能しなかつた点はどこなのかを明らかにしていく。
- 子ども達につけることができなかった力は何であるのか。その原因は何であるのかを明らかにしていく。

以上、総合的な学習のねらいと子ども達の成長をベースに、本研究の有用性を検証していきたい。

また、十坂の総合的な学習で地域素材を活用して取り組んでいる「十坂の鳥」「十坂の海」「十坂の産物」についても、本研究をもとに体験活動の構成や課題の焦点化の手法を取り入れ、上記の3点の視点で検証していきたいと思う。

3. 終わりに

長期研修を終えるにあたり、今回の貴重な研修の機会を与えていただきました山形県教育委員会、庄内教育事務所、酒田市教育委員会の諸先生方に心より御礼申し上げます。

また、3ヶ月間ご指導いただきました山形県教育センター鈴木強太所長はじめ加藤勝徳指導主事、諸先生方に心より感謝申し上げます。

特に、お忙しい中、懇切丁寧な御指導・御助言下さいました岡村廣指導主事に心より御礼申し上げます。

さらに今回、研修の機会を与えてくださった南遊佐小学校の齋藤辰典校長先生、快く研修に出して下さった勤務校である十坂小学校の松澤一彦校長先生はじめ、諸先生方のご配慮に対しまして厚く御礼申し上げます。

工業科目「工業管理技術」における効果的な指導に関する研究



学校名 山形県立山形工業高等学校
研修生 佐藤利昭

目次



I	主題設定の理由	1
II	研究の目的と手順	1
	1. 研究の目的	1
	2. 研究の手順	1
III	研究の内容	1
	1. 科目「工業管理技術」の本校教育課程における位置づけ	1
	1) 学科改編	
	2) 科目の位置づけ	
	2. 科目「工業管理技術」の目指すこと	3
	3. 年間指導項目	4
	4. 年間指導計画を作成するに当たって	5
	1) 基本的考え方	
	2) 工業生産の現状	
	5. 年間指導計画	7
	6. 具体的授業内容	10
	1) ネットワーク工程表	
	2) 危険予知	
IV	研究のまとめ	
	1. 研究の成果	12
	2. 今後の課題	12
	1) 授業内容の改善	
	2) 授業の実践	
	3) 評価	
	3. おわりに	13
V	主な参考文献	

高等学校学習指導要領	平成11年 3月	文部科学省
高等学校学習指導要領解説 総則編	平成11年12月	文部科学省
高等学校学習指導要領解説 工業編	平成12年 3月	文部科学省
土木施工	三浦祐二・宮田弘之介著	実教出版
機械工作2	嵯峨常生・中西祐二著	実教出版
化学システム技術	早川豊彦著	実教出版
生産システム技術	伊理正夫・岩本洋著	実教出版
建築施工	脇山広三著	実教出版
工業経営	都崎雁之助著	実教出版
工業経営	笠原英司・千住鎮雄著	実教出版
テカスタイル技術	代表 濱中富三著	実教出版
電力技術	石井彰三著	実教出版
管工事施工管理技術テキスト技術・施工編・法規		施工管理技術研究会
管工事施工管理技術者第二部試験問題解説集		施工管理技術研究会
TQCからYQMへさらにIQMに向かって	北原貞輔・能見時助著	有斐閣選書
ものづくり基本法		http://maizumi.room.ne.jp/mono_kihonhou.htm
「セル生産方式に見る日本の展望 あるいは 妄想」		http://syslab2.mech.okayama-u.ac.jp/students/h_yamashita/sell_prod2.htm
日立工程管理		http://www.hitachi.co.jp/Div/omika/prdcts/nxauto/nxauto.htm
NHK スペシャル「変革の世紀」		http://www.nhk.or.jp/henkaku/closeup/02/04.html

I 主題設定の理由

平成9年5月13日に文部大臣から「今後の専門高校における教育のあり方」の諮問をうけ、平成10年7月に理科教育及び産業教育審議会から答申された。これをうけて、平成11年3月29日に高等学校学習指導要領の全面的な改訂が行われた。

そして、新しい教育課程の基準は、平成15年度から年次進行により実施することになっている。工業生産は、科学技術の高度化、高度情報化社会、不透明で混迷する経済状況、環境問題、価値観の急激な変化の中で行われている。さらに、産業構造の変化・国際化・職業構造の変化に適切に対応する必要がある。そのため工業教育は、「将来のスペシャリスト」を育成することを目指している。また、工業技術の諸問題を主体的、合理的に解決し社会の発展を図るとともに、「どのようなものをいかに作るか」という能力の育成が課題になっている。このことから、工業生産の運営と管理に関することについて学習することは、将来の産業現場で活用する能力の育成という点で重要である。

本校では、学科改編と共に新しい教育課程を編成している。各学科共通に履修させる科目を2科目、共通的な基礎科目を3科目について学習することとした。そして、各学科の特質により選択可能な基礎科目のうち、工業生産について学習できる科目「工業管理技術」を選択科目として3年次の全学科（5学科）で2単位履修することにした。（図2参照）その内容は、工業管理技術の概要・工程管理・品質管理・生産の計画と管理・安全管理・工場の経営、そして関係法規他と多岐に渡っている。企業の社会的責任・起業家等についても、この科目に包含される。平成14年度現在、教科書は出版されていない。

したがって、「工業管理技術」の学習指導要領の理解に努め、指導内容・年間指導計画の作成・指導方法について研究したい。また、企業との連携を図り安全管理・工程管理・人事管理等の実務について直接聞き取り調査を実施し、工業の管理と運営に関する実務を指導内容に加えたい。

II 研究目的と手順

1. 研究の目的

企業の組織全体としての経営・管理と、工業生産現場における運営・管理に関する知識を習得させ、将来の産業現場で実際に活用する能力を育てるため、工業科目「工業管理技術」の指導項目・指導時間を設定して、年間指導計画を作成する。

2. 研究の手順

研究手順は次のとおりである。

1) 指導内容の章・節を設定する。

- (1) 学習指導要領にそって章を設定する。
- (2) 各章の節を設定する。

2) 指導内容を検討する。

- (1) 「工業管理技術」と関係の深い各学科の教科書や参考文献等を基に、関連項目の内容を検討する。
- (2) 重点項目と考える工程管理や安全管理等について、工業生産現場で実践している内容を把握する。
- (3) 年間指導計画を作成する。

3) 重点項目の具体的な指導方法について検討する。

III 研究の内容

1. 科目「工業管理技術」の本校教育課程における位置づけ

工業科目「工業管理技術」の本校教育課程における位置づけとその科目の目指すことについて、学習指導要領・学科改編や工業生産現場の実際などから考えてみる。

1) 学科改編

本校は、平成14年度入学から学科改編により機械・生産系の機械システム科、電子・情報系の電子システム科と情報システム科、建設・環境系の建築システム科と土木環境システム科の3系5学科6学級とした。

- (1) 時代に対応した「新しい学科」を設置
- (2) 豊かな感性と創造性を育む「ものづくり」教育の重視

(3) 地域産業界と連携した工業教育の実践

(4) 興味・関心・進路に合わせ学べる学習システム

このとき、学習指導要領の改訂を考慮に入れスムーズに新教育課程への移行が成されるよう配慮されている。

2) 科目の位置づけ

学科改編によって設定した工業科目「工業管理技術」の位置づけは次のように考える。工業管理技術の学習を通して、企業の組織全体の経営・管理と、工場生産現場における運営・管理に関する知識の習得、将来の産業現場で実際に活用する能力を育成することは、意義のあることである。

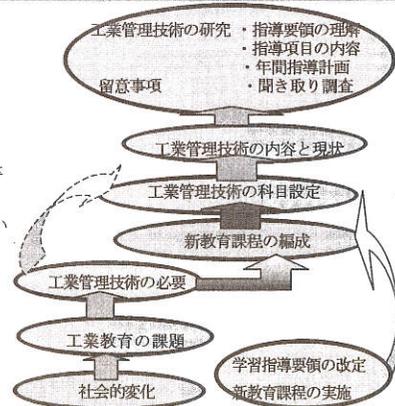
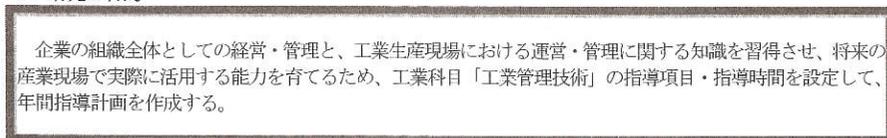
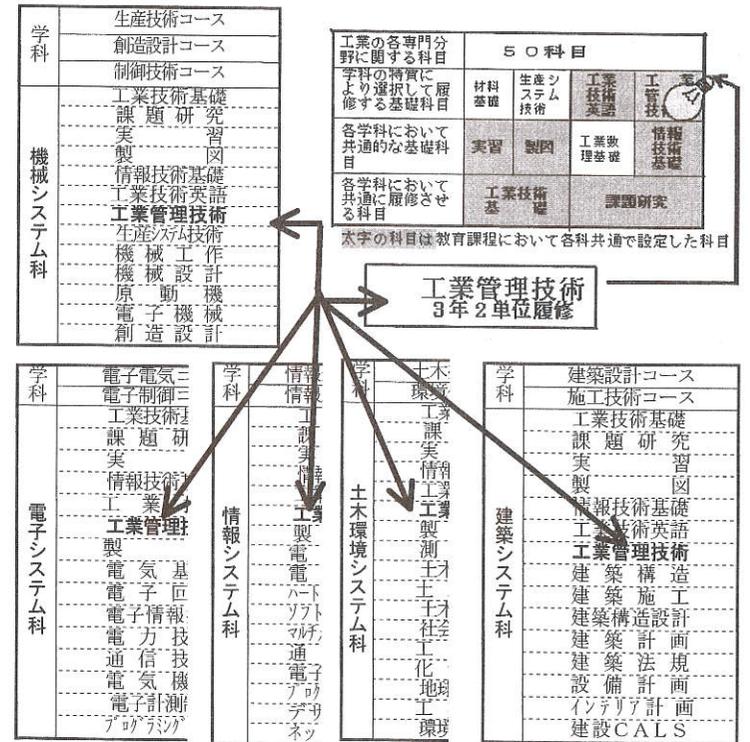


図1 主題設定と研究



注：教育課程表は紙面の都合上、また既に公表につき省略した。
図2 各学科における工業科目と工業管理技術

図2は、各学科の設定した専門科目と工業管理技術の位置や指導要領における位置づけを示したものである。工業科目「工業管理技術」は、全学科で専門科目において共通に、3年次において2単位の選択履修ができる科目とした。（学習指導要領では、2～8単位程度履修されることを想定して内容が構成されている。）その具体的な学習事項は、工業管理技術の概要、組織、生産の計画と管理、工程管理と品質管理、安全管理、生産現場の経営である。

つぎに、教育課程における科目の位置づけについて考えてみる。図3に示すように、1年次は、総合的な学習の時間において工業生産の概要について学習し、自ら学科のコースを選択できるようにする。2年次においては、総合技術学習で企業就労体験を通して生産方式や安全について学習する。また、1・3年次の実習では、工場見学を実施して工業生産の実際の視覚的体験により職業理解を深める。この科目の位置づけは、1・2年次の学習の上に「企業の経営や管理について学習できる」専門選択科目と考える。また、課題研究では、設定したテーマの工程表を作成して日程管理、品質管理の手法でより良いものをつくることことができる。ここでは、

各科共通の科目と総合的な学習の時間の関係についてあらわしたが、さらに各学科においては関連の深い科目と連携して、効果的な学習ができるようにすることが大切である。

2. 科目「工業管理技術」の目指すこと

「工業管理技術」が目指す目標・ねらい・内容の構成及び取扱い、学習指導要領及び学習指導要領解説に、次のように示されている。

(1) 目 標
工業生産の運営と管理に関する基礎的な知識と技術を習得させ、実際に活用する能力と態度を育てる。

(2) ね ら い
企業の組織全体としての経営・管理と、工場における運営・管理に関する知識と技術を習得させ、将来の産業現場において実際に活用する能力と態度を育てることである。

(3) 内容の構成及び取扱い
ア. 指導に当たっては、産業現場を見学したり企業での具体的な事例を取り上げたりして、具体的に理解させるよう留意すること。
イ. 指導に当たっては、ベンチャー企業の具体的な事例を取り上げ、起業家の養成の重要性についても簡単に扱うこと。

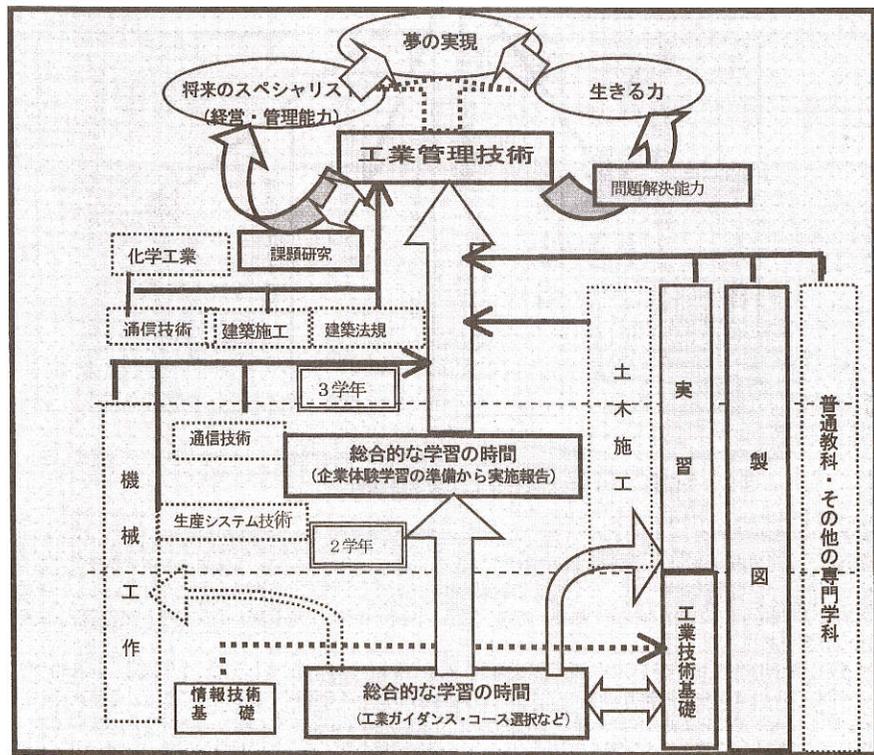


図3 科目の位置づけと目指すもの 図において□は各学科共通科目を示す。

「工業管理技術」においては、少子化と生徒の地元志向から、地域に必要とされる技術者を育成することが必要である。そのため、工業管理技術を学び、工場の経営・管理の基礎をもち職業人として広い視野で工業生産に対応できる能力・態度の習得を目指す。さらに、学習を通して企業責任、国際性、環境問題等を意識し対応できる態度と能力を養うことが大切である。

つまり、科目の目指すものは、効率的な生産管理を学習することで工業人としての問題解決能力を養い、また安全管理の学習を通して命の尊さを考え、企業の役割や使命からものづくりの大切さを知ること。そして、郷土を愛し、生きる力や創造力とチャレンジ精神を育成して、将来の夢を設定し実現することにあると考える。(図3参照)

また、上記にあるように内容の取り扱いについては、実際の工業生産現場がどのような生産活動をしているかを、将来の技術者である生徒が学習できるように配慮しなければならない。

したがって、適宜より多くの情報を企業や新聞等から取り入れ、情報の取捨選択をし、教材として使用し、授業効率の向上に努めなければならない。

さらに、「工業管理技術」の学習を通して、さまざまな経営や管理手法を身につけることにより、時代の変化に対応できる能力・態度を育成することが大切である。

そして、「生産効率の重視」から「生産の社会的意義や必要性を踏まえた技術の重視」へ発想を転換しなければならない。「ものづくり」の実践を支える技術は柔軟な発想・創意工夫が必要である。

3. 年間指導項目

1) 章・節・項目のねらい

ここで取り上げた年間指導の章・節・項目のねらいは、学習指導要領解説の内容に基づいて作成した。

章	節	項目	ねらい
第1章 工業管理技術の概要	1. 管理技術の意義	1) 工業生産とわが国の経済 2) 工業の将来と企業の社会的責任	工業生産とわが国の経済・工業の将来と企業の社会的責任について、基礎的な知識を習得させることをねらいとする。
	2. 工業生産に関する組織の概要	1) 工業生産に関連する企業の組織 2) 工場の運営	
第2章 生産の計画と管理	1. 生産の計画	1) 需要予測と生産方式 2) 工場生産計画及びオートメーション・オペレーションズリサーチ	生産の計画・生産の管理について扱い、それに関する基礎的な知識を習得させることをねらいとする。
	2. 生産の管理	1) 生産管理と管理の手順 2) 無欠点運動 (ZD運動)	
第3章 工程管理と品質管理	1. 工程管理	1) 工程計画 2) 資材管理 3) 機械設備管理 4) 作業研究	工程管理・品質管理について取り扱い、それに関する基礎的な知識を習得させることをねらいとする。
	2. 品質管理	1) 品質管理の目的と重要性 2) 品質管理の方法 3) データ整理	

第4章 安全管理	1. 生産現場における災害とその防止	1) 安全管理の意義と目的 2) 労働災害 3) 施設の災害 4) 災害防止 5) 安全管理組織	安全管理の意義と目的・労働災害について取り扱い、安全管理に関する基礎的な知識と技術を習得させることをねらいとする。
	2. 環境の保全	1) 生産活動と公害 2) 環境の保全	
第5章 工場の経営	1. 人事管理	1) 人事管理の進め方 2) 賃金 3) 福利厚生 4) 労使関係	人事管理・人事管理の進め方・工業関係法規について取り扱い、工場の経営に関する基礎的な知識と技術を習得させることをねらいとしている。
	2. 工業会計	1) 原価計算の目的 2) 総合・個別・部門別の各原価計算 3) 減価償却	
	3. 工業関係法規	1) 基本的な法律 2) 技術及び工業の発達に関する法規 3) 労働に関する法規 4) 経営に関する法規	
	4. ベンチャー企業	1) ベンチャー企業の設立 2) ベンチャー企業の経営	

4. 年間指導計画を作成するに当たって

つぎに年間指導計画の基本的な考え方を述べる。図4は年間指導計画を作成するときのイメージ図である。図中において「基本的な考え方」の下側には指導計画を作成するために参考としたものを、上側には指導内容に取り入れる主なものを示す。

1) 基本的考え方

年間指導計画を作成するに当たって次の点に留意して作成した。

- (1) 学習指導要領・学習指導要領解説の内容を基礎・基本とする。
- (2) 生徒の実態をふまえて、関連する科目の指導内容を参考にする。
- (3) 新聞・インターネット等からできるだけ多くの情報を得て、時代に即応した内容とする。このとき、あまり専門的に深くならないように留意する。

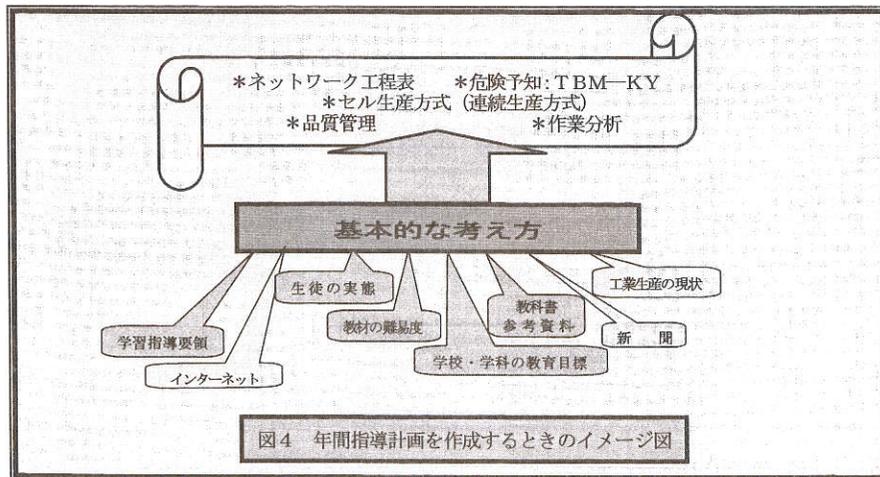


図4 年間指導計画を作成するときのイメージ図

(4) 「安全第一」の観点から安全管理に重点をおく。

(5) 工程表の基礎を学習し、クリティカルパスと原価低減の関係を知る。さらに、計画通りの日程で製作するための有力な手法であることから、工程表の学習に重点をおく。

(6) 工業生産の現状を知るために企業の協力をいただき、指導内容に反映させる。

2) 工業生産の現状

学習指導要領に内容の構成及び取り扱いは「現場を見学したり企業での具体的な事例を取り上げたりして、具体的に理解させるように留意すること。」とある。これを受けて、工業生産の現状について多くの企業から助言をいただいた。その内容の主なものは以下の通りであり、工業管理技術の指導内容に反映させる。

(1) 生産方式について

連続生産方式について、万能工(多能工)が主に手作業で1人か2人で、ほぼ全て製作するセル生産方式を採用している。ほかの組み立て工場でも同じであることを企業訪問・電話で確認した。今まで連続生産方式といえば、大規模機械設備を利用したベルトコンベア方式・トランスファーマシンなどが主と考えていた。その方式は、薬品・セメント製造・大規模鍛造工場などの装置産業では、現在も採用されている。

そこで、「第2章・1・1)・(2) 生産方式の選定」にセル生産方式を指導内容に加える。また、類似のモジュール生産方式についても簡単に触れる。

(2) 無欠点運動について

工業生産現場では、無欠点運動(ZD)をさらに進めて品質管理マネジメントに変わっていることがわかった。しかし、ZD運動の考え方は、品質管理などで有効であることから生産管理の理念として重要である。したがって、「第2章・2・2) 無欠点運動」で触れる。

(3) 工程管理について

生産工場における生産現場では、ネットワーク工程表ではなく「作業研究」について深く検討して工業生産活動を行っている。生産効率向上という観点で①作業測定②方法の研究③稼働率分析について、「第3章・1・4) 作業研究」に取り入れる。

また、製造業では、管理者がネットワーク工程表を生産の中期経営計画で使用していることを知った。建設業では、生産活動全般に渡ってネットワーク工程表が使用されている。そこで、建設の施工管理に関係の深い土木施工管理技師・建築施工管理技師・管工事施工管理技師などの国家試験の受験資格が2級で、専門高校当該学科卒業後の実務経験が2~3年必要である。検定試験にはネットワーク工程表の基礎が出題される。このことから、ネットワークの基礎的な考え方に重点を置くことにする。したがって、「第3章・1・1)・(3) ネットワーク工程表の作成」に取り入れて専門的に深入りしないように配慮する。

(4) 品質管理について

工業生産では、特性要因図や管理図は、使用されなくなってきたことがわかった。しかし、品質管理(QC)の七つ道具といわれた、特性要因図・チェックシート・グラフ・分散図・パレート図・ヒストグラム・管理図を使用して製品の品質向上が図られてきた実績がある。この七つ道具は、さまざまな事象の実態を解明する手段として有効であることには変わらない。そこで、学習指導要領に記載されている特性要因図・パレート図・ヒストグラム・管理図については、「第3章・2・2) 品質管理の方法」と「第3章・2・3) データ整理」で、簡単に扱うことにする。このとき、統計学など数学的に深入りしないように留意する。

(5) 安全管理について

安全管理についての有効な手段として、「危険予知訓練TBM-KY」がある。現在、この手法が実際に使用されている。安全第一や命の尊さとともに「第4章・1・5) 危険予知」で扱うことにした。

(6) ベンチャー企業について

ベンチャー企業を興す手順と経営について、「第5章・4・1) ベンチャー企業の設立」と「第5章・4・2) ベンチャー企業の経営」で扱う。留意点として具体的な事例を提示できるようにする。また、生徒自身が、ベンチャー企業設立について、さまざまな情報を入手する学習活動を取り入れる。ここで、企業を興すことよりも難しいのは、企業活動をいかに継続するかという点に留意する。そして、ベンチャー企業にとって大切なことは独自性のある高水準の技術と良好な人間関係を維持できる企業人が必要であることを理解させる。

(7) その他

多くの企業より、「工業管理技術の内容は、高校生にとって理解しにくい分野である。そこで、あまり専門的に深入りせずに、管理法の基礎的な習得を目指したほうがいいのではないかと。しかし、安全管理・工程管理を学習することは重要である。」という意見があった。

5. 年間指導計画

指導の内容及び指導上の留意点は、つぎのとおりである。

章	節 項目 小項目・内容	時間		指導上の留意点
		章	節項目	
第1章 工業管理技術の概要	1. 管理技術の意義 1) 工業生産とわが国の経済 (1) 意義と概要 ・生活上必需品・住む家 ・高層建築物・道路・橋・構造物 ・機械・電化製品・大量物質の消費 ・必要生産活動の必要性 2) 工業の将来と企業の社会的責任 ・顧客のニーズ・生活上必需品 ・安全で信頼性の高い・廉価 ・環境問題への対応・国際的視野 ・企業の社会的責任・モラル	7	3 2 1	工業技術管理を何故学ぶのか、その概要を理解させる。企業の社会的責任とその使命の重要性や生徒が将来その役割を担うことに誇りを持つように配慮する。
	2. 工業生産に関する組織の概要 1) 工業生産に関連する企業の組織 (1) 経営者と管理者 ア. 経営者 (administrator) イ. 管理者 (manager) (2) 企業の組織 2) 工場の運営 (1) 生産工場 ア. 組み立て型生産工程 イ. 装置型生産工程 (2) 建設・土木現場	4	1 1 2 2 .5 .5	企業の組織はどのようになっているか。ライン組織・ラインスタッフ組織など基本的な組織の仕組みと建設現場の運営の概要を学習させる。 国際的視野に生産活動に配慮する。
第2章 生産の計画と管理	1. 生産の計画 1) 需要予測と生産方式 (1) 需要予測と生産数量 ア. 市場調査 (market research) ア) 資料分析 イ) 直接消費者の動向を知る ウ) 試験的販売 イ. 生産数量 ア) 国民所得の増減 イ) 生活様式の変化 ウ) 景気の動向 エ) 人口の増減 オ) 季節的変動 カ) 科学技術の進展 (2) 生産方式の選定 ア. 受注生産と見込み生産 ア) 資料分析 イ) 直接消費者の動向を知る ウ) 試験的販売 イ. 個別生産、ロット生産、連続生産部、品中心生産 (セル型生産) ウ. 自家生産と外注生産 (3) 生産にかかわる全般的な管理概要 ア. 工場の計画 ア) 工場の立地 イ) 工場建物 ウ) 工場設備の配置 ア) 機能式配置 イ) 流れ系列式配置 ウ) 混成式配置 イ. オートメーション ア) メカニカルオートメーション イ) プロセスオートメーション ウ) その他のオートメーション ア) オフィスオートメーション イ) ビルディングオートメーション ウ) ホームオートメーション 2) 工場生産計画及びオートメーション ・オペレーションズリサーチ	1 3	8 2 2 3 1	市場調査の重要性を認識させるため工業生産についての課題 (例: 今必要な製品は何か) を与え、生徒に新聞等で調査させ、発表させる。 工業生産方式では、1・2年の実習における学習内容を基に、基礎的な生産方式について、理解させる。このとき、機械で生産することが、ある時には、効率が一番ではない場合もあることに留意し指導する。現在、連続生産の方式として採用されているセル生産方式・モジュール生産方式についても触れる。 また、ITの発達による生産方式についても触れる。

第2章 生産の計画と管理	2. 生産の管理 1) 生産管理と管理の手順 (1) 生産計画 ア. 工程計画 イ. 人員計画 ウ. 安全計画 エ. 在庫計画 オ. 設備計画 (2) 生産管理 ア. 4大管理 (QCDS) ア) 品質管理 (Quality) イ) 原価管理 (Cost) ウ) 工程管理 (Delivery) エ) 安全管理 (Safety) イ. 生産の5M (生産計画) ア) 製法 (Method) イ) 労務 (Man-power) ウ) 資材 (Material) エ) 機械 (Machine) オ) 資金 (Money) (3) 管理の手順 2) 無欠点運動 (ZD運動)	5	2 1 1 1	生産管理については、様々な計画や管理の基礎的な考え方を習得させるように留意する。 また、ZD運動については、QCと関連させながら、歴史的な経過にこだわらず、その意義について企業人として必要な概念に重点をおき習得させるように留意する。
	1. 工程管理 1) 工程計画 (1) 工程定表の種類 ア. 橋線式工程表 ア) パーチャート イ) ガントチャート Henry L. Gantt. イ. 曲線式工程表 バナナ曲線 ウ. パートの手法 ア) パートPERT : Program Evaluation and Review Technique イ) クリティカルパス CPM: Critical Path Method PERT/CPM (2) ネットワーク工程表 ア. 矢線 ア) アロー Arrow イ) ダミー イ. 結合点 event (node) (3) ネットワーク工程表の作成 ア. 作業手順 作業者・機械・資料 イ. 日程計算 ・最早開始時刻 (EST) ・最早終了時刻 (EFT) ・最遅開始時刻 (LST) ・最遅終了時刻 (LFT) ウ. クリティカルパス Critical Path クリティカル結合点 エ. スケジューリング ア) ネットワーク工程表とクリティカルパス	2 2	1 2 2 3 2 1 2	工程管理の意義と必要性については、基礎的な概念を理解できるようにする。特に、ネットワーク工程表については、じゅうぶん時間をとって、その基礎を理解できるようにする。また、簡単な工程表を書くことができるようにする。専門的に深入りしないように留意する。 工程管理をして無駄をなくし顧客のニーズにあった安全な商品や、納期内に供給することが工業人として重要なことに留意して指導する。 日程計算において、最早開始時刻 (EST: earliest starting time) 最早終了時刻 (EFT: earliest finish time) 最遅開始時刻 (LST: latest starting time) 最遅終了時刻 (LFT: latest finish time) である。
第3章 工程管理と品質管理	2. 品質管理 1) 品質管理の目的と重要性 (1) 品質 (Quality) ・顧客のニーズ ・無駄をなくす (2) 品質管理の種類 (Quality control) ア. 品質管理統計的品質管理 (SQC: Statistical Quality Control) イ. 総合的品質管理 (CWQC: Company-Wide Quality Control) 全社的品質管理 (TQC: Total Quality Control) [ISO9001 QMS]	10	1 2	品質管理の重要性を理解できるように3) データ整理と関連させながら学習できるように工夫する。 また、ISO9001について調査する時間を取り、書籍やインターネット等で調査してQMSについて知る。

第3章 工程管理と品質管理	2) 品質管理の方法 (1) データ (2) 品質の良否 ア. ばらつき イ. 実験結果 ウ. パレートの分析 3) データ整理 (1) 統計的手法 ア. データ整理 イ. 推定と検査 ウ. ヒストグラム エ. ヒストグラム イ. 正規分布 (2) 特性要因図 ア. 生産の4要素(品質決定要因) ・4M Man Material Method Machine イ. ブレインストーミング ウ. 特性要因図 (3) 管理図 ア. x-R管理図			1	管理者が工業生産において品質決定の要因として考えるときは4Mであり、生産の5Mと関連させて指導する。
			2	正規分布の山の形についての概念を扱い、数式は紹介程度の扱いとする。	
				3	コンピュータによる計算を取り入れることも検討する。データ整理については、測定から特性要因図を書くところまでBSを含め体験的に学習させるように心掛ける。
			1		
第4章 安全管理	1. 生産現場における災害とその防止 1) 安全管理の意義と目的 (1) 安全管理の意義と目的 ア. 人命の尊厳 イ. 機械化 ウ. 損害の大きさ エ. 災害の発生への対応 オ. 危機管理の必要性 2) 労働災害 ア. 製造業・建設業の災害大 3) 施設の災害 4) 災害防止 (1) 災害の原因 (2) 物的要因 (3) 管理上の原因 5) 危険予知 ・TBM-KY (BSの手法) (危険予知訓練) 6) 安全管理組織 (1) 安全管理と衛生管理 (2) 安全衛生管理委員会の組織図 2. 環境の保全 1) 生産活動と公害 2) 環境の保全 ・ISO14001	15	1 2	2	安全は何より優先する。安全第一を徹底できるように配慮する。人的要因による事故は零にしなければならないことに留意してその考え方の徹底を図る。 危険予知訓練を通して、如何にして、危険を予知し安全に作業をするか。そして自宅に無事に帰れる喜びを味わう大切さを指導する。 国際化した工業生産において環境 ISO14001の取得は必要不可欠な課題である。企業の公害に対する基礎的な考え方を学習させる。
				2	2
				3	
第5章 工場経営	1. 人事管理 1) 人事管理の進め方 (1) 雇用と配置 (2) 人事考課 (3) 昇進 (4) 教育訓練 2) 賃金 (1) 賃金形態 ア. 時間給 イ. 能力給 (2) 賃金体系 ア. 賃金体系の例 3) 福利厚生 (1) 健康保険 (2) 住居施設 (3) 経済的援助 (4) 教育・娯楽 4) 労使関係 (1) 労働力の売買取引 (2) 労働法 ア. 労働契約 イ. 労働協約 ウ. 労働条件 エ. 団体交渉 ・争議行為 オ. 人事管理 ・意思疎通	10	3	1	人事管理については、人事考査の基礎的な概念、賃金については、「原価は、原材料・制作費・人件費などの積算であること。販売価格は、一般管理費などを組み込まなければならぬことを知る。」を習得させる。 労働条件については、求人票などを参考にして調査する演習形式で理解を深めることができる。一方で、賃金や待遇だけでなく、働くことの意義について、留意する必要がある。 固定資産の原価を徐々に費用化していく減価償却の考え方を習得させる。
				1	

第5章 工場経営	2. 工業会計 1) 原価計算の目的 ア. 企業の存続・収益・公認会計士 イ. 資金調達 2) 総合・個別・部門別の各原価計算 3) 減価償却	3	1	法規については工業生産活動において決められた法規があることを習得させる。
	3. 工業関係法規 1) 基本的な法律 2) 技術及び工業の発達に関する法規 3) 労働に関する法規 4) 経営に関する法規	2	.5 .5 .5 .5	起業家については具体的事例をインターネットや新聞で調査させ発表させるように留意する。
	4. ベンチャー企業 1) ベンチャー企業の設立 2) ベンチャー企業の経営	2	1 1	
	合計	67時間		

6. 具体的授業内容

ネットワーク工程表と危険予知についての具体的授業内容を示す。

1) ネットワーク工程表

「第3章 工程管理と品質管理・1. 工程管理・1) 工程計画・(3) ネットワーク工程表の作成」の授業内容を、つぎに示す。

(実施時間3時間)

内容	指導内訳	具体的内訳
ア. 作業手順 (1時間)	ア) 先行作業と後続作業	工程計画どおりに生産を進めるには、作業方法が標準化されている必要がある。作業方法を標準化するには、工程・機械・工具・作業者・各種資料などを基にして作業条件を検討することが重要である。作業動作や作業時間など作業研究(work study)・動作研究(motion study)を常に研究して、作業手順を決定して工程計画をすることが大切である。ネットワーク工程表を作成する基本ルールがある。
	イ) 同一結合点からの矢線の数の制限	1つの結合点に入ってくる矢線の数に制限はないが、1つの結合点からの後続の結合点に入る作業は1本に制限される。
	ウ) ダミーによる前後関係の表示	ダミーは、作業の前後関係を表すときに使用され、時間的要素がない。
	エ) 開始点と終了点	1つのネットワーク工程表において、開始のイベントと終了のイベントは、それぞれ1つでなければならない。
	オ) イベント番号	イベント番号は、正の整数を原則として、1つのネットワークでは同じ番号を2つ以上あてはならない
	カ) その他	ア) 作業分割: 作業分割することによって、実状にあった計画をして、作業時間の短縮を図ることができる。これを作業分割という イ) 作業の集約: ネットワークが複雑になったときには、幾つかの作業を1つの作業として表し、全体のネットワークが読み取れるようにする。
イ. 日程計算 (1.5時間)	ア) 最早開始時刻	各作業を最も早く開始できる時刻を、最早開始時刻(EST: earliest starting time)という。
	イ) 最早終了時刻	各作業を最も早く終了できる時刻を、最早終了時刻(EFT: earliest finishing time)という。
	ウ) 最遅開始時刻	全体の作業完了に遅れない範囲で各作業を最も遅く開始してよい時刻を最遅開始時刻(LST: latest starting time)という。
	エ) 最遅終了時刻	最遅終了時刻(LFT: latest finish time)

	例題	簡単なネットワーク工程表で上記の計算を通して理解を深める。
	演習	1・2年の「工業技術基礎」・「実習」を通して体験した事を、作業分析し、簡単な工程表を作成する。
ウ. クリティカルパス		最も長い時数を要する経路（ルート）をクリティカルパスと呼び、工程を支配している。
エ. スケジューリング (0.5時間)	フォローアップ	これに対して、計画全体を所定の目標に適合したかたちに調整することをスケジューリング（日程調整）とよぶ。人間集団・機械の不慮の故障・資材入荷状況の変化など作業の遅れを生む要因がたくさんある。これに対し、即応することをフォローアップという。フォローアップは、放置しておけば予定した計画から遊離してしまう現実を調整することである。

2) 危険予知

「第4章安全管理・1. 生産現場における災害とその防止・5)危険予知」の授業内容を、つぎに示す。

危険予知（TBM-KY）活動は、中央労働災害防止協会が労働災害防止の一環として、ゼロ労働災害運動として発展させた活動である。企業は「安全管理計画」を定め、危険予知訓練トレーナーを養成し、作業員に導入周知する必要がある。危険予知訓練の基本的な部分を理解して手法の研究をすすめ、作業内容や作業環境の変化に応じて部分的改善や全面的な見直しを図る必要がある。これらの部分的・全面的な見直しに当たっては、作業の実態を踏まえ、「みんなで、早く、正しく」できる方法とすることが望ましい。安全作業を進める上で活用される無災害職場を達成することを目的とする。

KYT基礎4ラウンド法

「どんな危険が潜んでいるのか」をメンバーで話し合い、問題解決を次の四つの段階（R：ラウンド）を進めるが、話し合う場合はブレインストーミング（BS）の四原則を活用して行う。

- | | | | |
|--|---|-------------|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 1. 批判を禁止 2. 自由奔放に 3. 大量の話題 4. 便乗し加工 | } | 四原則
を活用し | <ul style="list-style-type: none"> (1) 本音でわいわい話し合う（リラックス） (2) 本音でどンドン話し合う（生きた情報） (3) 本音でぐんぐん話し合う
（短時間：ただし、授業では時間を計画的にとる） (4) なるほど・これだ（合意） |
|--|---|-------------|---|

導入		整列、番号、あいさつ、健康チェック（精神状態も）		
展 開	ラウンド	問題解決の4ラウンド	危険予知訓練の4ラウンド	危険予知訓練の進め方
	1R	事実をつかむ [現状把握] BSでたくさんの量の意見を出す。	どんな危険が潜んでいるか	みんなの話し合いで、イラストシートの中に潜む危険要因を発見し、その要因が引き起こす現象を想定する
	2R	本質（原因）をさぐる [本質追及] 絞り込みのため質を大事にする。	これは事前のポイントだ	発見した危険要因のうち、これが重要だと思われる危険要因を把握して。○印、さらに絞り込んで◎印をつけ、指差唱和して確認する
	3R	対策を立てる [対策樹立] BSでたくさんの量の意見を出す。	君ならどうする	○印をつけたら重要危険を解決するには、どうしたらよいかを考え、具体的に実行可能な対策を立てる

	4R	行動計画を決める [目標設定] 絞り込みのため質を大事にする。	私はこうする	対策のうち、重点実施項目を絞り込んで*印をつけ、それを実践するためのグループ行動目標を設定し指差唱和する。
確認		指差呼称項目を1項目に設定し3回演練（気持ちを入れて唱和）し、タッチアンド・コールで締めくくる。		

以上の説明をした後で、生徒は、小グループに分かれて、提示された具体的事例もしくは、各グループで演習題材を設定する。その後、上記の導入・展開・確認の順序でTBM-KY活動をする。

その後、大判用紙などに書き込んだものを使用して、発表会を実施する。実施に当たっての留意事項として、①全員がグループに入れるように工夫しグループ名を決める。②班長・副班長・記録・発表者など全員が役割を持つ。③記録用の大判用紙・マジック数色を準備する。さまざまな工夫を志向する。授業時間は、事前の説明1時間、グループ活動2時間、発表会1時間、報告書1時間の合計4時間を標準とする。

IV 研究のまとめ

1. 研究の成果

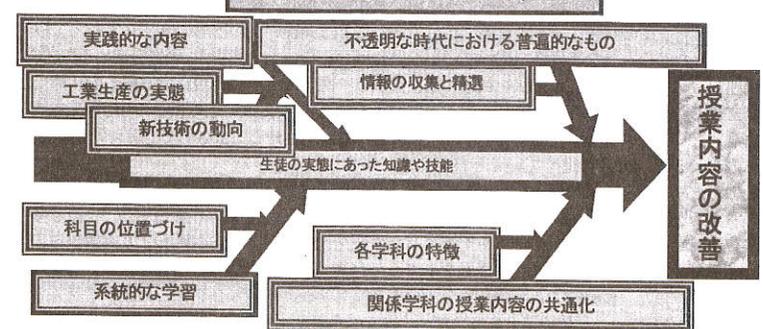
- 1) 工業科目「工業管理技術」における効果的な指導について、学習指導要領の理解に努め章立てができた。
- 2) 章立て後に、「工業管理技術」と関係の深い参考文献や教科書の内容から項目について調べて授業資料を検討することができた。
- 3) 多くの企業人から「工業管理技術」についての助言をうけて、生産方式・無欠点運動・工程管理・安全管理・ベンチャー企業など年間指導計画に取り入れることができた。
- 4) 授業内容の検討から年間指導計画を作成することができた。
- 5) 関係書籍と新聞・インターネット・会社・知人等から幅広い情報を得て、授業の参考資料を作成することができた。
- 6) 本研究において、「工業管理技術」の位置づけを明確にすることにより、工業生産の管理・経営全般を守備範囲にする工業の中核的概念と捕らえることができ、その果たす役割は工業人としての夢を叶える基礎となり得ると考えられる。

2. 今後の課題

1) 授業内容の改善

- (1) 今回作成した年間指導計画をもとに、関係学科（機械システム科・電子システム科・情報システム科・建築システム科・土木環境システム科）で話し合いを持ち、授業内容の共通化について検討をする。このとき、各学科の特徴を大切にす。
- (2) 科目の位置づけを考慮に入れて、1年から関連科目と連携して系統的に学習できるように、今回作成した授業資料を検討し、修正あるいは改善を加えて充実する。
- (3) 工業管理技術に関して、さらに情報の収集をし、精選をして授業内容に反映させる。
- (4) 不透明な時代における普遍的なものの追及、新技術の動向、工業生産の実態などを踏まえ、実践的な内容を取り上げて実社会で役立つ内容にする。生徒が学ぶ知識や技能について、さらに検討を重ねる。

図5 授業内容改善のイメージ図



授業改善のためのグループウェアの活用とその有効性についての研究
 ～授業の設計・分析・評価・改善への利用～

天童市立第四中学校
 教諭 工藤 実



目 次

- I 研究主題設定の理由
- II 研究仮説
- III 研究の内容
 - 1 ねらいにせまるための考え方
 - (1) 授業改善とグループウェア
 - 2 ねらいにせまるための実践
 - (1) グループウェアの基本構想
 - (2) 情報モラル指導計画
 - (3) 作成したグループウェア
 - (4) 授業での展開例
 - (5) グループウェアから得られた効果
- IV 研究のまとめ
 - 1 研究の成果
 - 2 今後の課題
 - 3 終わりに

2) 授業の実践

- (1) 授業の実践にあたっては、生徒の実態を把握して、あまり専門的に深入りせず工業管理技術の基礎的なことが理解できるように配慮する。また、授業効率がどうすれば上がるのか具体的な手法を検討する。
- (2) 教室授業になり、退屈な内容となりやすいので体験的授業を取り入れるように努める。たとえば、品質管理の学習に簡単な測定を取り入れて、工業生産の現状把握のため、新聞・インターネット・図書館利用による調査を通して、自ら学ぶ力の育成を図る。場面に応じて、発表会を開催し自分の考え方を表現する機会を作る。
 また、ブレンストーミングを使用した小集団活動を通して思考・判断力・問題解決能力を養う。さらに、小集団活動により協調性の育成を図る。そのため、ソフト面(学習方法)やハード面(小集団活動室)の整備について検討する。
- (3) 「工業管理技術」のポートフォリオ形式等の学習ノートに書かせて、管理手法の学習の経過と効果を生徒が認識し成就感を味わえるよう配慮する。(図6 授業の実践イメージ図 参照)

3) 評価

- (1) 「工業管理技術」の全体を通しての評価方法について、研究する。
- (2) 平成14年7月に山形県教育委員会が示した高等学校「学習評価資料集 豊かな学力の確かな評価のために」を基準として、各学科の科目担当者により組織的に評価法の検討をする。

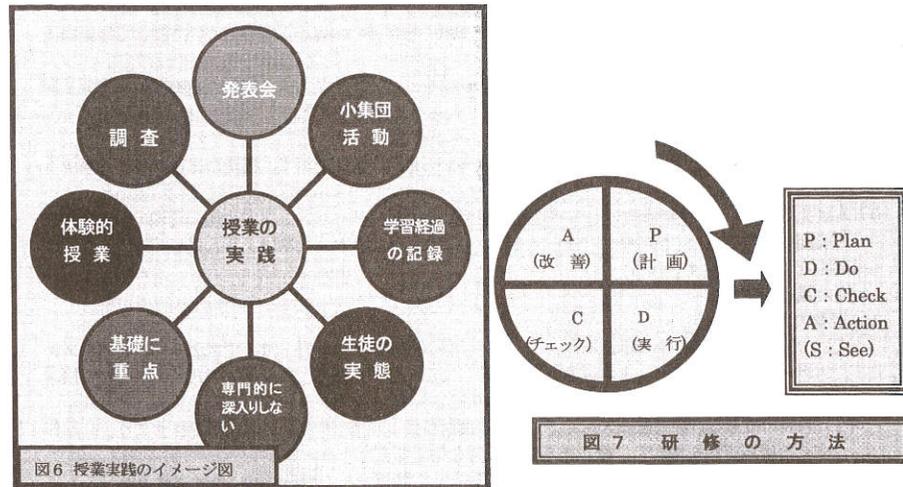


図6 授業実践のイメージ図

図7 研修の方法

3. おわりに

科目「工業管理技術」は、その内容が多岐にわたること、内容が専門的で難解なこと、実践を踏まないこと定着が難しいことなど問題が山積しているように思います。しかし、経営的な思考を持った工業人の優位性・意義を考えると、生徒の将来にとって必要な科目であることは間違いないと思います。よって、授業内容や方法を暗中模索しながらも更なる研修を重ねていかなければならないと考えます。研修を進める方法の一案として、品質管理システム(QMS)の方法を利用する。つまり、図7のように、現在はPlanの状態これからさらに研修をして計画を終了させ、実施し、検討して改善を加えて、社会状況・生徒の実態・工業界を念頭に再び計画する。このサイクルを繰り返すことにより授業効率を向上させる。まさしく、教育管理システム(EMS)とも表現できる管理法で進めていくと良いと思います。

最後に、この貴重な研修の機会を与えてくださいました山形県教育委員会、お忙しい中ご指導くださった山形県教育センター鈴木所長はじめ諸先生方、情報教育部の秋葉副所長はじめ諸先生方、特にご多忙にもかかわらず貴重な時間をさいて温かいご指導をくださった主任指導主事の天津先生に心より感謝申し上げます。所外研修で助言をいただいた3社、様々な情報を下さった企業・団体・本校の歴代PTA会長等多くの方々にお礼申し上げます。また、勤務校である山形県立山形工業高等学校の船越校長をはじめとする諸先生方のご支援とご指導に対し、さらにこの研修の機会を与えてくださいました近藤前校長、菅原教頭に厚くお礼申し上げます。

主な参考文献

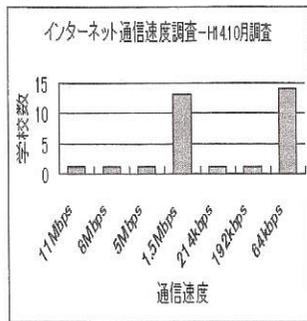
「情報教育の理論と実践」	編著者 林徳治 宮田仁	実教出版
「情報科教育法」	著作者 大岩元 橋孝博	オーム社
	半田亨 久野靖 辰巳丈夫	
「中学校学習指導要領解説」	著作者 文部省	東京書籍
「情報教育の実践と学校の情報化」	著作者 文部科学省	
～新「情報教育に関する手引き」～		
「平成14年度情報通信白書」	著作者 総務省	ぎょうせい
「Active Server Pages 構築術」	著作者 升屋正人	SOFTBANK
「OS・ネットワーク」	著作者 日経BP ソフトプレス	大日本印刷
「コンピュータで支援する生徒の活動」	編 著 清水克彦・板花京子	明治図書
～教学・図形分野での新しい展開～		
「HTMLタグ辞典」	著作者 アンク	翔泳社
「AUTOASP」	著作者 アンク	
「今日からつかえるASP3.0サンプル集」	著作者 山田祥寛	秀和システム
「かんたん Access 2002 基本操作」	著作者 町田奈美	図書印刷
「情報化社会に向けて学習意欲を育てる」	著作者 東北学院大学 鈴木 克明	
～ARCS 動機付けモデルからのヒント～		

I 研究主題設定の理由

ネットワークゲームや携帯電話、電子政府、電子県庁など、ネットワーク技術が普通の生活の中に浸透するようになり、私たちの生活と深い関わりを持つようになってきました。これから益々ネットワーク技術と深い関わりを持つ子供たちが、情報を活用できる力を身につけることは、大変重要なことになってきました。

本県では、快適にインターネットが利用できる1.5Mbps以上の回線速度に対応している学校は、約50%です。約半数の学校は、64Kbpsの速度であるため、

【グラフ1】



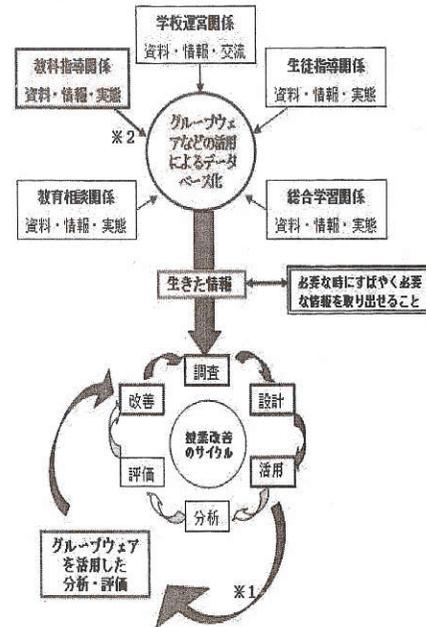
調べ学習に活用するのが難しい状況です。(グラフ1-平成14年10月のインターネット通信速度調査より)国では、平成17年度までに、すべての教室にコンピュータを導入することを目標としており、その活用のしかたや運用方法について各校での対応が急がれています。

本校では、コンピュータ室や職員室から快適にインターネットに接続できる環境にあり、子供たちの調べ学習や職員の授業準備に活用しています。今後、子供たちの情報活用能力を育成するために、また生徒理解のために学校運営や生徒指導、教育相談、各教科の授業、総合的な学習の時間など、様々な場面で活用できるようにすることが課題となっています。さらに、技術・家庭科においても、子供たちに身につけさせたい能力を育成するための計画が十分でなかったり、子供たちの実態に基づいた効果的な授業でなかったりなどの課題がありました。

本研究では、子供たちの情報活用能力の育成と、実態に基づいた授業へ改善されるようになることを、ねらいとしてグループウェアの新たな活用方法について検討しました。授業改善を図1のようにとらえ、そのサイクルが繰り返されることで授業改善が進みます。そのサイクルの次の場

に、グループウェアを活用することを考えました。まず、情報をデータベース化することで、必要な時に必要な情報を手に入れ、利用できるようにすることで「調査」に役立てる場面、また「分析・評価」で活用して、授業改善や支援を効率よく行うことに活用する場面です。このように授業改善サイクルの「調査」や「分析・評価・改善」でグループウェアの機能を活用することにより、授業改善が進み、子供たちの実態に基づいた授業展開や支援ができるようになるのではないかと考えました。

【図1】研究主題解説図



(注)※1.※2は主題設定の理由に対応しています。

II 研究仮説

授業改善のためにグループウェアの機能を活用すれば、子供たちの実態の把握が容易にできるようになり、子供たちの実態に応じた効果的な授業展開や支援ができるようになるのではないかと。

III 研究内容

1 ねらいにせまるための考え方

(1) 授業改善とグループウェア

(ア) 学習意欲の実態分析について

授業の中で、無理なくしかも客観性のある実態把握ができるように、子供たちの学習意欲をモデル化する方法について検討しました。学習意欲について、分析の容易さや他の研究での利用状況などを考え、アメリカの教育工学者ケラー教授(John M.Keller)の考案したARCSモデルを利用することにしました。

ARCSモデルについてケラーは学習意欲を高める手だてを4つの側面、「注意」(Attention)、「関連性」(Relevance)、「自信」(Confidence)、「満足感」(Satisfaction)から考えるのが便利だと指摘している。この頭文字をとってARCSモデルと名付けられている。(東北学院大学 鈴木, 1995)

それぞれの側面の意味をまとめると次のとおりです。

「注意」は「おもしろそうだ」「何かありそうだ」という側面

「関連性」は今までの生活体験から自分にとっての「やりがい」や「意義」を感じる側面

「自信」は今までの成功体験や自分の能力から「やればなんとかできる」と感じる側面

「満足感」はこれまでの努力を振り返って「自分に実力がついた」「やって良かった」と努力が報われたと感じる側面

これらの側面を授業の中で把握し、授業改善に活かしていくには、グループウェアの機能を活用するのが有効であると考えました。従来の質問紙法は、授業の前後に調査する方法であり、授業の流れの中で実態を分析し、授業改善をするには不向きでした。そこで、実態分析しやすいうちに、アンケートの調査項目を参考文献「コンピュータで支援する生徒の活動」編著清水克彦・板花京子をもとに表1のように作成しました。その中から、学習意欲を分析するのに必要なアンケート項目を、授業の内容に応じた選び、授業の導入、展開、まとめのそれぞれの場面で、調査をおこないました。その調査の場面で、グループウェアを活用することで簡単に分析、評価、改善ができると考えました。

【表1】授業内でのARCSの調査方法

授業の流れ	ARCS アンケート	調査のねらい
導入	「注意」(Attention) ○ふるい ↔ 新しい ○つまらない ↔ おもしろそう ○変化のない ↔ 変化のある etc	学習課題や学習内容への注目度について調査し、「おや、なにかありそうだ」「おもしろそうだ」という心の動きに注目する。
展開	「関連性」(Relevance) ○なじめない ↔ 親しめる ○むだ ↔ やりがい ○やらされた ↔ 自らすすんで etc	子供自身の生活体験と学習課題や学習内容の間に、関連性を持っているかについて調査し、「やりがいがある」「自分の役に立ちそうだ」という主体性の高まりに注目する。
閉	「自信」(Confidence) ○目標がわからない ↔ 目標がはっきり ○自信がもてない ↔ 自信のつく ○先生のペース ↔ 自分のペース etc	子供自身の生活体験から、今の自分の力で到達可能かどうか、学習に取り組むことへの自信について調査し、「自分には無理だ」「やればなんとかできそうだ」という課題解決への意欲に注目する。
まとめ	「満足感」(Satisfaction) ○喜べない ↔ 喜べる ○不満足 ↔ 満足 ○したくない ↔ またやってみたい etc	学習全般を通しての満足感を調査し、「やってよかった」「自分の力になった」「自分が正當に評価された」など、次の学習への意欲の高まりに注目する。

(イ) 授業改善や支援のしかた

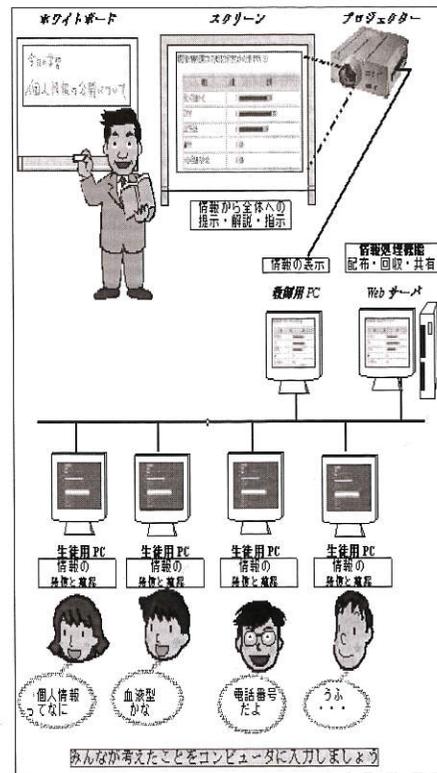
授業の導入、展開、まとめのそれぞれの段階で得られる調査結果から、表2のような授業改善や支援を計画しました。

【表2】ARCSの意欲づけの調査結果の利用

項目	授業改善や支援のしかた (例)
注意 (A)	<ul style="list-style-type: none"> 一課題や題材への「注目」が低い場合一 ○子供たちに関心のある話題や物を利用して、課題や題材への関心が高まるように支援する。 ○関連のある事例やコンテンツなどを利用して、課題や題材への注目度が高まるように支援する。 ○導入の構成や題材、課題が実態にあっているかを検討する。
関連 (R)	<ul style="list-style-type: none"> 一課題や題材への「関連性」が低い場合一 ○子供たちが課題や題材を自分自身のこと、として考えられない原因を探り、その原因を取り除けるように支援する。 ○子供たちと関連のある事例の紹介や関連づけがうまくできている子供たちを例に支援する。
自信 (C)	<ul style="list-style-type: none"> 一課題や題材への「自信」が低い場合一 ○学習のねらいや方法が十分に伝わっていないことが原因であれば、全体または個別に支援する。 ○失敗経験が多く、自信を持っていない子供には個別指導をおこなうことで支援する。 ○子供たち同士が相互に教えあえるような雰囲気作りをおこない、学習しやすい環境となるように支援する。
満足 (S)	<ul style="list-style-type: none"> 一課題や題材への「満足度」が高い場合一 ○満足できた要因を探り、教える側のねらいが達成しているかを確認することで、次の授業に活かせるようにする。 一課題や題材への「満足度」が低い場合一 ○満足できなかった原因を探り、授業改善や支援のあり方を検討する。 ○授業の流れや題材の適切さ、課題への価値の持たせ方などを吟味して次の授業や計画に活かせるようにする。

2 ねらいにせまるための実践

(1) グループウェアの基本構想



【図2】グループウェアの基本構想図

グループウェアは、図2のような基本構想で作成しました。その利用のしかたについて説明します。指導者は、ホワイトボードやプロジェクターを利用して、授業をおこないます。子供たちは、指導者の質問に対して生徒側のPC(コンピュータ)に、入力して回答します。その回答は、Webサーバに書き込まれ、グラフや一覧表として作成されます。作成された情報は、誰もが見ることのできる情報として、活用できるようになります。(子供たちに見られない情報である場合は、非表示にする事も可能です。)その情報は、指導者のねらいにより、プロジェクターに表示して、子供たちへの提示をしたり、解説をしたり、指示をしたりする等の活用ができるようになります。

(2) 情報モラル指導計画

グループウェアを活用する授業は、技術・家庭科の「情報とコンピュータ」の領域で、「表3」の計画に基づいて実施しました。その領域では、情報活用能力の育成を、ねらいとしています。情報活用能力は、「情報活用の実践力」と「情報の科学的な理解」、「情報社会に参画する態度」これらの要素から育成されます。本実践では、情報活用能力の構成要素の1つである、情報モラル(情報社会に参画する態度)を育成するための授業を、実施することにしました。事前調査から、情報モラルへの子供たちの興味、関心が弱いことから、様々なコンテンツを導入教材や実習教材として、利用することで興味・関心を持てるように配慮しました。

一授業実践の日程と主な内容一

- 【見学】1月14日2年選択技術
 【授業内容】「個人情報の公開について」
 1月16日3年選択技術
 1月21日2年選択技術
 【授業内容】「ネットでの買い物について」
 1月23日3年選択技術
 1月28日2年選択技術

【表3】一情報モラルの指導計画一

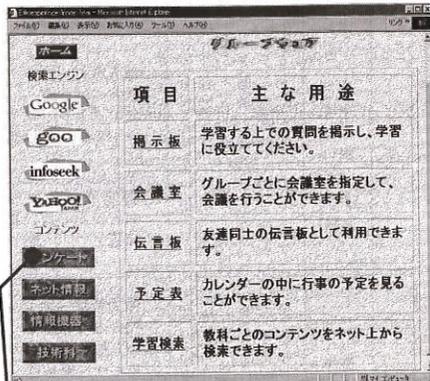
No	指導項目	指導上のねらい	指導教材の例
1	チャットの利用の仕方	チャットを利用することと様々な人たちが交流ができるようになるが、心ない悪口や中傷により、他人を傷つけてしまったり、トラブルになつたりする面を考えさせる。	○導入教材一ネット社会の歩き方 ・24チャットで個人情報は言わない ・25チャットの危険性 ○実習教材一校内チャットの利用
2	掲示板の利用の仕方	掲示板の利用上の問題点や上手な利用の仕方について考えさせ、掲示板の有効な利用の仕方について考えさせる。	○導入教材一ネット社会の歩き方 ・6ネットでの悪口は要注意 ・7ネットで悪口が罪になる ○実習教材一校内掲示板の利用

No	指導項目	指導上のねらい	指導教材の例
3	個人情報の公開について (授業実践)	個人に関する様々な情報があることを知り、それらの情報を持つ意味や重要性について、正しく理解し、インターネット上で個人情報を公開することの意味や危険性について、配慮できるようにする。	○導入教材一ネット社会の歩き方 ・10住所や電話番号を教えるのは慎重に ・11個人情報は公開しない ・12個人情報は大切なデータ ○実習教材一ネット社会の歩き方「解説つき画面」
4	ネットでの買い物 (授業実践)	インターネットで様々なものを購入できる便利さと、その危険性について理解し、正しいインターネットの利用の仕方について考えさせる。	○導入教材一ネット社会の歩き方 ・29クレジットカードの扱いは慎重に ・31雲隠れに注意 ○実習教材一パソコン商店街での買い物練習
5	著作権について	著作権者の権利を守ることの必要性について知り、著作権の保護と、著作物の有効な活用について考えさせる。	○導入教材一ネット社会の歩き方 ・13他人の文書のコピーは要注意 ・14音楽データ交換サイトは要注意 ・15コピーしてもいいの ○発展教材一「許諾の取り方」の練習
6	電子メールについて	電子メールを利用する時のマナーやその仕組みについて理解させ、安全なメールの利用のしかたについて、考えさせる。	○導入教材一ネット社会の歩き方 ・19チェーンメールはカット ・20スパムメールはカット ○実習教材一メールソフト ○発展教材一17ネズミ講は禁止 ・18マルチ商法に注意
7	出会い系サイトの罠	安易な気持ちでの利用から、様々なトラブルや犯罪に巻き込まれている現状を知り、出会い系サイトの利用がいかに危険なものであるかを、認識させる。	○導入教材一ネット社会の歩き方 ・22ネット上のあぶない出会い ○事例紹介一小中学校インターネット安全教育ガイド ・「データ」の参照

(3) 作成したグループウェアの概略

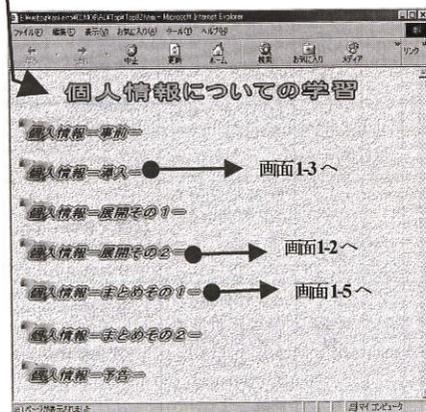
トップの画面では、掲示板、会議室、伝言板、予定表などのグループウェアや YAHOO、GOOGLE、GOO などの検索エンジンを利用して、調べ学習がしやすいように作成しました。また、情報機器のしくみや情報モラルに関しての様々なサイトの利用ができるようにしました。教科指導に必要な資料、情報、子供たちの実態が手軽に調査し、授業に活かせるように作成しました。

画面 1-1 グループウェアトップページの画面



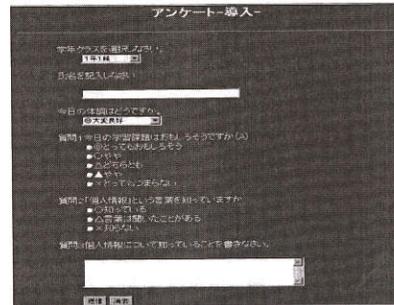
このページの左側フレームの「アンケート」をクリックすると下図のような授業展開用の画面が表示されます。この画面から、授業の流れに従って、次の画面 1-2 のように選択して利用します。

画面 1-2 授業で活用したホーム画面

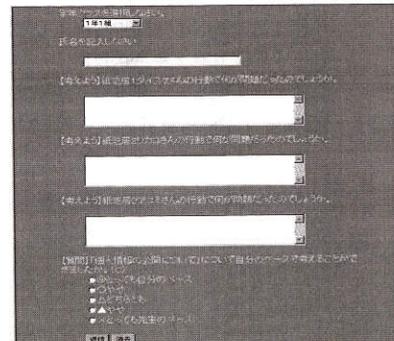


画面 1-2 は「個人情報の公開について」の授業で使用したホーム画面です。グループウェアとして使用した画面は「個人情報の公開について」の授業で、全部で 7 枚作成しました。その中の一部次に紹介します。(次の画面は全て ASP を使用して作成したものです。)

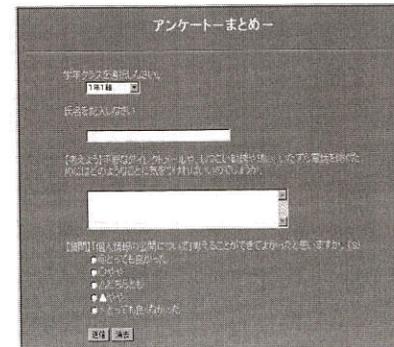
画面 1-3 授業の導入で活用した画面



画面 1-4 授業の展開その 2 で活用した画面



画面 1-5 授業のまとめで活用した画面

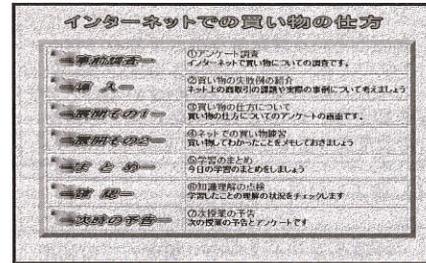


(4) 授業での展開例

今回実践した授業は、技術・家庭科の「情報とコンピュータ」の領域の内容で、情報化社会に参画する態度の育成をねらいとしたものです。ここでは、作成した画面を授業の流れに従って、どのように利用したか、その概略について説明します。

学習課題「ネットでの買い物について」

画面 2-1 ホームの画面



【導入】

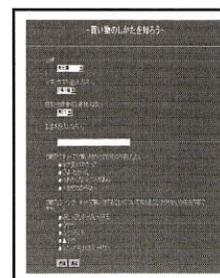


「導入」をクリックすると導入の画面が表示されます。ここでは、題材や ARCS の「注意」の側面のアンケートを実施しました。(ここで「注意」の側面を把握)

プロジェクターでネットでの買い物について紙芝居をおこない、展開その 2 で行う買い物のしかたを師範しました。

引用ネット社会の歩き方

【展開 その 1】



「展開その 1」をクリックすると展開その 1 の画面が表示されます。ここでは ARCS の「関連性」の側面と「自信」の側面を調査しました。(ここで「関連性」の側面と「自信」の側面を把握)

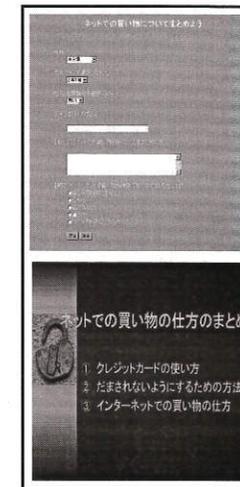
【展開 その 2】



「展開その 2」をクリックして、電腦商店街で仮想買い物体験を行いました。このサイトは CGI で作成されているので実際の買い物と同様に体験できます。

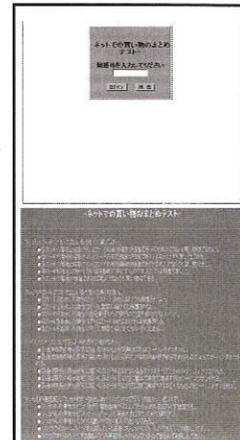
引用ネット社会の歩き方

【まとめ】



「まとめ」をクリックすると、まとめの画面が表示されます。ここでは買い物体験で、どんな店が信頼できる店なのかを、考えさせました。また、題材についての知識や ARCS の「満足」の側面のアンケートを実施しました。(ここで「満足」の側面とかいもの体験についての回答を、把握) 左図のプレゼン画面と子供たちからの回答で、まとめとしました。

【評価】



「評価」をクリックすると ID を入力する画面が表示されます。ログインすれば、まとめテスト問題が表示されます。今回は授業のまとめとして実施しました。問題は選択形式で、全部で 5 問です。解答後すぐに、採点結果と解答を見ることができます。(ここで子供たちの「理解状況」を把握)

(5) グループウェアから得られた効果
(ア) 事前調査での活用

授業改善サイクルの「調査」での利用

事前の調査として「情報モラル」や「ネチケッ」についての子供たちの興味、関心について質問しました。これらの質問は、グループウェアで作成した画面に、子供たちが書き込み、送信することで質問1と質問2の調査結果が得られました。また、知識についての子供たちからの回答は未記入が多く、十分な知識がないことが分かりました。

質問1 「情報モラル」や「ネチケッ」という言葉を知っていますか。

項目	2年	3年	計%
○知っている	3人	5人	15.2%
△言葉は聞いたことがある	12人	9人	39.6%
×知らない	10人	14人	45.3%

質問2 「情報モラル」や「ネチケッ」を学習することに関心がありますか。

項目	3年	計%
◎とっても関心がある	3人	11%
○やや	4人	14%
△どちらとも	8人	29%
▲やや	3人	11%
×とっても関心がない	9人	33%

これらの授業改善サイクルの「調査」の結果から、①、②のような「分析・評価」ができました。また、③、④のように授業の「改善」に役立てることができました。

授業改善サイクルの「分析・評価」での利用

①「情報モラル」や「ネチケッ」という言葉は「知らない」と「言葉は聞いたことがある」子供たちで84.9%と多く、子供たちの日常生活と関連の薄い内容であることがわかりました。そして、④の改善へつながりました。②「情報モラル」や「ネチケッ」という言葉は「知っている」と答えた子供たちにどこで知ったかを聞いたところ、「インターネットをしている」と、時々目にする事があった。」という聞き出すことにつながりました。

授業改善サイクルの「改善」での利用

③「情報モラル」や「ネチケッ」について「とっても関心がない」と「やや」、「どちらとも」で73%であることから、この題材を扱うには子供達の注意を引きつける課題や教材を盛り込む必要を感じ、指導計画で導入教材や展開教材、発展教材で楽しんで学べるコンテンツの利用を計画することにつながりました。

④実態を把握する前は、テーマに沿って関連する情報をインターネットから検索してまとめるといった課題解決型の授業を予定していましたが、題材への興味、関心が弱い内容ことから調べ学習には向かない題材と考え教師主導でおこなう紙芝居形式での授業への変更につながりました。

(イ) 導入や展開での活用

授業改善サイクルの「調査」での利用

導入や展開の段階では授業の中で次のような結果を得ました。グラフ1や表4がその一例です。

【グラフ1】導入で得られた結果

【質問1】インターネットで買い物をするの危険性を感じますか。

項目	人数	比率
◎感じる	1	10%
○やや	10	100%
△どちらとも	0	0%

【質問2】インターネットで買い物をするの危険性を感じますか。

項目	人数	比率
◎感じる	1	10%
○やや	10	100%
△どちらとも	0	0%

【質問3】今日の学習内容をインターネットで調べたいものがあるか。

項目	人数	比率
◎とても興味がある	3	30%
○やや	9	90%
△どちらとも	0	0%
▲やや	0	0%
×とても興味がない	0	0%

【表4】展開で得られた結果

番号	結果	意見
1	自分の知らない言葉や用語を調べた。	
2	自分の知らない言葉や用語を調べた。	
3	自分の知らない言葉や用語を調べた。	
4	自分の知らない言葉や用語を調べた。	
5	自分の知らない言葉や用語を調べた。	
6	自分の知らない言葉や用語を調べた。	
7	自分の知らない言葉や用語を調べた。	
8	自分の知らない言葉や用語を調べた。	
9	自分の知らない言葉や用語を調べた。	
10	自分の知らない言葉や用語を調べた。	
11	自分の知らない言葉や用語を調べた。	
12	自分の知らない言葉や用語を調べた。	
13	自分の知らない言葉や用語を調べた。	
14	自分の知らない言葉や用語を調べた。	
15	自分の知らない言葉や用語を調べた。	
16	自分の知らない言葉や用語を調べた。	
17	自分の知らない言葉や用語を調べた。	
18	自分の知らない言葉や用語を調べた。	
19	自分の知らない言葉や用語を調べた。	
20	自分の知らない言葉や用語を調べた。	
21	自分の知らない言葉や用語を調べた。	
22	自分の知らない言葉や用語を調べた。	

これらの授業改善サイクルの「調査」の結果から、④、⑤、⑥のような「分析・評価」につながりました。また、例1、例2、例3のような「分析、評価、改善」への利用につながりました。

(例1) 授業改善サイクルの「分析・評価・改善」での利用

— 個人情報公開について —
「個人情報について知っていることを、書きなさい。」という質問に対して、子供たちからの回答は「いろいろ」、「わかんない」、「まあイロイロ。」「無回答」などの回答であり、十分に考えが深まっていない状態でした。そこで、全員の回答をプロジェクターで表示し、「この回答はあなたが本気で考えて答えたものですか。」と問いかけ直したところ、・名前 血液型 身長 体重(2年男子)・その人個人の秘密。公開されたら困るモノ(2年女子)・テストの点数 住所(2年女子)・個人の戸籍郵便局の暗証番号 etc....(2年男子)・住所・氏名・年齢・家族の職業(2年女子)このように自分自身を客観的に振り返らせる指導へとつながりました。

授業改善サイクルの「分析・評価」での利用

④グラフ1の1番目のグラフは「ネットで買い物をしたことがありますか。」という質問をグラフ化したものです。1人だけが「ある」という回答でした。この結果から、どんな物を購入したかを聞くことにつながりました。⑤グラフ1の2番目のグラフは「ネットで買い物をしてみたいと思いますか。」という質問をグラフ化したものです。「してみたい」という回答より、「わかんない」の回答が最も多くネットで買い物をすることの意味が十分理解できていないためと感じられました。⑥グラフ1の3番目のグラフは ARCS の「注目」に関しての調査結果です。「買い物」はしたいけど、「買い物練習」には興味がないという子供たちが、何人かいたことが原因と感じられました。

(エ) まとめでの活用

授業改善サイクルの「分析、評価、改善」での利用

まとめの場面ではグラフ2のように ARCS の情報がまとまるため、次のような資料を得ることができました。その結果より、授業のまとめの段階で満足感を持たせた子供たちは多いのですが、「注意」の側面が非常に弱く、その側面をもっと強化できるような導入の工夫がさらに必要です。このように、次の授業への改善点が、見えやすくなりました。

【グラフ2】個人情報の公開について

「注意」の側面—導入前

項目	人数	比率
◎とても大切	2	20%
○やや	10	100%
△どちらとも	0	0%
▲やや	1	10%
×とても大切でない	0	0%

「関連性」の側面—導入後

項目	人数	比率
◎とても大切	10	100%
○やや	0	0%
△どちらとも	17	170%
▲やや	4	40%
×とても大切でない	1	10%

「自信」の側面—展開前

項目	人数	比率
◎とても大切	1	10%
○やや	1	10%
△どちらとも	1	10%
▲やや	1	10%
×とても大切でない	0	0%

「満足」の側面—まとめ後

項目	人数	比率
◎とても大切	7	70%
○やや	0	0%
△どちらとも	0	0%
▲やや	0	0%
×とても大切でない	0	0%

(例2) 授業改善サイクルの「分析・評価・改善」での利用

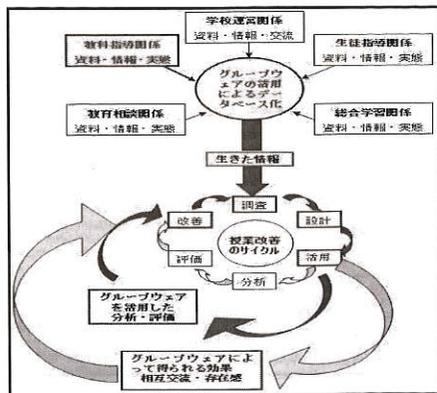
— ネットでの買い物について —
「ネットで買い物をしたいと思うには、どうすればいいですか。」という質問に対して、子供たちからの回答の例です。
・気をつけるべきだと思ふ。
住所までも書いていないのにもかかわらず送られてくる商品には驚かされた。(3年男子)
・用心に用心を重ねて、信頼できる場所からしか買わないようにする。(3年女子)
・個人情報をあまり入力なくてもいいものを買わなければならぬ。(3年女子)
・ちゃんとした店を見極める。(3年男子)
・細かな詳細までよく見て注文する。(3年男子)
・気をつけなければいけないと思った。(3年男子)
このような回答を、プロジェクターで表示して回答できずにいる子供たちの参考資料として活用するための資料として活用することで、子供たちの考えを深めさせる授業展開へとつなげることができました。

(例3) 授業改善サイクル「分析・評価」での利用

— 個人情報公開について —
授業の展開場面で3種類の紙芝居をみてもらい、それぞれについて、子供たちから回答してもらいました。その結果、2つ目と3つ目の紙芝居への回答率は95.6%と、1人以外は全員が回答できました。1つ目の紙芝居へは全員が回答でき、100%の子供たちが自分の考えを表現できました。また、2つ目と3つ目に回答できなかった1人はそれぞれ違った子供であり、全員が授業に参加することができました。これらの子供たちからの回答をもとにまとめのなかで、解説や補足などに活用することにつながることができました。

IV 研究のまとめ

1 研究の成果



【図2】授業実践から得られた効果

本研究では、グループウェアの機能を利用して、授業改善を図2のように研究を進めてきました。

①グループウェアの調査への利用

—従来のアンケート調査との違い—

- アンケート調査を実施したその場で、集計結果が得られるため、生きての情報として、活用できるようになったこと。
- 双方向でのコミュニケーションをとりながら授業展開ができるようになったこと。

—有効に活用できると考えられる用途—

- グループウェアを学級や学年の集団分析への利用は、すぐに結果がわかるため、日常的な指導には大変有効です。
 - 総合的な学習の時間など、学年や学級の枠を越えて、おこなう授業にも大変有効です。
- このように利用する側の発想次第で、様々な分野で必要な情報を、必要な時に、利用できるようになると、考えられます。

②グループウェアの分析・評価・改善への利用

—従来の授業との違い—

- アンケートは調査したその場で、集計が完了するため、その場で授業改善や支援に活用できる素早さと、指導計画や授業での改善へ利用できる側面がありました。

③グループウェアによる効果(※3)

- グループウェアを活用したことで、①、②以外に、次のような効果が得られました。
- 子供たち全員の意見や考えを反映できるようになったこと。
- 子供たち同士の相互の交流が、自然にできるようになったことで、自分と他の人との意見や考え方の違いがわかるようになったこと。
- 子供たちの意見や考えを、題材にした授業を

展開ができるようになったこと。

- 発言や発表が、苦手な子供たちでも発言しやすい環境を与えることができるようになったこと。
 - 子供たち一人一人が情報を発信し、利用できることから、授業の中で存在感を持たせることができたこと。
- このように、全ての子供たちが自ら情報を発信し、その情報がお互いの共有情報となることで、子供たち相互の交流が自然に図られるようになり、子供たちの交流や授業での居場所作りに、貢献できたように思われました。

2 今後の課題

①グループウェアを活用する上での課題

グループウェアの運用面では、誰もが情報を発信し、共有できることから、いたずらに個人の中傷に利用される場合もあり、留意する必要があります。また、グループウェアを活用する際、子供の操作ミスや重複回答、氏名の記入間違いなど、人為的なミスに対して、脆弱な面もあり、改善の余地がありました。教師側にとってはグループウェアを作成して利用するには、ASPとIISについての知識が必要です。教師が、自由に活用できるようにするまでには敷居が高いのが現状です。

②ARCSでの分析について

今回調査に利用したアンケート項目は、抽象的なものであるため、授業へのイメージを回答するものでした。きめ細やかに、授業改善や支援に利用する場合は、具体的な項目で質問した方が、支援や改善に活かしやすいのではないかと感じられました。

③今後研究していきたい内容

本研究では、情報活用能力の構成要素の一つである「情報社会に参画する態度」の育成をねらいとしてきました。今後は、「情報活用の実践力」や「情報の科学的理解」を育成するために、様々なヘルプディスクの作成やコンテンツの開発と利用について取り組み、バランス良く情報活用能力を育成していきたいと考えています。

3. 終わりに

最後に、この貴重な研修機会を与えてくださいました山形県教育委員会、東南村山教育事務所ならびに天童市教育委員会の関係各位、長期にわたりお世話になりました山形県教育センター鈴木強太所長はじめ、諸先生方・職員の皆様、とりわけ温かくご指導をくださいました情報教育部の秋葉春男副所長をはじめとする先生方、そしてお忙しい中、親身になって適切なご指導・ご助言をありがとうございました横戸隆指導主事に心より感謝申し上げます。

また、勤務校である天童市立第四中学校の岸康弘校長先生、板垣清教頭先生はじめ諸先生方のご理解とご支援に対し、さらに様々なアドバイスをいただいた中学校時代の恩師である栗原安隆先生に厚く御礼申し上げます。

『子どもたちの心と学級集団の実態を的確にとらえ、あたたかい人間関係を育てる学級経営の研究』

—アンケートによる実態調査と構成的グループエンカウンター及びソーシャルスキルトレーニングを通して—

高島町立高島小学校

教諭 小野 諭

<目次>

- I 主題設定の理由
- II 研究仮説
- III 研究方法
- IV 研究内容
 - 1 理論研究
 - (1) 構成的グループエンカウンター
 - (2) ソーシャルスキルトレーニング
 - (3) 学級満足度尺度
 - (4) ソーシャルスキル尺度
 - 2 実践研究
 - (1) 第1回アンケート
 - (2) 構成的グループエンカウンターの実践
(ソーシャルスキルを取り入れて)
 - (3) 第2回アンケート
- V 研究のまとめ
 - 1 研究の成果
 - 2 今後の課題



《主な参考文献》

- ・「エンカウンターで学級が変わる」 國分康孝監修 岡田 弘編集 図書文化 1996
- ・「子どもの心を育てるカウンセリング」 國分康孝編著 学事出版 1997
- ・「育てるカウンセリング 考え方と進め方」 國分康孝編集 図書文化 1998
- ・「好ましい人間関係を育てるカウンセリング」 手塚郁恵著 学事出版 1998
- ・「ソーシャルスキル教育で子どもが変わる」 小林正幸、相川充編著 図書文化 1999
- ・「エンカウンターで学級が変わるショートエクササイズ集」 林伸一編集 図書文化 1999
- ・「学級経営コンサルテーション・ガイド」 河村茂雄編集 図書文化 2000
- ・「グループ体験による学級育成プログラム」 河村茂雄編著 図書文化 2001
- ・「エンカウンターで道徳」 諸富祥彦、尾高正浩編著 明治図書 2002

I 主題設定の理由

素直に自分の心を表現することが苦手であったり、自分のよさや友だちのよさに気づけなかったりする子どもたちの存在が気になりはじめています。このような子どもたちは、小さなトラブルでも人間関係がこわれやすく、心のつながりも切れやすいことから、学級全体の雰囲気にも大きな影響を及ぼすと考えられる。また、不登校やいじめ、学級崩壊等の要因にもなることが心配される。

そこで、子どもたちの心と学級集団の実態を的確にとらえながら、「構成的グループエンカウンター」や「ソーシャルスキルトレーニング」を計画的に実践することで「あたたかい人間関係」を育成していくことが重要であると考へた。また、このような手法を身近な先生方にもぜひ紹介したいと考へ、この主題を設定した。

II 研究仮説

アンケート調査から、子どもたちの心と学級集団の実態をとらえ、それに応じた「構成的グループエンカウンター」や「ソーシャルスキルトレーニング」を計画的に実践すれば、子どもたちは自分自身や友達のよさに気づき、人と人とのつながりの大切さを実感し、学級内にあたたかい人間関係が生まれるだろう。

III 研究方法

1 研究構造図

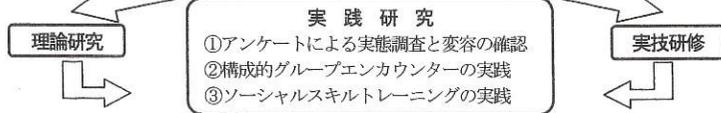
<子どもたち・学級の課題>

○素直に自分の心を表現することが苦手である。自分のよさや友だちのよさに気づけない。
○人間関係が不安定で、心と心の結びつきが弱くなっている集団

あたたかい人間関係のある集団の必要性

<研究>

『子どもたちの心と学級集団の実態を的確にとらえ、あたたかい人間関係を育てる学級経営の研究』



<目標>

あたたかい人間関係のある学級

2 実践研究の進め方

- 学級の実態把握 (対象3~6年) ①学級満足度調査 ②自己・他者にかかわる意識調査
- 実践研究対象学年の選定
- 対象学年児童のソーシャルスキルの実態把握 ①ソーシャルスキル尺度調査
- 授業の計画と実践
- 実践後の学級の実態把握 ①学級満足度調査 ②自己・他者にかかわる意識調査 ③ソーシャルスキル尺度調査
- 研究のまとめ

IV 研究内容

1 理論研究

(1) 構成的グループエンカウンター (Structured Group Encounter 略称SGE)

あたたかい人間関係づくりに効果的なのが構成的グループエンカウンターである。『構成』とは「時間」「人数」「テーマ」等の枠を設定すること、『エンカウンター』とは「本音と本音の交流」のことである。つまり、ふれあいによる人間関係をグループを通して意図的に体験させる方法である。

<構成的グループエンカウンターのおねらい>

①自己理解・自己受容	②他者理解・他者受容	③自己表現・自己主張
④信頼体験	⑤役割遂行	⑥感受性の促進

また、基本的な進め方は次の通りである。

<構成的グループエンカウンターを進め方>

①おねらいの説明	②ウォーミングアップ (雰囲気づくり)	③インストラクション (やり方の説明)
④エクササイズ (活動)	⑤シェアリング (振り返り)	⑥まとめ

(2) ソーシャルスキルトレーニング (Social Skills Training 略称SST)

あたたかい人間関係づくりに大切なものとして「ソーシャルスキル」がある。「ソーシャルスキル」とは、対人関係を営む技術のことである。「ソーシャル」とは対人的なこと、人間関係に関することを意味し、「スキル」は知識や経験に裏打ちされた技術、技能を意味する。つまり、ソーシャルスキルトレーニングとは、子どもの対人関係技能を訓練することである。

(3) 学級満足度尺度

学級満足度尺度は、「たのしい学校生活を送るためのアンケートQ-U」(都留文科大学河村茂雄教授考案)の中の「いごちのよいクラスにするためのアンケート」のことである。

子どもが学級にどのくらい満足しているかを測る尺度で、「承認得点」と「被侵害得点」の2つを組み合わせて測定する。「承認得点」は学級の中で自分が認められているという思いを、「被侵害得点」は学級の中でいじめや悪ふざけを受けているという思いを測るものである。 ※Q-U (QUESTIONNAIRE-UTILITIES)

(4) ソーシャルスキル尺度

この尺度は、河村茂雄教授が小・中学生約6000人を対象に、学級生活で活用しているソーシャルスキルを調査して作成したものである。ソーシャルスキルの2つの柱として、「①配慮のスキル」「②かかわりのスキル」をあげている。

- ①配慮のスキル: 対人関係における配慮のスキル、対人関係の基本的なマナー
- ②かかわりのスキル: 人とかかわるきっかけや関係の維持、感情交流を形成するスキル

※理論研究を通して

- 『あたたかい人間関係のある集団』
心と心の交流とふれあいのある集団、一人一人が素直にありのままの自分を表すことができ、かつメンバーから受容され、自分の居場所がある集団ととらえた。
- 『自分自身や友だちのよさ、人と人とのつながりの大切さ』
「私たちは自分を好きであるときほかの人を好きになり、自分を大切にしているときほかの人も大切にす」(好ましい人間関係を育てるカウンセリング 手塚郁恵)とあるように、人間関係づくりには「自分が好き」という自己肯定感が重要である。自己理解を深め、人とかかわりの中で自己有用感が育てば自己肯定感も高まってくる。同じように、他者に対しても肯定的に理解しようとし、他者有用感(他者に支えられている)が深まれば他者肯定感も高まり、人と人とのつながりの大切さを実感し、あたたかい人間関係が生まれると考へた。

○これらのことから、自己肯定感と他者肯定感に関する「自己・他者にかかわる意識調査」を作成した。

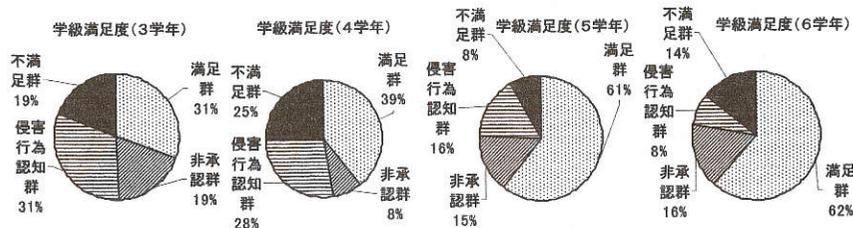


2 実践研究

(1) 第1回アンケート

①学級満足度調査結果 (11月22日実施)

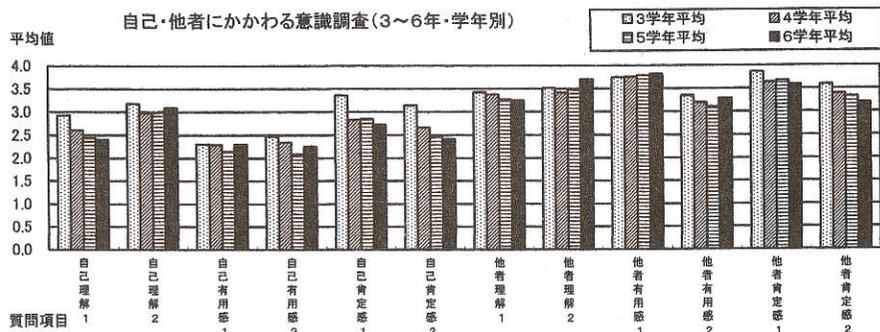
- 5・6年は「満足群」が約60%を占め、「不満足群」は8〜14%であった。
- 3・4年は「満足群」が30〜40%程度であり、「非承認群、侵害行為認知群、不満足群」が5・6年に比べ多かった。



②自己・他者にかかわる意識調査結果 (11月22日実施)

○「子どもたちの心」の実態把握として、自己及び他者にかかわる意識について、3〜6年生369名に調査を行った。

<調査項目> 自己にかかわって：①自己理解 ②自己有用感 ③自己肯定感
他者にかかわって：①他者理解 ②他者有用感 ③他者肯定感



上のグラフから、次のようなことがわかった。
 ○全般に「他者にかかわる項目」の方が「自己にかかわる項目」より高い値であった。
 ○どの学年も「自己有用感」の項目が低い値であった。反対に「他者有用感」「他者肯定感」が高い値であった。
 ○3年生の「自己にかかわる項目」の値が他学年に比べ高く、学年が上がるにつれて値が低くなる傾向があった。特に「自己肯定感」はその傾向が顕著に表れていた。

これまでのことをまとめると、
 ①「学級満足度調査」結果から3・4年は5・6年に比べ満足群が少ない。
 ②「自己・他者にかかわる意識調査」結果から、3年から4年にかけて「自己肯定感」の下がり方が大きい。
 ③研究者との人間関係を考えると、理科を担当している4年生の2つの学級の子どもたちとのつながりが深い。
 ↓
 4年生の2学級を実践研究対象とする

③ソーシャルスキル尺度調査結果 (12月11日実施) 2つの学級にソーシャルスキル尺度調査を実施した。
 <全国との比較>

	配慮のスキル	かわりりのスキル
2学級平均	57.1	37.0
全国の平均的範囲	55点以上63点未満	33点以上40点未満

※肯定的児童とはアンケート調査4枚のうち、「3または4」を選んだ児童とする。
 ※「許容的態度2」の質問内容：「友だち同士でいて、腹がたってもカーツとした態度をとらないでいますか。」

○左の表の通り「配慮のスキル」「かわりりのスキル」でも全国の平均的範囲内にあった。
 ○全ての項目の中で「許容的態度2」だけが「肯定的な児童30人」「否定的な児童29人」と同じくらいで、検定の結果、差が認められなかった。また平均値も2.5と最も低かった。

(2) 構成的グループエンカウンターの実践

実態調査から、実践研究のねらいを決め、短期間に集中して実践を行うことにした。

①構成的グループエンカウンター (ソーシャルスキルを取り入れて)

期日：12月24日(火) 1月27日(月) ~ 2月12日(水) 学級活動3時間、道徳1時間、朝の会4回、給食の時間3回

<取り組みのねらい> ○あたたかい人間関係のある学級づくり

- ・友達とのかかわりを通して自己理解を深め、自己肯定感・有用感を高める。
- ・友だちに対する思いやりの心を育て、他者肯定感を高める。

<実施計画> ※ソーシャルスキル単独の授業は行わない。

<学級活動1時間> ○ねらい：他者理解、自己理解
 ○エクササイズ：「ごちゃまぜビンゴ」「いいところ四面鏡」 ○ソーシャルスキル：基本的な挨拶、聞く・話す態度

<ショートエクササイズ1> (朝の会10分)
 ○エクササイズ：「わたしはだれでしょう① (記入)」
 ○ねらい：自己理解 ○ソーシャルスキル：自己主張

<ショートエクササイズ2> (朝の会15分) (給食時間3回)
 ○エクササイズ：「わたしはだれでしょう② (発表)」
 ○ねらい：他者理解・受容 ○ソーシャルスキル：聞く態度、対人マナー

<ショートエクササイズ3> (朝の会15分)
 ○エクササイズ：「いいところ四面鏡」 ○ねらい：自己理解、他者理解
 ○ソーシャルスキル：あたたかい言葉かけ、感情表出

<ショートエクササイズ4> (朝の会10分)
 ○エクササイズ：「いいところインタビュー」
 ○ねらい：自己理解・他者理解 ○ソーシャルスキル：自己主張、聞く態度

<学級活動2時間> 「Xからの手紙」
 <1回目> (授業1時間) ○エクササイズ：「Xからの手紙 (記入)」
 ○ねらい：他者理解・他者受容 ○ソーシャルスキル：能動的な参加、あたたかい言葉かけ
 <2回目> (授業1時間) ○エクササイズ：「Xからの手紙 (感想)」
 ○ねらい：自己理解・自己受容 ○ソーシャルスキル：感情表出

<期待する子ども像>

- ・「自分のいいところわかる」「みんなの役に立っている」など自己肯定感・有用感が高まってくる。
- ・共感・受容が深まり、友だちを理解し大切にしようという思いやりの心が育ってくる。

月 日	学習内容	成 果	課 題
A組 12月24日 学級活動1h2校時	☑「ごちゃまぜビンゴ」 (他者理解)	○どの子どもも活発に活動できた。	●内容が多すぎて時間が足りず、あわただしかった。
B組 12月24日 学級活動1h4校時	☑「いいところ四面鏡」 (自己理解)	○いいところをお互いに見つけ和やかな雰囲気だった。	●シェアリングの時間を十分取れなかった。
A組 1月27日、30日 朝の会10分	☑「わたしはだれでしょう」 (自己受容・他者理解)	○発表の続きをいつするのか聞きにくる子どもが多かった。	●朝の会の時間だけでは終わらず給食の時間を3回使った。
B組 1月29日、31日 朝の会10分	☑「自己主張・聞く態度」	○とまどいながらも自分のいいところを意識するようになった。ひやかす子どももいなくなった。	●いいところを書くことができない子どもが多かった。
A組 1月30日 道徳1h3校時	主題名「思いやり親切」 題材名「心の信号機」	○自分たちの体験について活発に発言していた。	●やはり後半に時間不足が出てくる。あわただしかった。
B組 1月31日 道徳1h4校時	☑「してあげたこと・してもらったこと」 (自己理解・他者理解)	○カード交換では照れくさそうにしながらも集中して読みあっていた。	●シェアリングの時間を十分取れなかった。もっと全体発表をさせたかった。
A組 2月3日 朝の会15分	☑「いいところ四面鏡」 (自己理解)	○二度目のエクササイズだったので短時間でも活動できた。	●前回、やっていない子どもにはやり方をもっと詳しく説明すればよかった。
B組 2月5日 朝の会15分	☑「あたたかい言葉かけ、感情表出」	○どの子どもも相手のいいところを進んで見つけられた。受け取る側もうれしい気持ちも素直に感想カードに書いた。	●是非とも感想を発表し合う時間がほしかった。
A組 2月6日 朝の会10分	☑「いいところインタビュー」 (自己理解・他者理解)	○思った以上に子どもたちはたくさんいいところを言うことができた。	●たくさん言うことを意識させすぎた。
B組 2月7日 朝の会10分	☑「自己主張・聞く態度」	○黙ってしまう子どもがなくなった。全員、言うことができた。	●急ぐあまり早口になったり、うなづくことを忘れてしまった。
A組 2月10日 学級活動1h2校時	☑「Xからの手紙①」 (他者理解)	○書けないで困っている子どもがいなかった。	●「もっと書きたかった。」という子どもが多く時間が足りなかった。
B組 2月10日 学級活動1h5校時	☑「あたたかい言葉かけ」	○相手を故意に傷つけるような内容の手紙がなかった。	●時間が短いこともあり、理由をきちんと書いていない手紙があった。
A組 2月12日 学級活動1h2校時	☑「Xからの手紙②」 (自己理解・自己受容)	○友だちからの言葉を素直に受け入れていた。	●手紙の枚数に多少の違いがありそれにこだわる子どももいた。
B組 2月12日 学級活動1h4校時	☑「感情表出」	○手紙を受け取って読んでいるときの表情がとてうれしそうだった。感想も素直に書いていた。	●子どもたちが全体の前で感想や自分の気持ちを発表することは、なかなかできなかった。

③実践後の児童の評価と感想

子どもたちの振り返りカードで、事後のアンケートを取った。結果は表の通りである。

この結果から、多くの子どもたちは、エクササイズに対して「楽しかった」と感じているし、「自分や友だちのよさも発見できた」と思っていることがわかった。

～おもな児童の感想例～

	エクササイズは楽しかったか	いいところ発見できたか	友だちのいいところ発見できたか
肯定児童数	56	56	57
否定児童数	3	3	2

※肯定児童とは回答4択のうち肯定的回答「3または4」を選んだ児童

「今回のエンカウンター全体を通して感じたこと」

<A組 F・O男子> (1回目侵害行為認知群児童→2回目満足群児童)

○自分のいいところは最初あまりなかったけど、エンカウンターをしてからは自分のいいところもいっぱい見つけたし、友だちのいいところもたくさん見つけられたのでよかったです。

<A組 R・T女子> (1回目不満足群児童→2回目満足群児童)

○自分のいいところ、友だちのいいところがわかってとてもよかったです。「Xからの手紙」をまたやってみたいと思いました。

<B組 K・H男子> (1回目満足群児童→2回目侵害行為認知群児童)

○自分のいいところや友だちのいいところを見つけられてよかったと思う。

<B組 S・F男子> (1回目非承認群児童→2回目満足群児童)

○いいところがけっこうあるなと思った。

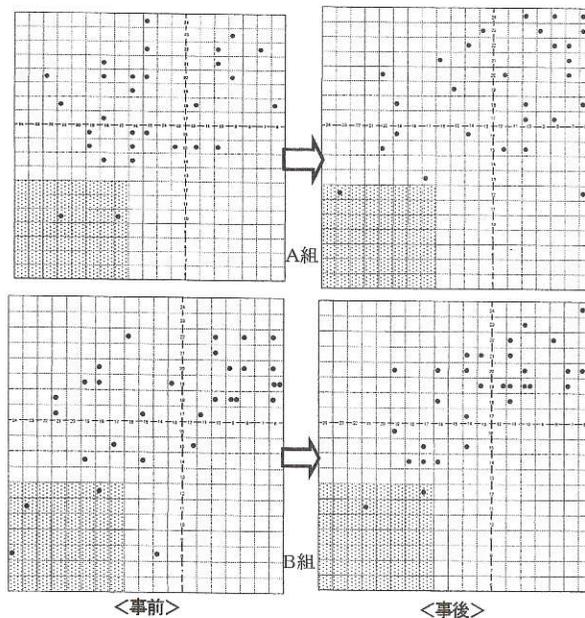
<B組 R・W男子> (1回目不満足群児童→2回目不満足群児童)

○自分にもこんないいところがあるなんて思ってもいなかった。

(3) 第2回アンケート

構成的グループエンカウンターの実践を行った後、前回と同様のアンケート調査を実施した。

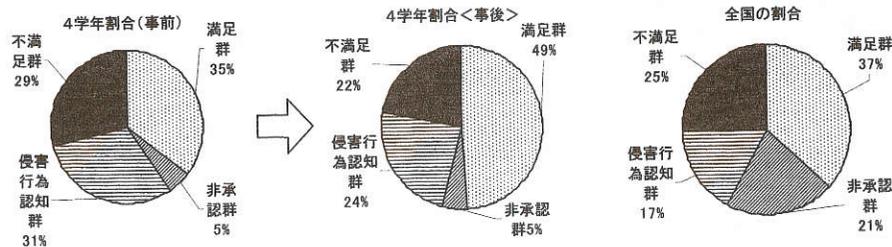
①学級満足度調査結果 (2月12日実施)



左図から、次のようなことがわかった。

- A組、B組とも集団としての凝集性が出てきている。
- 全体として右斜め上方(満足群)へ移動しつつある。
- 特にA組の方は満足群に属する児童が約2倍に増えている。
- 要支援群児童数が減り、不満足群児童の位置も満足群に近づいている。
- 侵害行為認知群児童も満足群に近づいている。

次に、事前と事後の所属群割合を円グラフに表してみた。



上のグラフから次のようなことが言える

- 満足群児童の割合が35%から49%に増加した。
- 非承認群児童の割合は変わらなかった。
- 侵害行為認知群児童および不満足群児童はどちらも7%ずつ減少していた。
- 全国の割合と比較すると、満足群児童が大きく上回り、また非承認群及び不満足群も下回っていた。よい傾向になってきたと言える。しかし、侵害行為認知群だけが全国より上回っていた。

次に、下の表は学級満足度調査の事前と事後を比較し、子どもたちの得点の変化を調べたものである。学級満足度の得点が前回より上がっている児童を「プラス児童」、下がっている児童を「マイナス児童」、変わらない児童を「変化なし児童」として、その人数を調べると下の表の通りである。

	マイナス児童	変化なし児童	プラス児童
人数(人)	14	5	40
検定結果	=	<	

検定により、実践後は「プラスになった児童が多い」ということが言える。

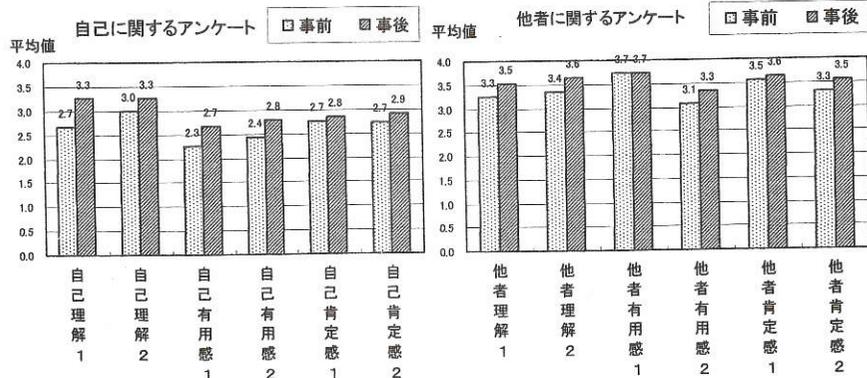
※検定はχ²検定によるp<.05

※表の見方ですが、「=」は「マイナス児童」と「変化なし児童」の間には、「差があると認められない」ことを示し、「<」は「マイナス児童」と「変化なし児童」に対して、それぞれ「プラス児童が多いという差が認められる」ということを表しています。

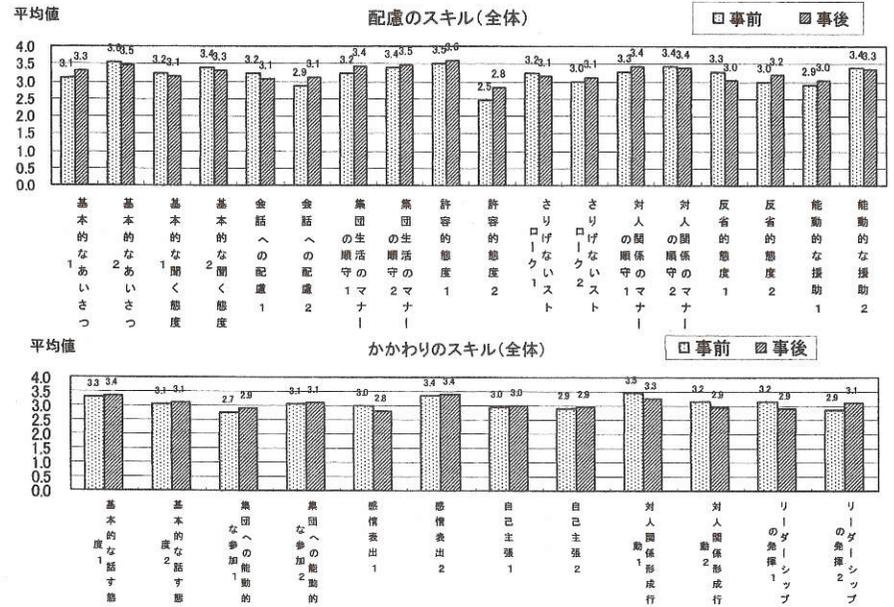
②自己・他者にかかわる意識調査結果(2月12日実施)

下のグラフより、次のようなことがわかった。

- 事前の調査と同様に「他者に関する項目」の方が「自己に関する項目」より高い値だった。
- 「自己に関する項目」はすべて事前より事後の値が上回っていた。「他者に関する項目」も、ほとんどの項目が事前より事後の値が上回った。
- 特に「自己有用感」は前回最も低い値で、「自己有用感」2項目とも平均値が2.5を下回っていたが、事後は2項目とも2.5を上回った。(自己有用感1:2.3→2.7、自己有用感2:2.4→2.8)



③ソーシャルスキル尺度調査結果(2月12日実施)



<全国との比較>

	配慮のスキル	かかわりのスキル
事前	57.1	37.0
事後	58.3	36.8
全国の平均的範囲	55点以上63点未満	33点以上40点未満

「許容的態度2」の変容

	事前	事後
肯定的児童(人)	30	42
否定的児童(人)	29	17

※検定は直接対立計算法2×2 p<.05

※肯定的児童とはアンケート調査4択のうち、3または4を選んだ児童とする。

※ ソーシャルスキルについては、構成的グループエンカウンターの中で、重点項目を決めて意識させて取り組んできた。ソーシャルスキルトレーニングだけを取り上げて1時間の授業は行わなかった。

次に、ソーシャルスキル尺度調査結果を事前と事後で比較してみた。

上のグラフからわかったこと。

- 「許容的態度2」は他の項目と比べ、まだ低い値ではあるが、前回より高い値になった。(事前2.5 事後2.8)
- 「許容的態度2」の「肯定児童数」をみると、上の表のとおり増えていることが認められた。これは「許容的な態度」を意識しながら友だちと接している子どもが多くなってきているということが考えられる。
- 「配慮のスキル」の「基本的な聞く態度」と「かかわりのスキル」の「対人関係形成行動」が2つとも前回は下回ったことは今後の課題と言える。
- 「全国との比較」の表から、事前と事後を比較すると、「配慮のスキル」は前回より若干上回り「かかわりのスキル」は若干下回った。しかし、事後の結果も2つとも全国の平均的範囲内であった。

V 研究のまとめ

1 研究の成果

- (1) 子どもたちの自己肯定感、自己有用感を高めるために構成的グループエンカウンターを実施し、道徳の授業でもエクササイズを取り入れてきた。その結果、やはり構成的グループエンカウンターは、自己肯定感や有用感を高めるのに有効であることが実証できた。
- (2) 子どもたちの他者肯定感、他者有用感はいとも高い値だったが、構成的グループエンカウンターを実施することによりさらに高い値になった。
- (3) 実践期間が2週間余りであったが、子どもたちの意識や学級集団の様子に変容が出てきた。そこで、実践の成果と課題をもとに自己肯定感を高め、あたたかい学級集団づくりに効果が期待できる短期集中型構成的グループエンカウンタープログラムを作成することができた。
- (4) ソーシャルスキルについては、事後は全ての項目が平均値2.8以上になった。(このことにより検定の結果全質問事項において肯定児童数が否定児童数より多いことが認められた。)
- (5) 子どもたちは最初、「自分のいいところ」をなかなかカードに書くことができなかったが、後半の構成的グループエンカウンターでは「自分のいいところ」を素直に言えるようになった。(後半の「いいとこインタビュー」の活動では1分間に一人平均7.9個の「自分のいいところ」を言うことができた。)

2 今後の課題

- (1) 構成的グループエンカウンターを実施した後、学級満足度調査得点が下がった子どもがいた。これらの子どもたちには、今回のような短期間のプログラム内容では効果が出なかったと言える。これらの子どもたちの結果を分析し今後もプログラムの改良を行う必要がある。
- (2) 教師から見ると、よいところがたくさんあり、友だちからも信頼されている子どもなのに、どうしても自分を否定的にみてしまう子どもがいる。そのような子どもたちへの支援法を検討していく必要がある。
- (3) 構成的グループエンカウンターを実施するとき、シェアリングの時間が足りなくなることが多かった。構成的グループエンカウンターでは、シェアリングができないと効果が少なくなることが心配されるので、シェアリングの時間を十分確保できる計画を立てていきたい。
- (4) ソーシャルスキルで、「基本的な聞く態度」と「対人関係形成行動」の2つが前回より下がっていた。今後、「聞く態度」についてはより具体的なモデルを示しながら指導すること、「対人関係形成行動」については、今回取り組んだ非言語的コミュニケーションだけでなく、声をかけ合いながら仲間づくりをするような言語的コミュニケーションのエクササイズを取り入れることを心がけていきたい。

<おわりに>

長期研修を終えるにあたり、今回の貴重な研修の機会を与えてくださった山形県教育委員会はじめ置賜教育事務所、高島町教育委員会の関係各位に対しまして、深く御礼申し上げます。

また6ヶ月という長期にわたりご指導くださいました山形県教育センター鈴木強大所長はじめ諸先生方に心より感謝申し上げます。とりわけお忙しい中、あたたかい励ましと適切なご指導をしてくださりました竹田真知子教育相談部長、横田純一指導主事および教育相談部の諸先生方には大変お世話になりました。ありがとうございました。

さらに、所属校である高島町立高島小学校佐藤雄校長先生はじめ諸先生方にはお忙しい中、子どもたちの実態調査にご協力いただきありがとうございました。特に4学年担当の先生方には授業実践において全面的にご協力をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。



情報通信ネットワークによる

交流を効果的に用いた学習の研究

天童市立成生小学校
教諭 三宅 茂晴

【目次】

I 主題設定の理由

II 研究仮説

III 研究の内容

1. 新しい手段の活用
2. 校内電子掲示板の活用
3. 校内電子掲示板を使った授業実践
4. 環境整備

IV 研究のまとめ

1. 研究の成果
2. 今後の課題

V おわりに



【参考文献】

小学校学習指導要領	文部省	1998
小学校学習指導要領解説 総則編	文部省	1998
情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進などに関する調査研究協力者会議 (最終報告)		1998
情報教育の実践と学校の情報化	文部科学省	2002
ITで楽しく確かな学力～その実現と定着のための視点と方策～ 初等中等教育におけるIT活用の推進に関する検討会議		2002
情報活用能力をはぐくむ	赤堀侃司著	ぎょうせい 2000
総論 パソコンと教育 導入から研修まで	赤堀侃司著	国土社 1998
実践に学ぶ情報教育	赤堀侃司著	JUSTSYSTEM 2002
痛快! コンピュータ学	坂村 健	集英社 2002
実践事例アイデア集 (Vol. 8～Vol.10)	日本教育工学振興会	
使ってみようコンピュータ	天童市立北部小学校	1998
パソコン用語事典2002-2003	技術評論社	2002
スクール ネットワーキング	オーム社	2002

I 主題設定の理由

今日、情報化の進展は著しく、これからの高度情報通信社会で生きていく子どもたちにとって、氾濫する情報の中から、課題や目的に応じた情報を主体的に収集、判断、表現、処理、活用する力の育成が不可欠である。学習指導要領においては、各教科の指導にあたって、児童がコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段に慣れ親しみ、適切に活用する学習活動の充実が述べられており、情報リテラシーの育成は、「生きる力」を培う上で大切なものとなる。

これまでの本校のコンピュータ活用をみると、コンピュータの操作方法の学習や、まとめの場面での作品作りにとどまっているのが現状であった。しかし、昨年度インターネットに接続され、コンピュータ活用の可能性が広がった。インターネットや校内LANといった情報通信ネットワークの活用により、校内WEBでの作品発表会や、電子掲示板による感想交流や意見交換など、クラスの枠をこえた異学年との児童間の交流が今までよりも容易になる。さらに、内容や必要に応じ、発表の場も地域など学校の外へと広げることができるようになる。また、調べ学習では、図書の本や現地での見学、インタビューなどの方法に加えて、ホームページの閲覧や関係機関への電子メールでの質問などの方法が加わり、情報収集の方法が大きく広がる。他地域の学校が同じテーマで学習している場合には、情報交換しながら自分たちの地域と比較することもできる。

このように、ネットワークを活用し、これまでよりも広まった人や社会との交流が様々な形で行われることにより、自分の考えと違った意見を知ったり、友だちのよいところを見つけ出したり、他地域の様子と比較したりできるようになり、より深く追求でき、学習内容を深めていけるのではないかと考える。そのことが、子どもの学習への意欲、主体的に学習に取り組む姿につながっていくものと考えられる。

そこで、ネットワークによる交流を効果的に用いた学習の研究・実践を、本主題を設定した。

II 研究仮説

情報通信ネットワークによる交流を学習に効果的に用いることにより、自らの課題に主体的に取り組む子どもになるだろう。

III 研究の内容

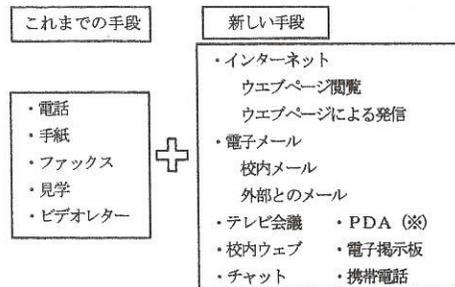
1. 新しい手段の活用

e-Japan 2002の計画の中で、「2005年度までに、概ねすべての公立小中高等学校等が高速インターネットに常時接続できるようにするとともに、すべての教室がインターネットに接続できるようにする。」とあるように、社会の変化に対応し教育の現場でも、情報化が進んできている。学習の中で外部との交流の手段として、電話や手紙に加え、インターネットや電子メールなどの方法が加わり、選択できる手段が広がってきた。

学習に関係する施設や機関、企業では、情報をホームページで公開しており、実際に見学に行けない場合でも、ある程度の情報を得ることができる。電子メールによる質問を受け付けているところもある。ネットワーク上では、地理的に遠い近いといった距離は関係がなくなる。自然調査や方言の学習などの他の地域に目を向けた学習では、他の地域の学校と協同学習をしたり、情報交流をしたり、質問し合ったり、学校の壁をこえて多様な形での交流がもてるようになる。

学習の場において、情報通信ネットワーク活用の大きなメリットの1つは、児童と人、児童と社会とを結びつける交流手段としての活用だと考えられる。もちろん、これまでの学習においても従来の方法で人や社会と交流しながら学習を進めてきた。しかし、これまでの電話やファックスでの方法に比べ、インターネットや電子メールなどのネットワークを使うことにより、交流がしやすくなる。

児童にとって、このような交流手段の選択の広がり、情報収集の場、表現活動の場といった学習の場の広がりとなる。そして、一人一人がそれぞれの課題や興味にあった方法を、今までよりも広い中から選択し学習を進めることができる。このことが、児童の主体的に学習に取



※PDA・・・手帳サイズの個人情報機器

図1 情報通信ネットワークによる交流手段の広がり

り組む姿につながるのではないかと考える。

教師側としては、情報通信ネットワークのメリットを生かし、コンピュータという道具を効果的に活用することが求められる。それにより、これまでできなかった授業展開ができるようになり、学習の幅が広がる。

2. 校内電子掲示板の活用

(1) 校内電子掲示板の利点

情報通信ネットワークを使えば他校、関係施設、他地域へと交流が広がることは、前述したとおりであり、テレビ会議システムや電子メールなどを使った他校との協同学習などは、最近の技術を効果的に使った授業だと言える。とはいえ、こういった学校の外との電子メールや電子掲示板を使った交流は、設備の面や教職員のコンピュータ・リテラシー(※)の面などの理由で、多くの先生方にとってはまだまだ敷居が高いものであることも事実である。

しかし、校内ネットワークを使った、校内だけでの活用であれば先生方も気軽にできるだろうし、活用の方法によって、今までできなかったこと、難しかったことが簡単にできるようになる。例えば、校内電子掲示板に作品を掲示することにより、その作品に対して、クラスの友だちからばかりでなく、他のクラスや異学年の児童から広く意見・感想を聞くことができる。掲示場所をとらないので、作品の数や掲示期間に制約されない。また、画像はもちろん音声や動画などの作品も掲示できる。こういった電子掲示板のメリットを生かした交流活動を通し、学習効果を高めたり、意欲を高めたりすることができると思う。

以下、私なりに、校内電子掲示板をどのような場面でどのように活用していくかについて考えてみた。

※コンピュータ・リテラシー・・・コンピュータを使いこなす能力

① 活動の記録の発表の場

電子掲示板には、デジカメで撮った自分の活動記録を簡単に載せることができる。今まで、総合的な学習の活動の様子などをデジカメで撮影してきたが、その写真を教室や廊下にはることが多かった。ホームページをつくり、校内WEBに載せるという方法もあるが、そのためには高いコンピュータ・リテラシーが必要であり、高学年でないと不可能であり、時間もかかる。また一方的な報告になりがちである。電子掲示板であれば、レイアウトは決まってしまうものの簡単に作成でき、その活動記録に対しての意見や感想をもらうことができる。高学年であれば書き込まれた友だちの質問や意見を参考にしながら、次のより価値ある活動にもつなげられる。また、記録をデジタルデータとして次年度も自由に見ることができ、同じことをする場合に参考にできる。

② 作品発表と鑑賞

通常、図工の鑑賞では、校内に掲示された友だちの図画作品を見て感想を紙に書いてその子に渡したり、クラスで発表したりすることが多い。電子掲示板に載せられた画面だけを見て感想を書き込むとなれば、小さい画面上であるし色合いもちがってくるので本当の鑑賞にはならないが、壁に掲示された本物の絵を見たあとに、その絵の写真が載っている電子掲示板に感想を書き込むことにより、作者はもちろん、みんなが絵に対しての感想を簡単に見ることができ鑑賞の活動の幅が広がる。自分の絵に対する多くの友だちからの肯定的なフィードバックは、その子にとって大きな意欲につながるであろう。また、同じ作品への友だちの感想を見ることは、人それぞれの感じ方の違いに気づくことにつながる。

絵に限らず、粘土作品など立体の作品でもデジタル写真に撮れば簡単に電子掲示板に載せることができる。通信速度が速ければ音楽のふしづくりなどの音声やデジタルビデオで撮影した動画も載せることができる。基本的に横書きになるが俳句などの短い文、それに自作の算数の問題も載せることができる。今まで、児童がせっかく作ったのにあまり広く発信できなかったものが発信できるようになり、しかも児童の相互評価につながる。

表1 インターネット・電子メールのメリット

方法	メリット
インターネット	情報量が豊富で、いろいろな情報がある。
	実際に見学できない工場や建物でも、画面上で疑似体験することができる。
発信	同じ学習について、自分たちが調べたものと他地域で調べたものを比較することができる。
	学校という枠を超えて、調べたこと考えたことを、地域や全国へと広げることができる。
電子メール	学習の様子を地区の人や保護者に知らせることができる。
	長い期間、学習成果を掲示、保存することができる。
	関係機関や施設との交流が比較的容易である。電話に比べ時間的な制約を受けない。
	みんなで手紙の内容を吟味、検討して、書くことができる。手紙のやりとりよりも速い。
	その分野に詳しい人や、専門家にきくことができる。

③ 児童の自己紹介、小さな親切運動

電子掲示板であればWEBページよりも簡単に自分のページを持つことが可能である。自分の良いところやがんばっていることなどを書いた自己紹介のページも簡単に作ることができる。その個人のページを利用し、下級生が登校班長やそうじの班長として活躍している子に対して、その様子やお礼をその児童のページに書くことができる。小さな親切をしてもらったことを、その児童のページに書くこともできる。今までも、期間限定で「小さな親切運動」をすることはあったが、電子掲示板なら掲示場所もとらずに、期間も制限せずに年間を通じて行うことができる。1年間の集大成として、卒業時に印刷したものを渡すこともできる。

④ 全体の発表に対する感想

全校集会や校内放送による学習発表会などでは、発表のあと多くの児童の感想を聞くことは、時間的に困難であり、数名の代表者だけの感想にとどまってしまう。話すことが苦手な子にとっては、感想を持っていても全体の前での感想発表が負担となり、自分の考えをなかなか発表できない場合もあるであろう。教室で感想を述べ合うことはあっても、発表を行ったクラスや児童に対してその感想をそのクラスに伝えることはあまりない。発表した児童にとっては、聞いた人がどのように感じているかを知るすべはあまりない。しかし、電子掲示板を使えば、クラスごとにコンピュータ室に行き感想を書くことができるので、全校生が発表に対する意見を書き入れることも可能である。感想を知ると、発表者にとって大きな励みにつながるのではないかと。

⑤ 児童会活動などでの意見募集

教室にコンピュータがあれば、電子掲示板で、児童会行事などへの意見や要望を募集することができる。話し合いの前に担当の委員会や議長は、クラスの意見や要望を見ることができ、実際話し合いを効果的に行うことができる。議論をネット上で行うものでなく、話し合いを効果的に進める手段としての活用である。

(2) 校内電子掲示板活用の留意点

① 「伝え合う力」を補うものとしての活用

国語の学習指導要領では、「伝え合う力」の育成が重視されている。電子掲示板は、文字中心のコミュニケーション手段なので、国語科に関して言えば、相手意識・目的意識を持たせて「書くこと」の指導に大きく関わる。しかし、文字を書いて掲示板に載せても、「相手に伝える」ということでは不十分である。「伝え合う力」を育成するためには、自分の考えを自分の言葉で表現することも合わせて指導していくことが大切である。あくまでも、電子掲

- ・デジカメ画像や短い文章、音声、動画などを簡単に掲示できる。
- ・時間の制約を受けずに、長期間にわたって掲示し、感想・意見を書き込むことができる。
- ・不特定多数に開かれたものでないため、プライバシーの問題が少ない。
- ・同年生に限らず、異学年間の感想交流・意見交流が可能である。
- ・実践的にネチケット指導、モラル指導ができる。

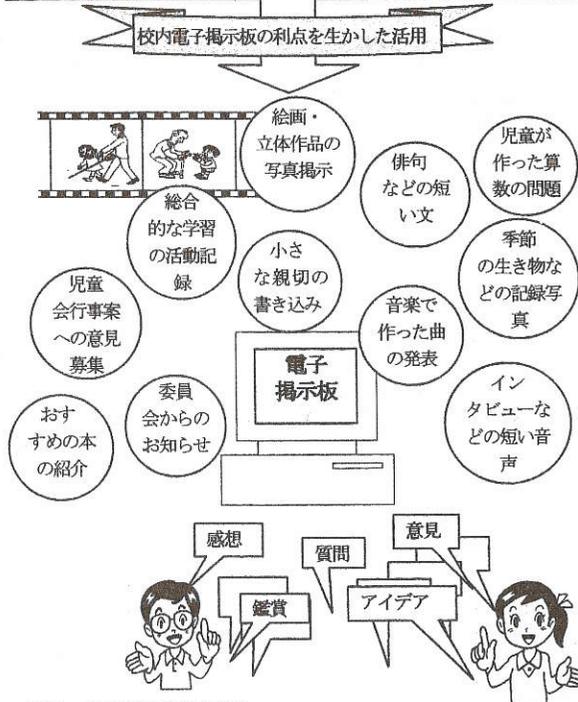


図2 校内掲示板の活用例

示板は活動中の1つである。発表に対して掲示板に意見や感想を書きこんだ場合でも、それは補助的なものであり、その感想をもとに自分の意見や感想をクラスで発表しあう活動も大切に行わなければならないと考える。また異学年との交流では、ネットワークの交流をきっかけとして、人的な交流へと深めていくよう気を配る必要がある。

② 学年のコンピュータ・リテラシーに合わせた活動内容

電子掲示板は、キーボード、またはソフトキーボードで文字を入力できることが前提となる。しかし、低・中学年では文字を入力する能力があまり身に付いていないため、長い文章を書くことは困難である。学年のコンピュータ・リテラシーや環境に合わせ、内容を吟味する必要がある。高学年での活用では、友だちの感想や意見を参考にしながら、さらによいものへ高められればと思う。

以下、自分なりに校内電子掲示板を使っでの活動のめやすを考えてみた。

- | | |
|-----|--|
| 低学年 | ・友だちの作品へ簡単な感想(20~30文字程度)を書いたり、自分の作品に対して友だちの感想を読んだりする。 |
| 中学年 | ・友だちの作品へ感想(30~60文字程度)を書いたり、自分や友だちの作品に対しての感想を読み、人それぞれの感じ方の違いに気づいたりする。 |
| 高学年 | ・友だちの作品へ意見や感想を書いたり、友だちからの感想や意見をもとに自分の作品をさらに良いものへと発展させたりする。 |

③ モラルの指導

モラルやネチケット(※)の指導は校内でのネットワーク活用に限らず、インターネットなどを含めた全てのネットワーク活用において避けては通れないものであるし、必ず指導が必要なものである。そこで、悪意のある書き込みなどの問題が出た場合、コンピュータを使ったための「デメリット」と考え活用をためらうのではなく、モラルやネチケットの指導を行う良いチャンスであるという「メリット」としてとらえ、実践的に指導していきたい。そのことが、今後の高度情報通信社会を生き抜いていく児童にとって、情報手段を適切に活用する能力を育成することにつながるかと考える。

※ネチケット・・・ネットワーク上で必要とされるルールやエチケット

3. 校内電子掲示板を使った授業実践

(1) 授業の概要

- ① 実施期間 平成14年10月~11月
- ② 対象児童 天童市立成生小学校 3年1組(24名)、3年2組(24名)2クラスで実施
- ③ 単元名 3年国語「おすすめの本をしょうかいしよう」(11時間)
- ④ ねらい
 - ・相手が読みたくなるように工夫し、本のおび作りに取り組むことができる。(関心意欲)
 - ・友だち同士の本の紹介でいろいろな地域の本に興味をもち、読書(読むこと)
 - ・書く必要のある事柄を選択しながら、相手や目的を意識して、本のおびを書くことができる。(書くこと)
 - ・学習カードや本のおびをもとに、言葉で分かりやすく本の紹介ができる。(話すこと)

⑤ 研究との関連

- ・読書に必要な時間から考えて、複数の人が同じ本を読みには、長期間にわたり紹介文を掲示することが必要であるが、教室や廊下では長期間掲示しておくことは難しい。電子掲示板を使えば、コンピュータ画面上に掲示することができ、長い期間掲示できる。
- ・掲示板では、読んだ本に対して一人ひとりが意見・感想を書くことができ、それを紹介者だけでなくみんなが読むことができる。
- ・クラスの枠を超え、異学年との交流も比較的容易である。
- ・授業時間だけでなく休み時間などにも感想を書き込むことができる。

⑥ 活動の流れ

学習活動	
1	本物の本のおびを見て、おびの役割、イメージをつかみ、活動の見通しをもつ。 今まで読んだ外国の本の中から、友だちに紹介したい本を選び下書きを書く。

2	学習カードに本の題名、作者、国、あらすじ、感想などを書く。
3	拡大印刷した本のおびの見本を見ながら、どのようなことに気をつけ、どんな方法で、おびを作るかを考える。 見本1 字が小さいもの 見本2 字が大きいもの 見本3 絵が入って折り、絵も大きい 見本4 紹介文としては不適切なもの 見本5 全部手書きのもの 見本6 罫線だけコンピュータ 字は読みやすいように大きく 色や絵をつけて楽しく 読みたくなるように文を書く
4 7	学習カードに書いたあらすじや感想をもとに、手書きやコンピュータなど好きな方法でおびを作る。  手書きの良さ 自由なレイアウト 自由な絵 紙の選択 あたたかさ  コンピュータの良さ ととのった字 手直しの容易さ テンプレート活用 複数印刷可
8	おびを本につけ、クラスの人に言葉で紹介する。 お互いに交換し、本を読む。 図書室に おすすめの本コーナーを設置する。  言葉での本の紹介  紹介された本を読む活動  感想を書き込む活動
9	お互いに紹介し合った本を読む。
10	読んだ本の感想をコンピュータの掲示板に書きこむ。
11	掲示板に書き込まれた感想をお互いに紹介しあいながら、今後の読書活動への意欲を持つ。

(2) 成果と課題

一 成果

・電子掲示板を活用した交流

自分が読んだ本の感想を書いたり、友だちの感想を読んだりして、友だちがどのように感じているかを知ったり、それに対して共感したり、比較したりすることができた。今回の活動を電子掲示板を使わずに行うのは難しく、電子掲示板の良さを生かした活動ではないだろうか。

以下、児童の感想である。

O・M (女)

しょうかいされた本は、とてもおもしろかったです。とてもドキドキした本があったし、おもしろいと思う本もありました。(中略) 本についていろいろなことがかいてあっておもしろいなあと感じました。友だちの感想を読むと、そうそう、そこがおもしろいなよ、と思ったりします。

K・K (男)

友だちが本の内よりや感想をいろいろな言葉で書いていて、ぼくが書いていない言葉がいっぱい書いてあったのでおすすめの本をしようかと思いました。

M・M (女)

わたしがえらんだ本よりもおもしろい本があったりして、いっぱい本があるんだなと思いました。それに、まだおもしろい本があると思うので、いっぱい本をよんで自分のおきにいりの本をみつめて、ふやしていきたいです。

I・Y (男)

みんないろいろな本が好きで、ぼくは4さつぎりまで読んで、前までは本が きれいだっのに好きになりました。そしたら、本をいっぱいよむようになって家の人からほめられました。

・道具の1つとしての活用

手書きで作ったもの、コンピュータで作ったもの、枠だけコンピュータで作ったものの3つの本のおびの見本を提示しながら、方法の1つとしてのコンピュータ利用の意識付けを行うことができた。児童は好きな方法を選択し本のおびを作ることができた。感想の中にも、コンピュータの良さ、手書きの良さに触れている子がいた。学年が上がれば、「好きな方法で」ではなく「目的にあった使い方で」ということが必要になってくるであろう。

ただ、コンピュータでやると希望したものの、途中から文字を入力したり操作をしたりするのが大変で、手書きに移った子もおり、「途中からでも変更していいよ。」「枠だけでもいいよ。」「一人で自信のない子は二人組でもいいよ。」といった声かけが必要であった。

・文章指導に際して

文が上手に書けない子、「を」と「お」の使い方ができない子、句読点を忘れる子にはコンピュータでの指導が有効であった。消しゴムを使わずに良いので汚れることもないし、手直しが簡単なので意欲をそぐことなく指導できる。また、画面上のソフトキーボードの文字を見せながら指導できるので、子どもにとって違いを理解しやすい。

一 課題

・リテラシーの問題

指導案作成のときは、本のおびを作ったあと感想掲示板に載せ、異学年にも呼びかけながら休み時間に感想を書いてもらうことを計画していた。しかし、活動を進めていくうちに、3学年ではコンピュータ操作の能力から考えて、そこまでの活動が無理だと判断した。休み時間などを利用しての感想書き込みは、コンピュータ室の環境、児童のリテラシーなどが土台にないといけないと感じた。学年ごとのカリキュラムをつくり、低学年のうちから段階的に系統的にリテラシーを高めていく必要があると感じる。

特に、校内掲示板の作成や感想書き込みには文字を打つリテラシーが不可欠だった。デジカメの使い方、印刷、保存といったリテラシーは簡単に教えられるが、キーボード(ソフトキーボードも含む)での文字入力には慣れが必要であり、すぐに身に付くというものではない。また、コンピュータ操作に関する言葉も英語が多いので、言葉1つ1つともその都度しっかり教えていかなければいけないと感じた。

・「2人に1台」での配慮

事後のアンケート結果を見ると、手書きにした子の理由で1番多いのが「1人で自由に書けるから」であった。2人で1台のコンピュータでは、もう1人の児童にとっては無駄な時間が多い。今後の環境を考えてみても、2人に1台という環境は当然変わらず、コンピュータ活用の大きなハンディキャップになる。コンピュータ活用においては、もう1人の活動内容や交換する時間などを十分考慮し、活動する必要がある。

・教師の負担の問題

今回の掲示板活用にあたっては、教師が本のおびをスキャナでよみこみ、1ページ1ページに貼り付けていくといった教師側の作業の負担が大きかった。負担が大きければ、普段の授業であまり使うことはできない。そこで、次ページの4-(3)で述べるとおり、設定さえすれば中学年ぐらいの児童でも簡単に自分でページが作成できるような小学生用の掲示板の作成を行った。

IV. 研究のまとめ

1. 研究の成果

ネットワークといえばインターネットなどによる関係機関からの情報収集や、学校間を結んでのテレビ会議システムなどを利用した交流学習での活用が目立つ。しかし、今回、校内でのネットワーク、特に電子掲示板に焦点を当てた研究を行い、校内で気軽にできる活用法があるということを知ることができた。そして、校内ネットワークを活用することにより、今まで以上に児童同士の交流が広がり、学習や生活に生かせるという可能性を探ることができた。

今回の「おすすめの本の紹介をしよう」の授業実践はクラス内にとどまったものとなったが、クラス内であっても電子掲示板を媒介として、紹介した本に対して友だちから感想をもらい、その書き込まれた感想を、楽しく読む姿が見られた。ただ本のおびを作ったばかりでなく、“多く友だち”から“一人一人の児童に”フィードバックされるということが、児童の学習意欲へと直結すると感じた。また、活動を通すなかで、児童のコンピュータ活用のリテラシーにつながり、情報活用能力を育てることができた。今後、学年や学校に活動が広がれば、さらにより多くの友だちとの交流へと広がっていくことが期待できる。

環境面では、今回の研修を通し、小学生向けの電子掲示板ソフトを作成することができた。市販の掲示板ソフトは高価であり、コストがかかる。フリーソフトの掲示板ソフトは子ども向けでないものが多い。そういった事情で、実際に小学校で使えるものがなかった。今回、比較的簡単にインストールや運用ができる電子掲示板ソフトを作ることができた。ぜひ、他の先生方にも活用を広めていきたい。

2. 今後の課題

電子掲示板を活用した授業の実践

今回の授業実践で行ったのは、電子掲示板利用の1つであり、活用例に挙げたことはこれから実践となる。授業の実践を通し一番感じたのは、児童の実態の把握と、それに合わせた指導計画作りの大切さである。頭の中ではわかっていたと思っても実際に授業をすると、不足部分のいろいろと見えてくる。今回考えた活用例も、頭の中だけで考えたことだけで不足部分が多いと思うので、今後自分で実践しながら、より良いものにしていきたい。

教科の目標を達成するための道具

本のおび作りの実践では、「表現手段の“道具の1つとして”のコンピュータ活用」を行ってきた。しかし、活用法を発展させ「教科の目標を達成するための道具として」のコンピュータ活用ということも合わせて念頭に置きながら、今後取り組んでいきたい。「コンピュータの～の機能を生かし～できる。」(例えば社会科で、「情報活用能力にインターネットの検索の機能を生かし、～のことを調べ活用することができる。」)といった、コンピュータの特性を生かして教科の目標が達成できるものを考えていくことが必要になってくると感じる。

だれでも使える環境作り

環境整備において、先進校の事例を参考にしても、それを自校でやれるとは限らない。自校のハードウェア・ソフトウェアに合わせ、学校にあった環境を作っていかなければならない。しかし、得意な先生しか、活用できない環境になってしまっているのはいけない。今回もコンピュータ室の環境整備を行ったものの、故障が起きた場合、だれもわからないという問題が起きた。だれでも気軽に使えるコンピュータ室を目指していくことが教職員や児童のリテラシーの向上につながると感じた。

V. おわりに

長期研修を終えるにあたり、今回の貴重な研修の機会を与えて下さった山形県教育委員会はじめ村山教育事務所、天童市教育委員会の諸先生方に心から御礼申し上げます。

また、12ヶ月という長期にわたりご指導下さいました山形県教育センター鈴木強大所長はじめ、情報教育部の先生方、諸指導主事の方々に心から感謝申し上げます。とりわけ、お忙しい中、時間を割き、ご指導いただきました工藤哲指導主事には心から感謝申し上げます。

さらに今回、快く研修に出して下さい下さった勤務校である天童市立成生小学校大久保健校長はじめ、諸先生方の温かいご支援に対し、厚く御礼申し上げます。

「学習障害(LD)児や注意欠陥/多動性障害(ADHD)児等の

学級集団の中での支援のあり方についての研究」

～学級集団の中で個を育てていく支援の方法を考える～

新庄市立日新小学校
教諭 野尻裕子

目次

I 研究の概要	1
1 主題設定の理由	
2 研究の仮説	
3 研究の内容と構想図	
II 実践研究	
1 仮説1の取り組み	2
(1) 対象児の理解	
(2) 授業の実勢と考察	
・ コース別学習	
・ 自由進度学習	
2 仮説2の取り組み	5
(1) 学級集団における対象児の理解	
(2) SGEとSSTの指導計画と授業実践	
(3) 学級集団の変化	
(4) 授業の考察	
III 研究のまとめ	9
1 研究の成果	
2 今後の課題	
IV 終わりに	9
資料	10

主な参考文献

わかるLDシリーズ①	LDとは何か	上野一彦他(日本文化科学社)1996
" ③	LDと学校教育	林邦雄他(日本文化科学社)1998
LD、ADHD特別支援マニュアル④⑤		森孝一(明治図書)2001
診断と指導のための実践事例集		上野一彦他(日本文化科学社)1992
見つけよう一人一人を		文部省 1997
学習につまずきやすい子どもの指導		富山県総合教育センター 2000
学習障害(LD)及びその周辺の子どもたち		尾崎洋一郎他(同成社)2000
ADHD及びその周辺の子どもたち		" " 2001
LD&ADHD 第1～第4号		上野一彦他(明治図書)2002
長期研修報告書 H8、H11		山形県教育センター 2000
グループ体験による学級育成プログラム		河村茂雄(図書文化)2001
エンカウンターで学級が変わる		岡田弘(図書文化)1996
ソーシャリス教育で子どもが変わる		小林正幸他(図書文化)1999
小学校学習指導要領		文部省 1998
小学校学習指導要領解説・算数編 理科編		文部省 1999
一斉画一授業改革の提案		加藤幸次(明治図書)1986

I 研究の概要

1 主題設定の理由と研究のねらい

子どもたちは、学級の中で自分の個性を発揮できる場所を見つけ、認められたい、友達や教師とともに楽しく学習し、過ごしたいと願っている。しかし、学級の中には、LD児、ADHD児を含め、友達とうまく関わることができない子、学習に集中できず、授業の妨げをしたりしてしまう子等、集団に適応できずに悩みを抱えながら学校生活を送っている子が年々増えてきていると感じている。これまでも様々な指導を試みてきたが、教師だけの指導では限界があり、学級の力を借り、集団の中で育てていくことが必要であると感している。

自分自身や友達との違いに気づきながら、子どもたち自身が集団を形成し心のよりどころとなる集団を意図的・計画的に作り、周囲が温かい目で見守り、適切な対応をとることでLD児、ADHD児等も学級の中に居場所を見つけ、集団に適応できるようになるのではないかと考えた。また、LD児やADHD児の特徴を知り、個に応じた適切な学習の指導を行なうことで、意欲的に学習に参加できるようになるのではないかと考えた。

そこで、一人一人を認め合える温かい学級集団の中で、LD児やADHD児等がその一員としての存在感・所属感が得られ、自己有能感が持てるような適切な支援のあり方を探っていくことを、本主題を設定した。ここでいう支援とは、「配慮」と「指導」の2つの視点で考えたい。

2 研究の仮説

- 仮説1 LD児やADHD児等の行動観察や諸検査により実態を把握し、個に応じた適切な支援や個別に関わる時間を確保すれば、意欲的に学習に参加できるようになり自己有能感が育つだろう。
- 仮説2 LD児やADHD児等を取り巻く学級の実態を把握し、相互理解できる活動や社会性のスキルを身につけていく活動を通して、互いに適切な対応をとれるようになり、LD児やADHD児等も学級の中に居場所を見つけ、集団に適応できるようになるだろう。

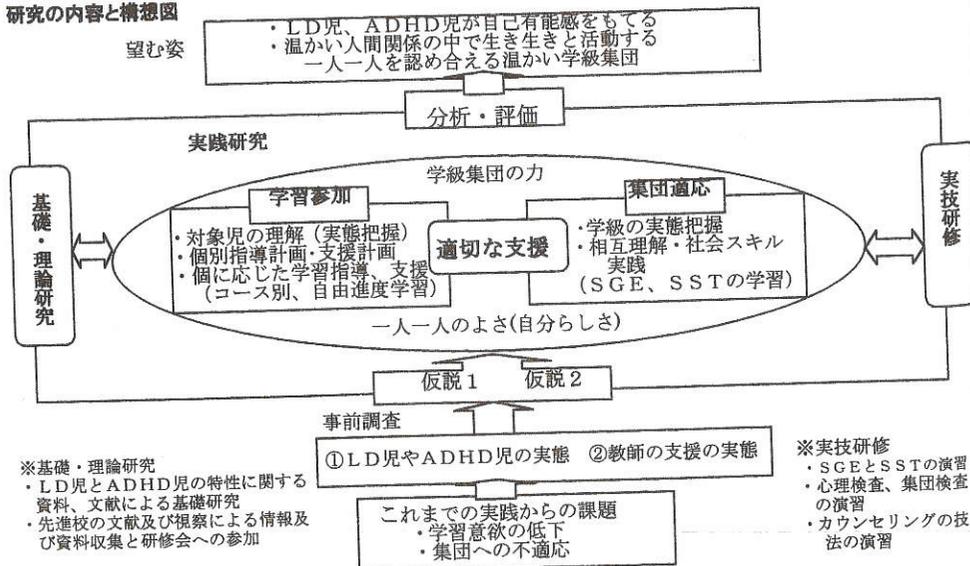
仮説1についての考え方

～コース別学習、自由進度学習～
通常学級で、LD児やADHD児等に一人一人が意欲的に学習に参加できるようにするためには、教材の工夫や学習環境の配慮が大切である。しかし、LD児やADHD児が1時間学習に参加できるようにするためには、そのような一般的な配慮に加えて教師が個別に指導できる時間を多く持つこと、周りの子どもたちがLD児を理解し教え合いができるようにしていく必要がある。また、一斉指導をLD児やADHD児からみると「良い見本がたくさんある。様々な刺激を受けられる。」などの集団学習の良さにとらえ、その良さを生かしながらも個別の学習を充実させていきたいと考えた。そこで、(1)一斉指導の中に個別指導を多くとるための形態「コース別学習」、(2)グループ学習の形態を取りその中で教えあいを中心に進めていく「自由進度学習」が有効であると考えた。

仮説2についての考え方

～SGE、SST～
LD児やADHD児等が存在感や居場所を見つけ集団に適応できるようになるためには、周りとの相互理解が不可欠である。これまでは、何か問題が起きた時に話し合いをしたり、教師が説明をしたりして理解を図ってきたが、どちらかという問題に対処するという形が多かった。不適応の原因の1つとして、集団の中にながら関わりが少なく自他の良さに気づかず分からないままに居ること、また関わろうとする気持ちを持っていても関わり方が分からない等が上げられる。そこで、お互いに理解し深い交流をねらう構成的グループエンカウンター (SGE) やよい対人関係や社会スキルを身につけることができるソーシャルスキルトレーニング (SST) を意図的・計画的に実施すれば集団に適応できる能力を高めることができると考えた。客観的な資料としてQ-Uを使用して学級の状態や対象児の実態を把握し、SGEやSSTの適切なエクササイズを選択していく。

研究の内容と構想図



II 実践研究

1 仮説1の取り組み

～意欲的に学習に参加し、自己有能感が育つために～

(1) 対象児 (A児) の理解

LD児やADHD児等に適切な支援を行うためには、対象児を理解する必要がある。そのための実態の把握としてア、担任や保護者からの聞き取りイ、客観的資料(検査等)・学習に関する資料によるものウ、行動観察・面接によるものなどが考えられる。次のような点に留意して行いたい。

適切な支援の手立て

実態の把握のポイント⑦ ① ②

⑦ 担任や保護者からの聞き取り

<主に保護者から>

- ・生育歴
- ・相談歴
- ・諸検査
- ・保護者の願い・生活、行動の様子
- ・家庭環境 (家族構成)
- ・他機関との連絡(診断)
- ・児童の興味関心、長所

<主に担任から>

- ・学校や学級での様子
- ① 集団行動、ルールの理解度、行動の特徴と内容、集中時間 等
- ② 友達関係や遊びの様子
- ③ 係の仕事、整理整頓、忘れ物 等

⑧ 客観的資料(個人検査・集団検査)と学習に関する資料

<個人検査 WISC-IIIの結果より>

- ・全IQ 57
- ・集中力が弱い
- ・言語性、動作性の有意差なし
- ・動作性、視覚性が得意
- ・計算が得意
- ・文の理解、読み書きが苦手
- ・継時処理に強い
- ・短期記憶がよい

<学習の実態から>

- ・学習の状況 (つまずきやすい内容と傾向 等)
- ・学び方の様子 (①聞く、話す、読む、書く、②課題への取り組み方、学習のまとめ方 等)

⑨ 行動観察の視点・・・問題点でなく支援の方法や指導の手がかりの発見のために積極的な視点で情報を得る

- ・「どんな場面におこりやすいのか・どんな手立てが有効なのか」・・・傾向と手立て
- ・「興味関心の強いもの・自信をもてできるもの」・・・生かせる分野
- ・「苦手の教科や領域、分野の基になっているつまずきの箇所」・・・具体的問題点

【A君の実態】

ADHD児等の特徴「不注意や衝動性」の傾向が見られ、A君の言動や態度には担任も周りの児童も戸惑うことが多く、徐々に学級内で孤立し始めるようになってきた。A君の不適応の様子と良い点、WISC-IIIの結果は、右図の通りである。

A君の実態調査を基に「何をどのように指導支援」していくかを具体的に計画していくものとして個別指導計画を立てた。また個別指導計画を具体的に立てた。(資料1、2)



(2) 授業の実際

＜一斉指導の中に個別指導を取り入れる「コース別学習」＞

① 指導の方法

コース別学習による授業は、学習の前半は、一斉で考えたり理解したりし、後半は自分の理解に合わせて学習を深めていくプログラムであり、一斉指導で理解できなかった子ども、コース別に分かれたときに補充することが可能である。1時間の授業の中でどこからどこまでをコース別にするか、どこを一斉指導にするかを工夫することで、対象児童の個別配慮に応じることができると考えられる。

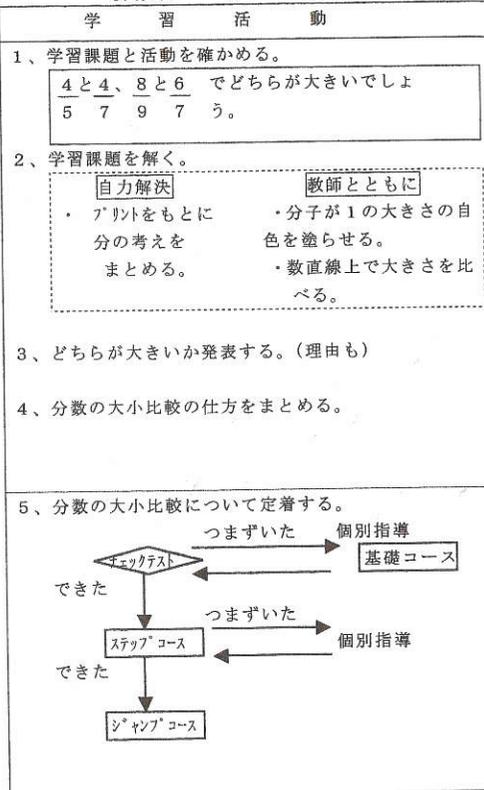
そこで、本授業では、学習の前半の自力解決をすところと定着を図るところをコース別にして授業を実践した。

自力解決のときのコース別学習では、全体の導入を短く行い、なるべく早く個別指導に入れるようにした。対象児等が個別・少人数に分かれたときはよりステップを細かくし視覚教材などを用いて理解しやすく提示した。ここでは、テープを作って比べさせたり、色を塗らせたりして比較させた。教師とともに(半)具体物等を操作しながら解決していく。また、他の児童にとっても短い導入からの解決は情報量が多すぎず適度な抵抗となり試行錯誤しながら考えを深め解決していくものとなる。

定着を図るときのコース別学習では、全員がチェックテストを受け、個の理解度に応じてステップコースと基礎コースに分かれ、1から4までの過程で理解不足の児童もここで補充することができる。基礎コースの子には、教師が個別指導する。対象児は、教師と一緒にやり、「できた」という達成感をもたせてきた。そこで、個々の学習を充実させていくためには、難易度や問題数を変えたプリント等を準備した。

② 授業の展開

ア、コース別学習を取り入れた指導過程
算数科 5年 「分数と小数」



(実際の指導記録 資料3)

③ 児童の変容と今後の課題

ア、児童の変容

- 自力解決のコース別学習では、対象児に合うような教材を提示したり、スモールステップで学習を進めることができたので、やる事が明確になり意欲的に学習することができた。また、少人数での学習は、自分の考えを自分の考えを話したり、友だちの考えを聞いたりとすることができ、分らない事はすぐに教師が対応したりして理解を深めることができた。
- 定着を図るところでは、対象児に個別指導でき、他の児童は自分の理解度に合わせて進められた。振り返りカードをみると、対象児も他の児童もほとんど◎だったので、達成感ももて充実した学習ができたと考えられる。

イ、今後の課題

- 少人数に分かれたときに、自力解決している児童に目が届かず、そこでつまずきを示している子や反対に時間をとって余してしまう子への支援ができなかった。(今回は担任がTTとしてはってくれた)
- 定着を図るところでは、学習の仕方が身につけていない子もいて、教室の中が騒がしくなり落ち着いて学習できない子もいた。学習の仕方が身につけば、丸付けも自分ででき、スモールティチャーとして活躍するなどでもできると考える。そうならば教師が対象児童に個別指導できる時間をもっともてるようになることを考える。

＜グループ学習の形態をとり、教えあいを中心に学習を進めて行く「自由進度学習」＞

① 指導の方法

自由進度学習(カード学習)による授業は、児童の学習速度と興味関心に焦点を当てて授業を組むものである。1時間1時間のみというよりも単元全体を通して、自分たちの興味関心や学習の速度に合わせて学習計画を立て進めて行くプログラムである。自由進度学習は、一人一人が主体的に学習を進めていくもので、途中で学習につまずいたときには前にもどったり理解に時間がかかるときには十分に時間をかけたりして基礎基本の習得を図ることができる。特に遅れがちな対象児童にとって時間にゆとりがあることは、自分のペースで学習を進められるので基礎基本を習得するとともに主体的な学習につながっていくものと考えられる。

自由進度学習での学習が初めてなのでグループ学習の形態をとり、グループ内で助け合ったり、話し合いをしながら学習を深めていけるように考えた。(1グループ5~6名で6グループ)自由進度学習の授業では、児童が興味を持ち理解しやすい学習カードや教材の準備と教師の口頭によるチェックが大事な鍵になってくるので、きめ細かい配慮をしていく。

② 授業展開

ア、自由進度学習を取り入れた指導過程 理科 5年 「花から実へ」

自由進度学習を取り入れた展開(単元(総時数7時間)) ()内の数字はおよその時数 8...スタート E...エンド

学習活動	学習内容	学習過程	対象児童への支援
1. 学習計画を作成する。(1)	1 学習内容や学習の仕方を理解する。 1-1学習の進め方や約束もともに学習の仕方を知る。 1-2読み物カードから学習の計画を立てていく。(学習計画表に記入する。)	オリエンテーション 学習計画立案 ①	・漢字の多いプリントやカードは読むのに困難を感じると思われるので、ふりがながつけたり横書きを入れたりして抵抗を少なくしていきたい。 補1 本学習形態は初めてのので、全員同じ計画で進むように教師の方から学習計画を提示していく。 ・対象児はなるべく教師の近くで学習するように声がけしていく。 ・花のつくりの図解で困難が見られる時は、めしべやおしべだけ抜き出すようなプリントを用意しておく。
2. ヘチマとアサガオの花のつくりを観察し、つくりの違いや実になる部分について観察する。(2)	2-1ヘチマとアサガオの花の全体のつくりを見る。 2-2おしべとめしべを止めがねを使って観察する。 2-32つの花の違いや実になる部分についてまとめる。	ヘチマとアサガオの花のつくりを観察 ② 補2	補2 2つの花の違いを捉えられない児童には、具体例を示して気づかせる。
3. おしべの花柄を観察し、おしべの働きを考える。(2)	3-1おしべはどんな働きをしているのか話し合う。 3-2おしべの先から出る筋を観察する。 ・顕微鏡の使い方を知る	技能カード おしべの先の筋を観察 ③	・技能カードだけでは、顕微鏡の使い方は理解が難しいと思われるので、教師と一緒に使い方を練習させる。 補3 顕微鏡やプレパラートの動かしか方について教師が一斉に指導する。
4. 花柄がめしべの先についたとき、つかないときと、実のつき方の違いを観察する。(1)	4-1ヘチマのつぼみを2つ選んで、(花柄をつけたものとそうでないもの)ふくらませる。 4-22つの花を観察し、記録する。...実ができるまで(継続)	ヘチマのつぼみにめしべがぶさ、実のつき方を観察 ④ 補4	補4 花がつぼみで実をふくらませたままにして観察し続けるようにする。 ・花から実になるまでのことを言葉で言わせてから、記録表にまとめさせるようにする。
5. 実験・観察の結果から花柄の働きをまとめる。	5-1これまでの観察記録を元に、花柄の働きについて話し合いまとめる。	⑤ 補5	・チェックテストはなるべく自力でやれるようにするが、理解できない問題は助言したり漢字にふりがながつけたりしたい。
6. チェックテストを行う。(1)	6-1チェックテスト、学習の定着を図る。	チェックテスト ⑥	・身近な植物の実物について興味・関心を持つ ・道具の操作力を高める
7. いろいろな実物の仕方を資料などで調べる。	7-1発見学習として、資料等いろいろな実物の仕方やいろいろな花柄を観察して調べる。	発見学習 ⑦	・発見学習には時間を設定しないが、時間的に余裕のある児童やさらに探みたい児童の学習を促したい。
8. いろいろな花柄を観察して調べる。(0)		学習のまとめ ⑧	

(実際の指導記録 資料4)

③ 児童の変容と今後の課題

ア、児童の変容

自由進歩学習では、自分たちのペースに合わせて学習を進めていけるので、対象児やグループの子が分からない時でも、グループの子どもたちは焦らずに待ってあげたり教えてあげたりフィードバックしながら学習を進めている場面が多く見られた。そのため、対象児Aは1時間学習に参加することができ、グループの子どもたちにとっても教えることで学習した内容の理解の確認につながった。また、グループ内での教え合いは温かい人間関係作りにもつながっていた。

イ、今後の課題

対象児をみると、自由進歩学習の形態を取ることで学習意欲が持続するようになってきたが、考えれば分かることもグループの人に頼ってしまう傾向があった。特にカードを読むところを頼っていたので、対象児が友だちにや教師に助けを求めるところと自分で頑張るところを考えて意欲を持たせていくことが大切である。そのためにも対象児に合うカードを工夫することが必要である。

2 仮説2の取り組み ～温かい集団作りを通して、集団に適応するために～

(1) 学級集団における対象児の理解

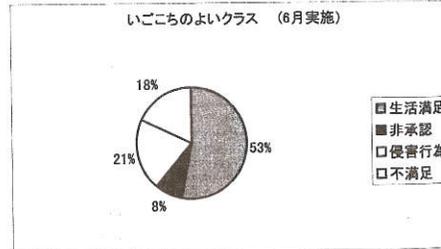
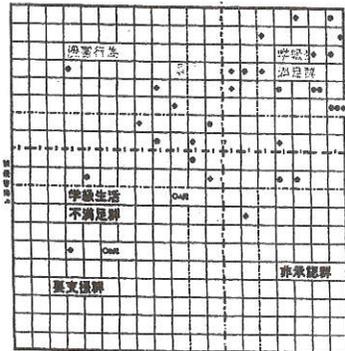
学級集団における対象児の実態把握の考え方は個人の理解と同様で、支援の方法を探る、指導の手がかりにするという視点で実態把握していく。集団の実態把握のために河村茂雄教授が考案した「学級満足度尺度(Q-U)」と「社会性スキル尺度(SS尺度)」を活用した。

Q-Uは、子どもが学級内でどのくらい満足しているかを測る尺度で、承認得点と被侵害得点の2つを組み合わせて測定します。承認得点では、「私はクラスの中で存在感がある。本音や悩みを話せる友人がいる」などの学級内で自分が認められているという思いを測り、被侵害得点では、「学級の中で無視される。いじめや悪ふざけを受けている」などの思いを測定する。

SS尺度では、学校生活を良好に送るために「どのようなルール」が確立していれば良いか、そのルールを学級内で一人一人がどのくらい活用しているかを知ることができるものがある。配慮のスキルは対人関係を営む上でのマナー、関わりのスキルは級友と能動的に関わるのに必要なスキルである。

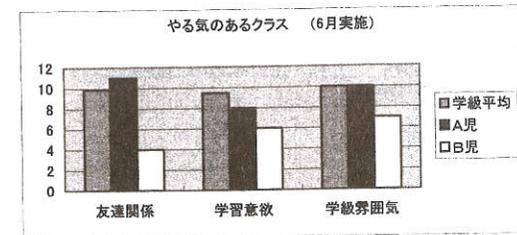
5年1組 男子18名(内対象児1名は特殊学級より通級・・・対象児B)、女子16名 計34名
6月実施

<ア、Q-U「いごちのよいクラスにする」ための実態>



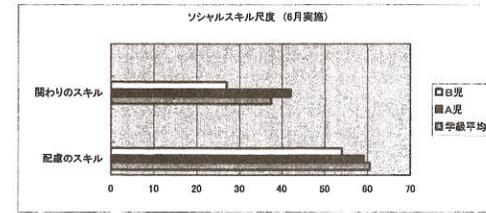
2つの資料から、本学級は全国平均と比較すれば学校生活満足群が多いが、対象児童A児・B児ともに不満足群に入っており「学級の中で認められていないと感じている」と考える。

<イ、Q-U「やる気のあるクラスにする」ための実態>



やる気のある学級のところ(友達・学習・雰囲気)でみると、A児は学習面で落ちており、B児は友達関係のところでもかなり低い数値を示している。学級の中で満足できない部分と推察する。

<ソーシャルスキル尺度による実態と分析> ・配慮のスキル・・・「反省的態度・能動的な援助」の内容
・関わりのスキル・・・「自己主張・リーダーシップの発揮」の内容



ソーシャルスキル尺度からみると、対象児Aは学級の平均と同じ位のスキルを身に付けていることが窺われる。それに比べ対象児Bはどちらも数値が低く、集団に適応するのにかなり苦労しているのではないかと推察する。

以上の実態から、4月に新しい学級になり担任も新しくなったにも関わらず、学級の集団としてよい関係が作られつつあると思われる。対象児Aはある程度のスキルを身に付けているが、集団の中で生かしていない、集団から認められていないという思いが窺える。対象児Bはどの調査でも低い数値なのでソーシャルスキルトレーニングを実施し、集団の中で生活するためのスキルを身に付ける必要がある。

(2) SGE・SSTの指導計画

SGEでは、自己理解・他者理解を中心としたエクササイズやお互いに信頼しあえるような信頼体験エクササイズを組み入れ、SSTでは、人間関係についての知識(どんなときに、どうすればよいか)や自分の思考と感情の伝え方を中心としたスキルを中心に組み入れたいと考えた。さらに楽しくできるようにゲーム性があり、話す・聞くの内容を組み合わせたいと考え、次のような指導計画を立てた。

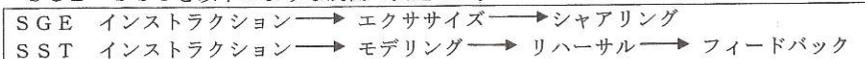
実施期間 9月～10月
方法 道徳・学級活動(ロング)
朝の会・帰りの会・授業の始め(ショート)

主なねらい	SGE	SST	ショートSGE・SST
・リレーション作りと生活習慣の再定着を図る	・質問ジャンケン ・4つのまど ・アウチでよろしく ◇パースティブ	・上手なあいさつ ・上手な聴き方 ◇いいとこ探し	① あわせアドジャン ② カムオン ③ 聖徳太子ゲーム ④ あなたにインタビュー
・一人一人の個性を認め、一人一人の良さに気づかせる。	・あなたの〇〇がすき ・ポジティブリフティング ◇本当にほしいもの	・仲間の誘い方 ・温かい言葉がけ(温かいことばシヤワー)	⑤ 「？」と「！」 ⑥ タイムトラベル ⑦ リーダーはだれだ ⑧ 息を合わせて

※ ロングSGE・SSTは担任と相談し、児童の実態に沿うものを実施する。ショートの方は主に担任にお願いして実施した。(担任がいくつかのエクササイズの中からやりやすいものを選ぶ。)

※ 実施できたもの・・・あみかけ ①③は担任が実施 ◇は付け加えたもの

SGE・SSTを以下のような展開で実施した。



② 授業実践
 < SGEの実践 >

5年生 34名
 平成14年9月～10月実施

こんな子どもたち

- ・4月にクラス替えがあり担任も新しくなった。明るく元気いっぱいの子供たちであるが個性的な子が多い。
- ・SGE体験は初めてである。
- ・自由で活発な雰囲気がある。

この時期の発達課題

- ・仲間遊びなどによる友人関係から社会的スキルを身につけていく。
- ・集団の一員としての自覚が芽生える。

こんなねらいで

- ・友達との支え合う体験を通して受容されている気持ちを味わい他者への信頼関係を培う。
- ・誰とでも仲良くできる。
 (対象児のねらい)

こんな活動を

- ・相手に自分を任せたり、任せられたりする体験ができる。
- ・楽しく活動ができる。



実施I エクササイズポジティブリフティング

○ねらい…4人が指2本で1人を持ち上げる(持ち上げられる)体験を通して、協力することの大切さや友達に対する信頼感を養う。

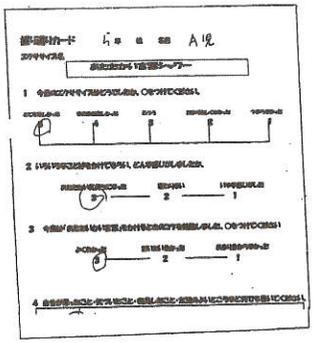
- 活動①アウチでよろしく(ウーミングアップ)
- ②ポジティブリフティング(エクササイズ)

○シェアリング…

- ・自分はみんなより重いので、持ち上がるか心配だったが、持ち上がったときはとても嬉しかった。
- ・うまく声を合わせると、持ち上がるのがわかった。
- ・恐かった ・楽しかった

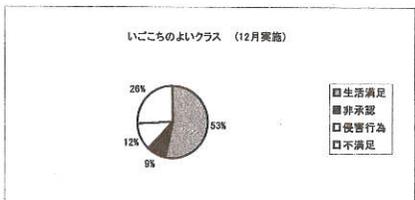
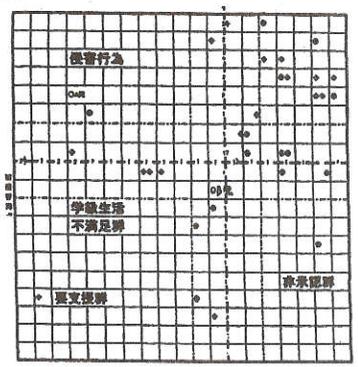
実践を終えて

- ① 半数ぐらいの児童は楽しそうにやっていたが、男子の一部の児童は身体接触に抵抗があったのか同じ人とだけやっていた。対象児Aは一目散に教師の所に来てずっとやり、その後、対象児Bとやっていた。誰とでもできるところまではいかなかった。
- ② どの子も驚きをもってやっていた。うまくできた時は本当に楽しそうであるが、反面危険なところもあるのでからはらすことが多かった。対象児2名は同じチームになったが1名足りないので教師が入った。対象児たちは持ち上げることに熱中し1回目と2回目の違いが理解できず活動していたが、とても楽しそうであった。「自分は思いから持ち上がらないだろうと思っていたが、指2本で協力すれば重い人も持ち上げることができた。驚いた。」という声が多かった。自分が持ち上げられた・持ち上げたという体験を通して、言葉がけの大切さや協力すること心地よさを体を通して知ることができた。



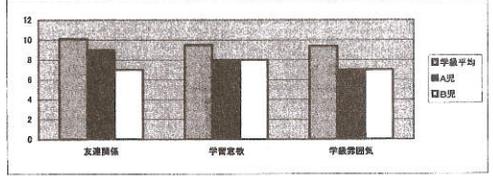
(3) 学級集団の変化

6月と同様にQ-UとSS尺度の調査を実施した。(2学期に女子1名転入してきたが、調査結果から削除)
 <A、Q-U「いごちのよいクラス」の実態> 12月実施



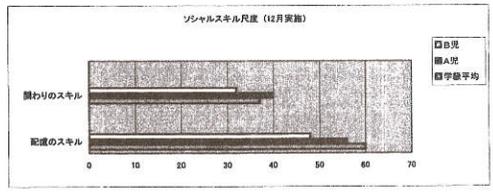
Q-U「いごちのよいクラス」の実態を占める割合は、全体では満足している子がいるが、対象児Aは学校生活で認められず、生活に不満を感じていて、徐々にならなると思われる。

<I、Q-U「やる気のあるクラスにする」ための実態>



「やる気のあるクラス」では、全体ではほぼ変わらないが、A児の値は低くなっている。B児の方は友達関係に伸びが見られた。

<ソーシャルスキル尺度による実態>



「ソーシャルスキル尺度」では、6月と比べ、B児の関わりスキルが伸びているが、他はほとんど変わらず、やや低くなっている。6月にあったスキルがなくなるといことは考えにくいので、活用されていないか、または発達段階からみて自分を厳しく見つめているからということも考えられる。

(4) 仮説2の授業の考察

ア、児童の変容
 SGEやSSTをやり始めたころは、「何をやらせられるのだろう」という受身的な気持ちの子が多かったが、活動が慣れだすにつれて「どんなことをするのか」という積極的な態度に変わってきた。活動が慣れだすにつれて「何をやらせられるのだろう」という受身的な気持ちの子が多かったが、活動が慣れだすにつれて「どんなことをするのか」という積極的な態度に変わってきた。活動が慣れだすにつれて「何をやらせられるのだろう」という受身的な気持ちの子が多かったが、活動が慣れだすにつれて「どんなことをするのか」という積極的な態度に変わってきた。

イ、今後の課題
 SGEやSSTの実施は、無理強いことを避け、児童の自主性を尊重し、児童の成長を促すことが大切である。また、Q-U等の調査結果は現時点の学級の状態や児童の状態や学級の状態を理解し修正しながら良い学級集団を作っていくようにしたい。

I 研究内容

1. 主題設定の理由とねらい

現在、学校ではじめや不登校、学級崩壊、学習不応答など、多くの問題を抱えている。これらの背景には、家庭、学校、社会などの様々な要因が考えられる。

所属校は小規模校で、行事や縦割り活動などを通して全校児童でふれ合う機会に恵まれており、素直で明るく行動する児童が多い。幸い大きな問題行動は見られないが、「どうせ自分なんか。」あるいは「得意なものがない。」など、自分自身に対してマイナスのイメージを持つ傾向が見られる。こうした自己受容できていない児童には、自尊心(※1)が育っていないことが考えられる。

また、仲良く一緒に活動したり遊んだりしているものの、相手の話をよく聞いたり相手の立場になって考えたりする行動がでない児童が見られる。こうした児童相互の人間関係に深まりがないことから、お互いの存在を認めて大切にしようという気持ちが十分育っていないことが考えられる。

これらの自尊心の未発達、人間関係の希薄さは不登校や問題行動に発展する大きな要因と考えられている。そこで、こうした児童に学級担任として日常的にかかわることによって、児童一人一人が伸び伸びと自己表現し、仲間とかかわり合える学級づくりをしたい。また、それが心の悩みを解決したり、問題行動を予防したりすることにつながると考えた。

山崎らは、学校不応答の調査・分析・治療(※2)を行い、「授業がわからない」ことが不応答のきっかけとして上位にあることを明らかにしている。「カウンセリングを生かした授業づくり」松原達哉 学事出版

教師が児童との学校生活の中で、もっとも多くの時間を費やすのは授業である。児童が十分にかかわり合いながら課題解決に向かうように授業改善を図ることにより、児童の自尊心を育てることができれば、様々な問題行動を未然に防いだり、解決したりすることができる糸口になると考える。

このような授業の改善を図るためには、共感、支持、人とのつながりを大切にしようとする教育相談の諸理論の考え方や技法を生かしていくことが有効であると考え、本研究主題を設定した。

2. 研究仮説

①児童の思いや考えを共感的に受け止める教師の姿勢、②友だちとのペア学習やグループ学習など他とのかわりを大切にした授業形態、③自己評価や他者評価を取り入れた互いのよさを認め合う活動など、教育相談の考え方や技法を授業づくりに生かしていくことによって、児童の自尊心が育ち、仲間とかかわり合いをもちながら課題を解決する学級をつくることができるであろう。

(1) 自尊心・人間関係・学習意欲の相関関係

人間関係を上手に築いていくためには、まず自分自身を認める自己受容ができていなければならない。自分自身を受け入れることができなければ他者受容の気持ちは育たないからである。

人間関係がうまく築かれていないと、お互いに認め合うことがあまりなされず、自尊心が育たない。

自尊心や人間関係がうまく育ていなければ、自分の考えを表出したり、共に考え合うことができず、学習に対する意欲も低下していく。

このように自尊心、人間関係、学習意欲は相互に結びついた関係にあり、一つが低下すれば他方も下がるという関係にあると考える。裏返せば、どこか一つを糸口として高めていくことにより、他の二つも高まっていく可能性がある。その糸口を教育相談の考えや技法を生かした授業づくりにしようと考えた。

(2) 教育相談の考えや技法を生かした授業とは…

教育相談とは、学校教育全般におけるカウンセリング(※3 開発的学校カウンセリング)を意味する。教育相談の考えや技法を生かした授業とは、カウンセリングの基本姿勢、つまり人間関係(リレーション)を大事にする姿勢を根本に据えた授業である。

① 共感的な教師の態度

教師は共感的な態度で児童の心情に寄り添いながら授業を進めていく。「〇〇と考えたんだね」「～のところがとてもいいと思うよ。」と一人一人の考えを認めたり、「もう一度考えてごらん。」「こう考えてみたらどう。」と励ましたりすることを通して、発表への意欲付けや自分のよさの認識の高まり、さらには教師のかかわりから、他者を受容していく態度を身につけていくと考える。そうすることによって、教師と児童、児童と児童の心の交流が確立され、共同して課題解決する授業に発展していくと考える。

② 児童相互のかかわり

児童が安心して自分の考えを発表できる課題を提示したり、他の児童と関わり認め合う場面を設定したりする。隣の友人と二人で聞き合い、次に4人グループで話し合い、さらに全体で確かめ合う。話し合いの手順、ルール(順番、話し方等)を示し、少ない人数からかかわる場面を設定し、一人一人が話しやすいようにしていく。話し合いではお互いの考えを最後まで聞くこと、「おかしい。」とか「まちがっているよ。」とマイナスの面に目を向けるのではなく、「ここがよかったよ。」「〇〇のところと同じだね。」と共感



したり支持したりすることを体験させる。

③ 認め合う評価活動

自己評価や他者評価をさせる際には、評価カードなどを活用し認めたり励ましたりする観点を示していく。友人に認められることで一人一人の自尊心が高まり、さらには人間関係を深めていくことにつながる。友達の言葉をふまえて課題を追求していく中で、認め合う評価活動を進めることによって、自尊心の発達を促し、よりよい人間関係を築くことができるものとする。

(※1 自尊心)

自尊心とは、ありのままの自分を受け入れる(I am OK)感情のことである。「自己肯定感」「セルフエスティーム」とも言われ、学級集団づくりのキーワードとして注目されている。

自尊心が高まれば、他人を受け入れる(You are OK)感情が高まり、学級集団の中にお互いに認め合う人間関係が築かれる。中学年をピークに低下していくと言われている。(1998, 木村)

(※2 学校不応答の課題)

学校不応答のきっかけに関する調査・分析を行い、さらに小学校の学級に複数年度かかわりながら、登校しぶりや粗悪行為をとる児童らに学習面での遅れを取り戻す働きかけを行ったアクションリサーチ。

(『学習治療教育による授業改革—算数のマスタラーニングと深化発展学習』藤原喜悦編著、図書文化社)

(※3 開発的学校カウンセリング)

問題を抱えている一部のものだけではなく、全員を対象に各個人の健康的な精神予防から、より一層の人格成長を援助していくことまでを目標にした学校教育相談。SGE(構成的グループエンカウンター)やSST(ソーシャルスキルトレーニング)などがこれにあたる。

3 事前調査の結果からの考察

【調査目的】

・自尊心、人間関係、教科学習の面から児童の実態を把握し、どのような手立てが必要か考え、授業づくりに役立てようと考えた。

(1) 児童の自尊心

・自分のよさがわからない
・自分のがんばりは友達に認められていない
・友達と話すことが少ない

・学習場面での一人一人の発言をとらえて、よさを認めていく教師の働きかけ。
・お互いのがんばりやよさを認め合うことを繰り返し体験させていく。

(2) 児童の人間関係

・友だちから声をかけられない
・テストの点数で友達を評価している
・協力したり応援したりしてくれない

協力して学習を進める活動を通して、自分の考えをはっきりと話すこと、相手の話をしっかりと聞く態度を身に付けさせる。

(3) 国語科にかかわる調査

・自分の考えを言うことができない
・国語の学習が嫌い
・協力して学習ができない

国語科の学習を成立させるための学習スキルを身に付けさせる。

これまでの自分自身の授業実践を振り返ってみると、どんな教材や課題を提示すれば、児童が学ぶ意欲を高めてかかわり合いながら学習するかを考え、授業を構想してきた。

しかし、指導内容や授業形態にだけ目が行き、学習を成立させるための「学習スキル」について意識して

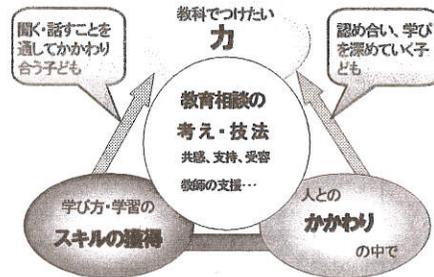
こなかったことが、児童のアンケート調査から改めて気付かされた。

例えば、友達が発言をよく聞くように指示するだけでは、本当に理解しながら聞く児童は育たない。発表を聞くときに「相手をよく見て聞く。」「うなずきながら聞く。」という具体的な方法を教えて、はじめて相手の話を聞き理解できるようになるのである。

また、自分の考えを発表する場合、相手に伝わるようにと指示しても、聞く側を意識した発表の仕方がすぐできる児童は少ない。「相手を見ながら話す。」「賛成か反対かをはっきりさせてから発言する。」などが具体的にわからなければ、発表の内容は相手に伝わらない。

こうした学習の成立にかかわる方法や技能である「学習スキル」が身に付いていなければ、児童は何をどうすればいいのかかわらない。児童相互が十分にかかわりあって学習を深めていくには、「学習スキル」を繰り返し指導し、身に付けさせていくことが必要になってくる。

「人のかかわりの中で教科のねらいを達成し、児童の自尊感情や人間関係を育てていく」という本研究の授業構成のためには、次のような学習スキルを身に付けさせていくことが大切であると考えた。



《事前調査の結果から、児童の実態を考慮し設定した学習スキル》

話す	自分の考えを話す。「わたしは〇〇だと思います。」 聞く人を見ながら最後まで話す。(顔が見えるように体の向きを変える。)
聞く	賛成か反対かをはっきりさせながら聞く。「ぼくは△△に賛成です。」 発表する人を見ながら聞く。(顔が見えるように体の向きを変える。)
考える	ある事柄から類推して考える。「〇〇は……だから、△△は～～だと思う。」 他の考えを聞いて、再思考する。「□□さんの考えを聞いて、◇◇に考えが変わりました。」
評価する	自分や友だちの考えのよいところを見つける。「〇〇さんの考えの、～～のところよかった。」 友だちの考えを認める。(うなずいたり拍手したりする。)

- ・「話す」…相手に自分の考えたことを伝える
 - ・「聞く」…相手の考えをしっかりと受け止める
 - ・「考える」…自分や他の児童の考えを比べて考える
 - ・「評価する」…お互いの考えのよさを認め合う
- これらの基本となるスキルを身に付けることにより、自分の考えを相手に伝えたり、相手の考えを受け止めたりしながら、国語科の学習が深まっていく。そこで、これらの学習スキルを段階的に指導していく必要がある。

その際、これらの学習スキルは決して教え込むのではなく、獲得させる過程に教育相談の考えや技法を生かしていきたいと考えた。

[EX] ・具体的な児童の姿でモデリングする。 ・少しでもできた姿を繰り返し認めていく。
 ・受容・共感的な態度で傾聴に努める。 ・Iメッセージ※で教師が自己開示していく。
 ・人とかかわりを大切にし、かかわりの中で学習スキルを使い定着させるようにしていく。
 ・アイコンタクト※を使い、表情やしぐさからも児童の心情を受容する姿勢を示す。
 ※Iメッセージ 「わたしは～～だと思うよ。」と相手に伝えていく技法
 ※アイコンタクト 笑顔、身振りなどと同じように非言語メッセージの一つ。

4 研究の進め方

(1) 研究の方法

- ・事前調査の結果と担任教師の聞き取りによる児童の実態から、教育相談の考えや技法を生かすポイントを以下のように設定し指導案を作成、授業実践した。

授業づくりのポイント①「互いにかかわり合いながら、学び方・学習スキルを身に付ける。」

- ・「話す」「聞く」「評価する」の約束事(スキル)を具体的に示し、ほめたり認めたりすることを通して、児童に学習スキルが身に付くように働きかけていく。
- ・児童の発表を最後まで聞き、「〇〇のところの話し方がわかりやすかったよ。」「□□の聞き方がとてもよかったよ。」と、児童の姿を認めていく姿勢を示す。

授業づくりのポイント②「話すこと、聞くことを通した児童相互のかかわり合い」

- ・2人、4人のグループの少人数による交流、全体での話し合いによる交流の場面を繰り返し体験させ、話す・聞くかかわり合いを大切にしていけることを通して、より深い読み取りができるようにする。
- ・児童の考えをまとめる、整理する、他の児童に評価をもとめる指名など、一人一人の読み取りを深めることができるように、適切に教師が介入する。

(2) 教材について

小学校第3学年国語「ちいちゃんのかげおくり(あまきみこ作)」

(3) 分析の方法

授業記録の方法と分析は、稲垣・山口(1997)、出口・真田(2001)※を参考にして行った。教師と児童の発話の展開(回数・内容・対象・話者の交替)から、本研究の仮説の検証にあたった。

① 記録の方法

- ・3台のVTR(教師・児童全体・追跡児童)を用いて記録した。

② 分析の方法

- ・授業の記録から、教師と児童の発話の展開・回数・内容・対象を明らかにした。
- ・発話の回数については、VTRの記録からつづやきも含め話者の明らかなものすべて個人の発話として記録した。
- ・発話の対象についてはVTRの記録から、話者の視線や表情をもとに授業者(小松)が解釈した。
- ・すべての発話を次のように分類、記録した。

はじめの数字：発話番号	T：教師の発話
C：児童(複数による発話)	C(数字)：児童(個人)

※稲垣・山口(1997)「理科授業のエスノグラフィー：リソースに媒介された教師-子供の関係性の会話分析的研究」日本理科教育学会研究紀要Vol.138

※出口・真田(2001)「話し合い活動を中心とした授業の分析」山形大学教育実践研究

5 授業実践による検証

(1) 授業づくりのポイント①「互いにかかわり合いながら、学び方・学習スキルを身に付ける。」

児童の発話対象の回数

	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目
a 自分自身(ひとり言)	8(24%)	11(48%)	30(32%)	24(30%)
b 児童1人(個対個)	5(15%)	0(0%)	5(5%)	9(11%)
c 児童複数(個対複数)	0(0%)	0(0%)	1(1%)	4(5%)
d 教師(個対教師)	14(61%)	12(52%)	56(62%)	44(54%)
学習場面 授業形態	聴講を聞き感銘を書く →斉→2人→斉	あらすじを書く →斉	あらすじを書く →斉	あらすじを書く→斉 →2人→斉

6時間目	7時間目	8時間目	9時間目	10時間目
5(16%)	7(9%)	3(3%)	3(4%)	3(5%)
4(13%)	12(15%)	17(18%)	7(9%)	1(2%)
3(9%)	6(8%)	3(3%)	14(17%)	16(25%)
20(62%)	55(68%)	69(75%)	58(70%)	45(68%)
2つの場面の対比 →斉→2人→斉	2つの場面の対比 →斉→2人→斉	2の場面の読解 →斉→4人→斉	3の場面の読解 →斉→2人→4人→斉	さいごのかげおくり →斉→2人→斉

- ・1時間目から10時間目までの児童の発話を上記の表のように分類し、発話内容の変化を追ってみた。(1時間目については新出文字の学習であり、調査対象外とした。)
- ・5時間目までは、児童一人一人が自分の考えを発表することが中心となり、「a. ひとり言」と「d. 対教師」の発話回数が多い。しかし、児童が相互にかかわる「b. 個対個」「c. 個対複数」の発話は少なく、児童の発話対象が教師に向いていることがわかる。指名されていないとしても、一人で話し始める児童が見られた。
- ・7時間目、8時間目を見てみると、児童のひとり言が減り、「b. 個対個」の発話回数が増えている。このことから、児童の発話対象が発問をした教師だけではなく、他の児童の発表内容に向いてきていることがうかがえる。つけたしや賛成、反対の発言が活発になった。
- ・また、9・10時間目については、「b. 個対個」の発話が減少するが、「c. 個対複数」の発話が見られるようになった。それまで1対1の児童のかかわりが、複数の児童によるかかわりへと変容していったと考えられる。
- ・これらの変容が、児童が学習スキルを身に付けていった結果である。そこで、以下に示した各スキルの指導場面から検証を試みる。

発話記録からの検証

「聞くスキル」教師によるモデリング【2時間目】

- ・児童が教材文とふれる最初の場面。教材文を教師が読み聞かせした後、一人一人の感想をワークシートに書かせた。
- ・ワークシートに書いた感想を隣の児童に伝えた後に、全体の場で発表する場面を設けた。

本時のねらい：ちいちゃんのかげおくりの読み聞かせを聞いて、感想を書こう。

- ・本時では、全体に対して発表する前段階として、隣の友だちにワークシートに書いた内容を読んで伝えることを取り入れた。一度友達に伝える活動を体験することで、友達の前で発表することの抵抗が少なくなる
- ・考えた。
- ・最初は「体を向かい合わせて」と指示したが、顔だけ相手に向けて話す児童が多く見られた。そこで、話の聞き方の上手な2人組の様子を紹介し、全体のモデルとした。「うんうん。」とうなずくこと、体を近づけて聞くと、話しているほうも一生懸命聞いてもらっているように感じることを示した。

(T) (移動しながら)上手なのはここ！ この人たち (C05、C31) とこの人 (C02、C21)。すごく上手です。聞き方。どうしてかという、体を近づけているんです、ぐっと。聞きやすいように。うんうんと。(C02に向かって) そうすると聞いてもらっているほうも気持ちいいでしょ？ 一生懸命聞いてもらっているって。ちょっと真似してごらん。近づけるだけでも簡単でしょ。体をもっと近づけてみようよ。

- ・その後、ほとんどの児童が膝をくっつけたり、うなずいたりしながら話し合いを進めた。教師の言葉による指示よりも、他の児童の姿からモデリングする方が効果が見られた。
- ◇教師が適切に介入し、児童のよさをモデリングして他の児童に示すことは押し付けではなく、児童に受け入れられやすい。
- ◇「いい子を見習え。」ではなく、体の距離が近づくことで心的にも近づくことを、具体的な姿や行動で示し体験させることが効果的である。

「聞くスキル」の定着【5時間目】

- ・4の場面と5の場面を読み、「いつ」「どこで」「だれが」「なにを」の観点であらすじをまとめていった。
- ・5の場面は隣同士で意見交換をして、ワークシートに書き込む活動を取り入れた。

本時のねらい：ちいちゃんのかげおくりの読み聞かせを聞いて、感想を書こう。

- ・5時間目に隣同士の児童で話し合いをさせた。2時間目の初発の感想を書いた活動場面でのモデリングがポイントとなり、本時では教師の声がけがなかったにもかかわらず、児童の活動の様子から以下のような変容が見られた。

- (C21、C02)・・・C02くんはどこだと思う？(C21が体を近づけて話しかけている。)
- (C05、C31)・・・ちょっとぼくを見て。(プリントをお互い近づけてよく見えるようにしている。)
- (C18、C08)・・・わからない。教えて。(C08が体を乗り出して話を聞いている。)
- (C25、C11)・・・ちいちゃんぐらいの・・・じゃない？(お互い向かい合って話し合っている。)
- (C22、C16、C23)・・・同じだ。(C16のプリントに顔を寄せて話し合っている。)
- (C01、C32)・・・(C32が「ここだよ。」と指さして教えてやっている。)

- ◇2時間目の授業で、「体の距離が近づく」と心的に「近づく」という具体的な行動場面をすぐに取り上げ、認めたことが効果的であった。

「話すスキル」の変容・・・自分の論点を明らかにし、違う意見の児童と交流する。【8時間目】

- ・2の場面を読み、家族とはぐれて一人ぼっちになった主人公の心情や場面の様子を読み取る。
- ・恐ろしい情景、物々しい音や声の中、一人になっても泣いたり騒いだりしていない主人公の気持ちを考える。

2の場面を読んで、ちいちゃんの気持ちや様子を考えよう。

- ・主人公の心情を考える話し合い活動では、次のような発話があった。
- ・本時の中心発問は「ちいちゃんはどんな気持ちだったでしょう。」とせず、「ちいちゃんが泣いたり騒いだりしなかったのはどうしてでしょう。」と発問した。児童に自分の論点をはっきりさせて発表させることをねらった。そうすることで、児童の発表によるかかわりが生まれ学習スキルが高まっていくと考

えた。

- (C01) どうせ、お母さん、お兄ちゃんにはここには来ないと思っていたから。
- (C24) お母さんたちにはきつと会えると思っていたから、がまんしているのだと思いました。
- (C15) たぶん、泣いたり騒いだりすると他の人に迷惑だから。
- (C18) まだ近くにお母さんたちがいるかもしれないと思っていたから。
- (C12) 泣いたら、他の人に迷惑がわかるから。
- (C25) C21ちゃんと同じで、危ないからだと思います。
- (C26) C21ちゃんと同じで、危ないからだと思います。
- (C30) 危なくて、泣いていると逃げ遅れるからだだと思います。
- (C12) あきらめたに反対です。まだ、お母さんたちが、来るか来ないかわからないからです。
- (C25) C12くんと同じで、あきらめたに反対です。
- (C25) まだ会えるかどうか分からないので、あきらめないと思います。
- (C24) あきらめたっていうのに反対で、わけは、お母さんたちに会えるかもしれないっていうことが、4の場面にあったからです。
- (C30) わたしは、あきらめたに反対で、近くにお母さんがいるという考えに賛成です。
- (C03) あきらめたに反対です。近くにお母さんたちがいるかもしれないって思っているんだから、あきらめないと思います。



- ◇話す内容を絞る、話す目的をはっきりさせる。「主人公の気持ちはどうだったでしょう。」と問うよりも、「主人公はどうして泣いたり騒いだりしなかったのだろう。」と、具体的に問かけると、児童も立場をはっきりさせて発表しやすくなる。そうすることで、賛成したり反対したりする児童相互のかかわりが活発になっていった。

「話すスキル」と「聞くスキル」を使って、他の児童と交流する。【10時間目】

- ・最後のかけおくりの場面を読んで、主人公が幸せか幸せでないか考え、物語の主題である「家族愛」と「戦争の残酷さ」に気づかせていく。

本時のねらい：4の場面を読んで、ちいちゃんの気持ちを考えよう。

- ・一人一人の発表の後、お互いの意見に賛成や反対を言い合う話し合いに入った。途中、教師が介入し児童の思考を揺さぶろうと考えていた。4の場面のきれいな色使いや主人公がきらきら笑うしぐさから受ける印象で、「幸せそうだ。」と児童の思考が偏ると考えていた。しかし、C09の「4つのかげが見えたというのは、ちいちゃんの家族に会いたいという強い気持ちが見えた想像ではないか。」という発話があり、揺さぶりにつながると考え教師が介入するのを控えた。
- C30の発話は、「死ぬことでしか家族に会うことができなかった。」という、逆説的な物語の結末をよくとらえていると思う。

- (C24) わたしは幸せだのほうにしたんだけど、幸せではないの「ひどくのどがかわいています。」という意見に賛成です。そういうことも書いてあって、すごく幸せではないような暮らしをしているからです。
- (C19) ひどくのどがかわいていたときは幸せではなかったと思うけど、その後はお父さんやお母さんに会えたので幸せだと思います。
- (C30) わたしは幸せと幸せでないが半分ずつだと思います。最初はひどい生活だったけど、最後はみんなに会えたからだだと思います。
- (C01) ぼくは幸せと幸せでない、両方に賛成です。なぜかと言うと、最初のほうはひどい暮らしだったけど、最後に3人に会えてうれしかったと思うからです。
- (C09) 4つのかげが見ただけで周りにいないので、あまり幸せではないと思います。
- (C24) 4つのかげは他の人には見えなかったかもしれないけど、ちいちゃんには見えたと思うので幸せだと思います。
- (C30) 1の場面で、お母さんが「大きな記念写真」と言っていて、ちいちゃんはそれを覚えていたから見たんだと思います。
- (C01) ぼくは、最初は幸せではなかったけど、最後は幸せだったということがわかりました。なぜかと言うと、ちいちゃんが1人でかけおくりをしたとき、天国でお父さん、お母さん、お兄ちゃんが見ていたと思うからです。

- ◇C30とC01の発話内容は、どちらかに決めるのではなく、両方の要素が考えられるという内容になっている。学習スキルが身に付き、他の児童の発言内容をよく聞き、まとめ、他に伝えることができたといえる。
- ◇そのことによって、本時のねらいである「主題の二重性に気付くこと」にも迫っていくことができた。

【考察】

- ◇児童相互がかかわり合い、考えを深めていくためには、話し方、聞き方のスキルを身に付けさせ、繰り返し体験させていくことが有効である。スキルを身に付けさせる過程に、教師が「うなずきながら聞いていけぬ。」など、児童の行動の具体的なよさを取り上げる教育相談的なかかわり方をしていくこ

とで、児童が受け入れやすくなっていく。

- ◇5時間目の話し合いの活動では、2時間目に取り上げた「体や顔を近づけて相手の話を聞く」スキルが児童に身につけてきている様子が見られた。学習スキルを定着させていくためには、繰り返し指導していくことが有効である。
- ◇「賛成や反対の考えはありませんか」と問い、一人一人の考えを表出させ大事にしていくことを繰り返すことにより、8時間目と10時間目の話し合いでは、学習スキルが身に付いて自分の論点をはっきりさせて発表するという姿が見られた。
- ◇お互いに考えを話したり聞いたりするかかわりの方法の指導については、教師側から提示し支援していくことも有効であるが、他の児童をモデルとしたほうが児童に受け入れられやすい。その際気をつけなければならないのは、「いい子を見習え。」ではなく、「〇〇さんの～を真似してみよう。」と具体的な姿で知らせることである。「いい子だから認められる。」では逆効果である。
- ◆学習スキルを指導する際は、具体的に、一つに絞ることが重要である。1時間の中に数種類の要素を組み入れて指導しても児童は混乱してしまい、結局身に付かない。

(2) 授業づくりのポイント②「話すこと・聞くことを通した児童相互のかかわり合い」

発話回数とその対象の分析から

◇5時間目の授業をきっかけに児童のかかわり合いに変容が見られた。

【児童の発話内容】

	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目
a 発問に対する発話	10(37%)	12(52%)	54(59%)	36(44%)
b 他の児童に対する発話	5(19%)	0(0%)	6(7%)	13(16%)
c ひとり言	8(30%)	11(48%)	30(32%)	24(30%)
d 学習に関係ない発話	0(0%)	0(0%)	2(2%)	0(0%)
e その他	4(14%)	0(0%)	0(0%)	8(10%)
学習場面 授業形態	読解を聞き感想を書く 一斉→2人→一斉	あらすじを書く 一斉	あらすじを書く 一斉	あらすじを書く 一斉→2人→一斉

	6時間目	7時間目	8時間目	9時間目	10時間目
a	21(46%)	48(59%)	53(58%)	44(54%)	32(49%)
b	7(15%)	18(23%)	20(22%)	21(26%)	17(26%)
c	5(11%)	7(9%)	3(3%)	3(4%)	3(5%)
d	0(0%)	0(0%)	1(1%)	0(0%)	0(0%)
e	13(28%)	7(9%)	15(16%)	14(16%)	13(20%)
2つの場面の対比 一斉→2人→一斉	2つの場面の対比 一斉→2人→一斉	2つの場面の対比 一斉→4人→一斉	3の場面の読解 一斉→2人→4人→一斉	さいごのかけおくり 一斉→2人→一斉	

- ・一斉授業の形態の3・4時間目と比較して、一人一人がかかわる場面の多い2時間目と4～10時間目のグループ学習では、「b.他の児童に対する発話」が必然的に増える。
- ・5時間目の授業をきっかけにして、児童の「c. ひとり言」が減少し、「b. 他の児童に対する発話」が増加していく。
- ・2時間目と5時間目以降の発話内容を比較すると、2時間目では「おおー」「なるほどなー」といったつぶやきのようなものが多かったが、5時間目以降は「〇〇さんの意見に賛成です。」「□□くんの意見に付け足しで△△です。」などといった、発表内容にかかわるものが増え、児童相互のかかわり方が深まっている。
- ・どうしてこのような変容が見られたのか、以後発話記録から検証を試みる。

発話記録からの検証

★かかわり合う発表

自分の論点を明らかにする。【5時間目】

- ・他の児童の発表に対する発話が増える授業変容につながった。

- ・4の場面と5の場面を読み、いつ「どこで」「だれが」「なにを」の観点からあらすじをまとめていった。
- ・5の場面は隣同士で意見交換をして、ワークシートに書き込む活動を取り入れた。

本時のねらい：ちいちゃんのかげおくりを読んで、場面ごとのあらすじを書く。

- ・4の場面の場所が「どこ」であるかという話し合いで、以下のようなやり取りがあった。
- ・他人と同じ意見であることを付け加えて、自分の考えを発表した場面。これまでは友だちと同じ意見であると「同じです。」と声を出して終わっていた。以後、同じ考えでも自分の考えとして発表する児童が多くなった。

- (C09) えーと、ぼくは空の上の花畑だと思います。
- (C01) ぼくも空の上の花畑だと思います。
- (C21) わたしも、C09さんとC01さんと同じで、空の花畑のとこだと思います。
- (T) 今のような発表の仕方をする、どんな考えなのかはっきりしていいね。

・また、次のやり取りは本単元の学習で初めて出た反対意見の発話である。

- (T) ちょっと、それには反対だっている人？
- (C26) (言いかけるが答えに詰まって話し出せない。)
- (T) 忘れてしまった？でも反対だっているんだね。
- (C26) (頷いている。)
- (C30) はい、わたしは、ぼう空ごうの中だと思います。
- (C30) なぜかという、3の場面の終わりでもぼう空ごうのなかへいたからです。
- (T) 今みたいに反対の意見を出すのは大切ですよ。先生はうれしいな。もう一度みんなで考えることができますよ。



- ・これまでは友だちと同じ意見でないと、「はずれているかも…」という意識があり、一人の児童の発話のあとには他の児童が続かなかったが、5時間目をきっかけに他の児童の発話に対して反応が見られるようになっていった。
- ・この授業の後、次のような発話が見られた。

- (C09) ぼう空ごうだかもやー。
- (T) どうしてC09くんはぼう空ごうだと思ったんですか。考えが変わったね。
- (C09) はい。なんか、やっぱりC30さんが言ったように、3の場面ではぼう空ごうの中にいたから。
- (T) C09くんみたいに人の意見を聞いて「やっぱりこうだった。」って変えるのはいいんですよ。友達の発表を聞いてよく考えたということがわかりますよ。

◇友達の発表を聞いて、自分の考えが変わった発話をとらえ、よさを認めた場面である。それまでは「自分の考えは外れた。」と思考を止めることが多かった。この発話をきっかけに考え直すことを価値付けることができた。

☆グループ学習の変容

一緒に考える学習で、児童相互のかかわり合う様子に変容が見られた 【6時間目】

- ・1の場面と4の場面のかげおくりの様子を対比させて読み、2のかげおくりの様子はどう違うのか考える。
- ・隣同士で意見交換をして、ワークシートに書き込む活動を取り入れた。

本時のねらい：2のかげおくりの場面を比べながら読もう。

- ・2つの場面を比べて同じところと違うところを見つける活動を、隣同士の2人で取り組ませた。前時までの1人で考えたことをお互いに発表する活動から、一緒に考える活動になった。
- ・話し合い活動開始直後の児童の様子は次のような様子であった。

- (C) (小声で相談を始める。)
- (T) (様子を見るために巡回をする。)
- (C26, C06) いいところ見つけたね。2人で見つけられたの。
- (C19, C12) C12くん、見つけるの上手だね。C19さんにも教えてあげて。(全体的に、顔を横に向けてはいるが、話し合っている感じを受けない。)
- (話し合い活動が1分ほどで膠着してきている。前を見ていた児童が多い。)
- (C09, C23) C09くんいいところに線引いたね。C23も見てごらん。ね。
- (C01, C32) C01くんたくさん書いてるね。C32さんと2人で確かめてみようよ。

- ・本単元の学習を始めて、初めて2人で考えを出し合う学習であったためか、相談はするが小声であったり、顔を相手に向けてはいるが体の向きはそのままだったり、話し合いが停滞しているのが感じられた。
- ・教師は一組ずつ様子を見ながら声をかけていったが、児童の様子に変化が見られなかったため、全体に向けて次のよう指導をした。

- (T) ちょっと、いい。途中だけど、ごこの人たち(C24・C14)を見て、くっついてるでしょ。これだと話がよく聞こえるし、聞いてもらってる感じがするって話し合ったよね。ずうっと離れてると話し聞かないんじゃない？
- ほらほら、C25さんとC11さんは向かい合って話し始めたよ。
- (C13・C19、C21・C02) 体を向かい合わせ話し始める。
- (C10・C17) C10がC17に見つけたところを教えている。13ページ開いて。
- (C07・C30) C30がC07に教えて書かせている。わたしが見つけたところ教えるよ。
- (C12・C28) C12がC28に教えてやっている。見つけた！ ちょっと、ここじゃない？

◇2時間目に2人で話すことについて同じような指導をしている。しかし、学習のねらいや方法が変わると応用できないようであった。

◇この指導の後、児童同士の体の距離、話す声の大きさに変容が見られ、ペア学習が活発に行われている様子が見えた。前のスキルを思いださせ具体的な友達の姿を見せ、繰り返し指導していくことで学習スキルが身に付き、児童相互のかかわり方が深まっていくと考えられる。

友だちの意見を認めたり、違いに気づいたりする 【9時間目】

- ・3の場面を読み、一人ぼっちで家族を待ち続ける主人公が、泣いたり騒いだりしていない理由を考え、家族を待つ思いの強さに気づかせる。
- ・本時ではグループに分かれて意見交換をする場面を設けた。

本時のねらい：3の場面を読んで、ちいちゃんの気持ちや様子を考えよう。

- ・隣同士で話し合った後グループに分かれて、「どの部分からちいちゃんの行動の理由を考えたか。」について意見交換をした。以下がそのときの児童の様子である。

- 1班・・・(C24が中心になって、友達の意見を聞いている。)わたしは～と思ったけど、C14くんはどう思ったの？
- 4班・・・(C20が自分の教科書に友達の発表をまとめている。)
- 6班・・・(C12のアイデア線の種類を変える。)C28さんのは波線で書こう。
- 7班・・・(みんなで線を引いている。)C25 ちょっと教科書に線を引いていこうよ。
- 8班・・・(わからないC3に他の子が教え、C3が教科書に書き込んでいく。)



◇本時の活動までは、一人一人が自分の意見を発表するだけであった。しかし、本時ではグループの中の1人が中心となり、話し合いを進めている姿が見られた。

◇また、線を引きながら友達の発表を聞くことで、その論拠を明らかにしようとする態度も見られるようになった。

・ここでは7班の児童の取り組みを取り上げ、他の児童に紹介した。以下はそのときの教師の働きかけである。

- (T) なるほど！ ちょっと聞いてくれ。(7班のところで) この人たちは、なぜが鉛筆を持っているね。書き込んでいるよ。どの人が、どの部分のことを言ってるか。こうすると後でわかりやすくていいと思うよ。



◇誰かがリーダーになって話し合いを進めていくこと、線を引きながら友達の発表を聞くことが高まった。

★友達のをよさを認める

認め合う意識の高まり 【6時間目】

◇前時から引き続き、友だちの発表に対して拍手や感嘆の声でよさを認める言動が見られるようになった。他の児童の発表を妨げたり、冷やかしが含まれたりしてはいけないが、友達への賞賛の方法として繰り返し取り上げていくようにした。

・本時までの活動で、他者の発表内容を認める機会を教師側が適時とらえ、働きかけた場面である。

《直前のC21の発表内容を聞いた後の教師と児童のやり取りの様子》

- (C21) わたしは1の場面ではかげおくりを楽しそうにしているけど、4の場面では、ちょっと違って、お母さんたちに会いたいと思ってやっていたと思います。
- (T) C24さん、どう思う？
- (C24) はい、なんか、いいなと思いました。
- (T) ああ、いいなと思った。どこがいいなと思いましたか？
- (C24) ちゃんと書いてはいるんだけど、自分でわかるようにしていたところがいいなと思いました。
- (T) 教科書には書いてはいるけど、自分で考えて書いていていいなと思ったんだね。
- (T) C09くんはどうですか。
- (C09) なんか、はっきりしていないことを書いていて、すごいなと思いました。
- (T) C09くんもそう思ったんだね。

- ・他者の発表に対して何か反応を示すことは「友達の発言に感心を持つこと」「友だちにかかわろうとしていること」とし、そのよさを体験させていきたいと考えた。
- ・さらに本時では、次のような児童の認め合いの行動が見られた。

- (T) C03くん、どんなとき、踏みしめますか？
- (C3) 足が疲れて倒れそうになったときなどに、力を入れて立つことです。
- (T) わかりやすく説明してくれたね。足が疲れて…。
- (T) (C7が拍手しているのを見つけて) あっ、ほら、拍手してくれてる、C07くん。
- (C) (他の児童も拍手し始める。)
- (T) みんなわかりやすかったって、ほめてくれてるよ。C03くん、よかったね。



◇拍手をすることは強要してはいない。C7の拍手はC3の発言内容に対して自然に出たものである。ここで「他者の発表に拍手をするのは、友達の発表に関心を持っていること」と教師が取り上げ、児童全体

に対して価値付けが行われたため、他の児童も拍手をし始めたと考える。本時以降、他者の発表に対して児童は自然に拍手をするようになった。

◇休み時間、C03が教師のところに来て「ぼく、最近国語をがんばってるんだ。」とうれしー一言。すると近くにいたC11が「C03くん、国語のとき張り切ってるよね。」と声をかけていた。自尊感情の高まりと人間関係の深まりが感じられた。

認め合うことの定着 【7時間目】

本時のねらい：2つのかげおくりの場面を比べながら読もう。

- ・最後の音読の発表の場面で、C2の音読後、次のような発話や行動が見られた。

- (C02) 読みます。
- (C) はい。
- (C02) (音読する。) 主人公が驚いた様子を強く速く読んで表現し、登場人物の会話を抑揚をつけて音読した。
- (C15) うまいー
- (C) (全員拍手する。)
- (T) 会話のときの読み方、上手だね。すごいね。
- (C09) 読み方ナンバーワンだ。
- (T) みんなに認められるとうれしいね。C09くんもほめ方上手だね。



◇これまでお互いのよさを認め合う方法がわからない児童たちだったが、自然に相手のよさを認め、行動できるようになった。

うなずくことでもOK! 【7時間目】

- ・前時までの児童の様子から、発話の少ない児童が見られた。そのため、本時では教師が「〇〇くん、そう思う？」などと確認し、うなずいたり首を傾げたりする動作から「〇〇くんも同じ考えだよ。」などと意味つけていった。こうすることによって、話すことが苦手でも友達に向かって意思表示することになり、活動に参加している意識が高まると考えた。
- ・C08は、グループの話し合いや全体での発表のとき、近くの児童との私語は多いが、自分の意見を発表することはなく、学習に意欲的に参加している様子が見られなかった。
- ・そこで、上記のような働きかけをしたところ、8時間目に次のように自分から発表する様子が見られた。
- ・空襲が激しくなる2の場面を読み、何が見えるか話し合う場面の様子。

- (T) 隣の人と相談して見えるものを探します。2分間です。
- (T) C08くん。
- (C08) はい。暗い橋です。
- (T) うん。暗い橋が見えたね。場面の様子をきちんと読んでいたね。いいよ。いろいろな人が発表してくれると、たくさん見つかっていいね。

・簡単な内容の発表であったが、C08は前を向いて学習するようになっていった。

★発話する児童の広がり

発言する児童が増え始めた 【5時間目】

- ・全体で話し合う前に、隣の児童と相談する場を設けた。
- ・次の3人の児童は本時の学習までに、一度も発話のなかった児童である。隣の友だちと相談して答えを確かめて、自分の答えに確信を持ったからこそその発言であった。

- (C28) それから何十年です。
- (C23) 小さな公園になっています。
- (C32) ちいちゃんやお兄ちゃんぐらいの子どもたちです。

◇全体に向かって話す前に、隣や近くの友だちに話す活動を取り入れることで、発表することへの抵抗感を少なからず軽減できると考える。

・下記の表のように、本時では発話する児童数に広がりが出た。3時間目、4時間目、5時間目と授業が進むにつれて、発話している児童が確実に増え、話し合いが全体のものとなっていく様子が読み取れる。

【児童の発話回数】

3時間目	C	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	全
発話人数	回数	4	0	0	0	3	3	0	3	0	0	3	0	1	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23
8人	%	14	0	0	0	11	11	0	11	0	11	0	4	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

4時間目	C	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	全
発話人数	回数	6	2	1	0	6	1	0	0	12	1	0	14	2	8	11	11	0	2	0	2	0	1	7	0	2	0	0	0	3	0	0	92	
18人	%	7	2	1	0	8	1	0	13	1	0	15	2	9	12	12	0	2	0	2	0	1	8	0	2	0	0	0	3	0	0	0	0	

5時間目	C	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	全
発話人数	回数	7	2	3	0	3	1	1	11	12	0	7	4	6	6	2	0	0	2	0	2	0	1	6	2	1	0	1	1	7	0	1	81	
24人	%	9	2	4	0	4	1	1	15	15	0	9	5	7	7	2	0	0	2	0	2	0	1	7	2	1	0	1	9	0	1	0	0	

◇また、理由をつけて話さなければならないような複雑な発問(開かれた発問)より、yes/noで答

えられる簡単な発問（閉ざされた発問）のほうが、話すことに抵抗がある児童は答えやすい。（実際、5の場面は大変短く、手がかりとなることばが限定されていた。）

- ・「友達の発表を聞いて考えが変わった。」という発言に代表されるように、本児童にとっては有効だった。5時間目の授業では、児童の発表の最初に「賛成か反対か」ということばがつくようになった。「〇〇はどうしてだろう。」と問わず、「AだろうかBだろうか。」と問うたことで、児童にとって自分の考えを持ちやすく、その結果賛成や反対の発表が多くなった。さらに、自分の考えを持って相手の発表を聞くことで、「〇〇のように考え直した。」「〇〇と△△の両方に賛成です。」など、互いの思考を深めていくことになったと考える。

【考察】

- ◇児童の発表のどこがよかったのかを教師が常に取り上げ賞賛することを繰り返し示すことによって、驚きの声を上げたり拍手をしたりと、児童相互が認め合う態度が育ってくる。
- ◇驚きの声をあげる、拍手をする、いいところをつぶやく、表情に出すなど、友だちへの賞賛の仕方は様々であるが、ちょっとした行動を取り上げて示すことで、他の児童も同じような行動をとれるようになる。
- ◇少人数のグループ学習と一斉学習を交互に行うことにより、児童の発表意欲が高まっていく。少人数のグループでは他の児童とのかかわりが実感できるし、一斉学習では他から認められることを実感させていくことが重要であると感じた。
- ◆今回の授業実践の中では賞賛、賛成、反対など、友達の発表に対する反応の仕方を毎回指導しようとした。その結果、それらの行動が定着していくまでに時間がかかった。一つのスキルを身に付け、それを使い、また新しいスキルを定着させる、というふうな段階を踏ませることが有効ではないかと考える。

II 研究のまとめ

【検証できたこと】

- (1) 学習を成立させる基本的な学習スキルは、児童の言動をとらえて具体的に示し、繰り返し指導していくことで定着していく。その際、教師による一方的な指導ではなく、「□□がとてもよかったよ。」と認めていくことで、児童の自尊感情が高まり、学習意欲を高めていくことにつながる。
- (2) 少人数のグループ学習と一斉授業を繰り返すことによって、児童相互のかかわり合いが深まっていく。少人数学習は一人一人の児童の心的距離が近いかかわりができることにより、発表に対する抵抗も軽減できる。また、一斉学習では多くの児童とのかかわり合いをさせることができ、その中で認められることにより自尊感情や人間関係が高まる。教師が「〇〇さんの発表を聞いて～と思ったんだね。」「線を引きながら話し合うといふね。」などと共感的に介入していくことによって、児童同士のかかわりがさらに深まっていく。
- (3) 教育相談の考えや技法を授業に生かしていくことで、学習スキルを定着させ学習を深めることにつながる。また児童相互が認め合う活動を通して人間関係が深まり、自尊感情を高めていくことができる。

【検証できなかったこと】

- (1) 3年生の国語科の1単元という限られた中での授業実践であった。したがって、学年や教科等の違う条件での比較検討ができなかった。
- (2) かかわり方や学習スキルを学年の発達段階に沿ってとらえて指導できなかったため、かかわり方や学び方がどのように深まっていったかについて、普遍性に欠ける。

【今後の課題】

- (1) 他の学年、他教科の実践も含めて、継続した実践と検証を進める。
- (2) 児童の発達段階を加味し、学習スキルやかかわり方を段階的に指導できるようにする。
- (3) 本単元では、児童の実態から学習スキルの定着が中心となり、教師の介入が多くならざるを得なかった。今後は教師の介入を少なくし、獲得したスキルを活用し、児童相互が自らかかわり合いながら学習を深めていくような授業づくりをしていきたい。

終わりに

1年間の長期研修を振り返ると、この研修期間がこれまでの自分自身の授業づくりと正面から向き合い、見つめ直す貴重な時間であったことを実感しています。このような貴重な研修の機会を与えてくださった山形県教育委員会をはじめ庄内教育事務所、酒田市教育委員会の諸先生方に心から御礼申し上げます。また、12ヶ月という長期にわたりご指導くださいました山形県教育センター鈴木強太所長、そして諸先生方にも感謝申し上げます。とりわけ、お忙しい中、温かい励ましと細やかなご指導をしてくださった教育相談部田中利幸指導主事並びに教育相談部の諸先生方に心より感謝申し上げます。

さらに、所属校である酒田市立鳥海小学校 小松ノリ子校長、諸先生方には、ご多忙の中、授業実践にも快く協力していただきました。ご理解とご支援に厚く御礼申し上げます。

障害のある児童生徒が

前向きに生きる意欲を育てる

支援のあり方

一 視覚障害児における社会生活能力の向上に向けた指導を通して 一

山形県立山形盲学校

教諭 安部 三喜子

目次

- I 主題設定の理由
- II 研究仮説
- III 研究内容
- IV 研究の進め方
- V 研究の実践
 - 1 視覚障害と社会性とのかかわり
 - 2 盲学校での具体例
 - 3 社会性を育てる指導
 - 4 授業実践1 道徳
授業実践2 児童会活動
- VI 研究の成果と課題

【主な参考文献・資料】

学校だからできる生徒指導・教育相談	渡辺弥生 丹羽洋子 北樹出版	2000
ソーシャル・スキル・トレーニング 子どもの社会的スキル訓練	渡辺弥生著 マトソン・オレンディック著	日本文化科学社 1997
ソーシャルスキル教育で子どもが変わる VLFによる思いやり育成プログラム エンカウンターで学級が変わる	佐藤正二訳 小林正幸・相川充 渡辺弥生編集	金剛出版 1993 図書文化社 1999 図書文化社 2001
ショートエクササイズ集	國分康孝監修	図書文化社 1999
視覚障害の発達と指導	五十嵐信敬著	コレール社 1993
視覚障害学入門	佐藤泰正編集	学芸図書 1991
視覚障害児の心理と教育	岡田 明	学苑社 1975
心身障害児(者)の心理と教育 一視覚・聴覚障害児(者)を中心にして	新谷 守著	東北大学教育学部 1989 視覚欠陥学研究室

I 主題設定の理由

昨年盲学校に転勤し、1年間視覚障害のある児童生徒たちにかかわってきた。障害に負けず明るく過ごす中で、視覚障害による生活や行動の制限、限られた人間関係の中で大半を過ごす子どもたちには、心の不安や葛藤など様々な思いがあることを感じた。ストレスを感じやすく、それが学習意欲に大きく影響することも多い。障害に悩み、受容するまで長い時間がかかることもある。子どもの持っている力を十分発揮させていくには、障害に応じた課題を解決していく指導とともに、それを社会生活の中で意欲的に実践していくための支援が必要であると強く感じた。

視覚障害のある児童生徒にとって心の不安は簡単に消えるものではないが、人生を前向きに生きていくには、こうした社会生活能力の育成と現実社会での実践力を高めることが大切である。このような力は、人との関わりの中で自分を肯定的に理解し、自分の存在を認めてくれる友好な人間関係の中で育っていくものである。視覚障害のある子どもたちへの理解を深めるとともに、発達段階に応じてどの教科・領域でどのように指導していけばよいのか、問題状況に応じた教師の適切なかわり方とは、これらの課題を踏まえ、障害のある児童生徒が前向きに生きる意欲を育てる支援のあり方の研究をすすめていきたい。

II 研究仮説

仮説) 視覚障害児の発達の理解を深め、一人一人の発達段階や特性、視覚障害の状況に応じた指導内容に社会性を育てるプログラムを取り入れた教育実践をすれば、その児童生徒が社会的自立に必要な技術を習得し、自己の課題を主体的に処理し、社会生活に適応していく人間を育成することができるであろう。

III 研究内容

1 理論研究

- (1) 視覚障害の理解に関する文献研究
- (2) 社会性を育てることに関する文献研究
- (3) 教師の適切なかわり方 (カウンセリングの理論と方法)

2 実践研究

- (1) 盲学校における児童生徒の実態調査 (アンケートの作成・集約・分析)
- (2) 指導計画の作成・活用・考察

3 実技研修 (カウンセリング等の実技体験と技法の演習)

IV 研究の進め方

- 1 視覚障害と社会性とのかわり
- 2 児童生徒の実態把握 (アンケートから)
- 3 社会性を育てる指導
- 4 個別目標に応じた指導計画
- 5 指導の実践 (検証)
- 6 評価とまとめ

V 研究の実際

人が前向きに生きていくには、社会的存在としての人間を視点に入れて考えていかなければならない。社会の中でこそ学習し、生きていくことができるからである。それは視覚障害があっても同じであり、個別の歩行や点字といったスキルの学習でさえ、指導者とのコミュニケーションの成立が根底にある。意欲や自分を肯定する気持ちもまた人とのかわりが大きく影響する。将来の自立を踏まえて支援を考えていくとき、学校教育の内部だけの適応や行動形成を視点に入れておくだけでは十分ではないと考える。

では、視覚障害児が前向きに生きるため必要な社会性とは何か、それを育てるにはどんな支援が必要なのだろうか。まず視覚障害があることが社会において他者との人間関係を成立させていく上で、どのような問題を生じるのかを明らかにし、この研究の意義を考えていきたい。

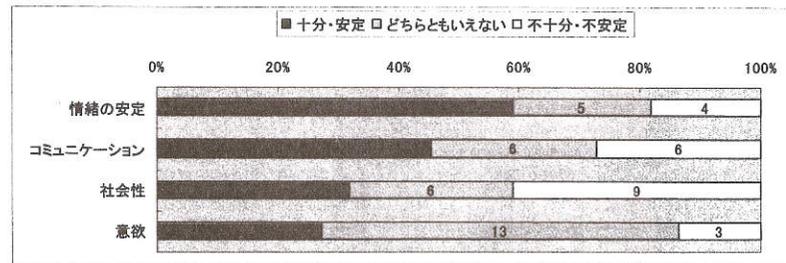
1 視覚障害と社会性とのかわり

①盲学校における実態から

盲学校において、「生きる力」をテーマにした校内研究の中で、「コミュニケーションなど人にかかわる力」などの問題があげられ、指導や支援のあり方など研究が進められてきた。毎日の指導の中でも受容的なかわり方や見えないことへの配慮など様々な工夫がなされてきたと考える。しかし、現実社会での自立ということを考えれば、いまだ大きな課題として残っていることも事実である。

そこで盲学校教員を対象に児童生徒についてのアンケートをとり、児童生徒の実態を明らかにし、課題を焦点化していきたいと考えた。

教師の視点から捉えた児童生徒の実態は次の通りである。



具体的な様子としては次のような例が多くあった。

情緒の安定	・少しのことで落ち着きがなくなる、気分を害する、思い通りでないと感情的になる
コミュニケーション	・自分の意見がもてなかったり、上手く表現ができなかったりする
社会性	・自分中心の考え方をする ・人の気持ちを考えないで行動する
意欲	・言われたことにはまじめだが、自分からは進んでしない

教師の児童生徒に対する日常的な配慮では「自己中心的な考え方になるときがあるので守るべきルール、規律は教えている」「生徒同士のかかわる場面での配慮」など、困っていることでは「同年代とかかわる機会が少ない」「困ったときに助けてもらえる習慣が身につけており、他の人がどんな状況でも助けを求める」などがあげられていた。

これらのことから、社会性、コミュニケーションなど不足していると感じている児童生徒は比較的多いことがわかる。具体的な様子からは、個人差は大きいですが、感情のコントロール、表現力(主

3 社会性を育てる指導

社会性を育てる指導として次のように考える。

① ソーシャルスキルトレーニング

ソーシャルスキルトレーニング(略してSSTとする)は、子ども全体が社会性に乏しくなっていることや対人関係の不適応を起こす子どもが増えていることで、通常学級においても学級全体または個別を対象に行われてきている。また、ADHDやアスペルガー症候群などの子どもを対象に社会的スキルの獲得・維持を目的に行っているところもある。予防的な面、治療的な面を持つSSTであるが、盲学校においては視覚に障害があると不足しがちな社会的スキルを予防し、個別の課題に応じて必要な社会的スキルを育てることをねらいとする。

また、ソーシャルスキルとは他人との関係を円滑にする能力であるから、スキルの知識やコツだけを学んでもうまく用いることができない。基盤となる共感性を十分に育てていくことが重要であると考える。

指導の順序

- a 対象児を選ぶ
- b 子どもの実態や問題行動の把握(アセスメント)
 - ・ ソーシャルスキルの知識が不足しているのか
 - ・ どんなスキルが不足しているのか
 - ・ 知識があっても上手く行動に移せないのか
 - ・ 行動を変えようとする意欲がないのか
 - ・ 状況によるものなのか
- c 目標となるスキルの選定
- d 指導の計画
- e 指導の実践
- f 評価

② ロールプレイ

役割を演じることで、新たな体験や気づきを通して自分や人の感情や関係の理解を深めることを目的に、SSTに多く取り入れていく。失敗の少ない保護的なロールプレイの場面で行うことで、大きな失敗や強い不安を経験せずに社会的スキルの熟練を図る。特に相手の対場に立って見ることで、相手の感情や行動の理解が深められる。

③ 教科・領域の位置づけとねらい

疑似体験によって体感したり、話ったりすることができる場を自然な形で設定することができる。教師だけでなく仲間による強化ができる。また、それぞれのねらいから道徳・特別活動に位置づけを行うことを考えた。

道徳でのSSTのねらい

社会的スキルを高めることは、道徳教育における実践力につながる道徳性の育成の1つといえる。また、道徳の時間では、ロールプレイを通して、視覚障害児に不足しがちな社会的スキルの基盤となる共感性を育てることを大きなねらいとする。

特別活動でのSSTのねらい

集団活動の機会が少なく、本音で友だちとかがかわることもあまりない。そこで集団活動の場をとりえショートエクササイズを行い、楽しい生活の基盤部分を育てる活動を特別活動の中に組み入れていく。お互いの存在を意識することから、認め合い、協力していく気持ちを育て、活動内容を高めていく。振り返り、問題点に気づかせ、その問題を解決するためのスキルを意図的に子どもたち

基本的な技法

- 1 トレーニングの目的や内容の教示
- 2 モデリングによるスキルの学習
- 3 リハーサルやロールプレイによるスキルの練習
- 4 フィードバックや強化 正の強化(社会的注目、報酬、承認など)
- 5 ホームワーク

4 授業実践1 道徳

① 対象児童 高学年の児童(2人)

② アセスメント

ソーシャルスキル調査から
ソーシャルスキル尺度から

(石川・小林1998を参考)
(Schultz and Selman,1998を参考)

児童A・25項目中17項目について教師の評価より自己評価が高い。
 ・低学年に多い自己モニターが甘いタイプで、まだ客観的に自己を捉えていないことが多い。
 ・共感性¹(役割所得能力)の発達段階では1から2への移行期のレベル。
 ・主観的な立場から人の気持ちを考えたり、表面的な見方をしたりする状況がまだある。
 児童B・25項目中23項目について自己評価と教師の評価が同じ。
 ・客観的に自己モニターができ、自分を冷静に自己判断している。
 ・共感性(役割所得能力)の発達段階では2のレベル。
 ・相手の気持ちや考えを推測して判断し、自分の行動をとることができる。

③ 目標 (共感的スキル)

- ・ 相手の立場に立って考え、相手の気持ちや考えを理解することができる。
- ・ 相手の気持ちをわかって話しかけることができる。

④ 指導の計画

ロールプレイやインタビューをしながら、互いの立場を交換して相手の気持ちを知るなどの共感性を高める手立てを多く取り入れたVLFプログラム(SSTや集団カウンセリングの方法を応用)による道徳の授業の実践

実施日 1回目 平成14年9月18日(水) 『すれちがい』
 2回目 平成14年10月9日(水)11日(金) 『にじいろのさかな〜しましまをたすける!』
 3回目 平成14年11月27日(水)28日(木) 『からすたらう』

指導過程

- ステップ1 教師が自己開示して経験話を話すことで、のびのび思ったことを話せる雰囲気を作る。
- ステップ2 教材をもとに登場人物や自分の視点での見方を話し、心外²等で他者の考えなどを学ぶ。
- ステップ3 対人葛藤がピークの場面などでロールプレイをし、登場人物の視点を深く理解する。
- ステップ4 書く(描く)という表現の中で、自分や他の視点での思いを表現する。

教師の支援

- ・ 教師や仲間によるプラスの強化(ほめる、支持する、頷く、励ますなど)をしていく。
- ・ 感じたことを受け止めたり、言葉にならない感情を取り上げたりして補助をしながら、安心して話したり、ロールプレイをしたりできるようにする。
- ・ ソーシャルスキルのどんなところが不足しているかのよって、教える、練習させ自信を持たせる、ロールプレイなどで洞察する機会を多く与えるなど支援の方法を見極めていく。
- ・ 話せる雰囲気作りを心がけ、動きを通して感情を発散させ、緊張をほぐし、自由な思考を取り戻すことができるようにする。

⑤ 授業記録から

	主な発問・指示	教師の支援(・)	子どもの反応
ステップ1	1 教師自身の話(一人ぼっちだった友だちの話) こんな経験あるかな 教師が自己開示し、話しやすい雰囲気を作る		自分だけで勝手にものを決めたことはある。 私もあるような気がする。

<p>1 音調（挿絵や時代の背景、文化を言葉で説明） 2 ワークシートを書く（相手の視点で） 3 もしみんながここにいたらちびをどう思うだろう ・相手の対面立って相手の感情のまま本音をだせるように、どんな言葉も肯定して聞く。</p> <p>1. 3 パートナーインタビューをする インタビューをしてどんな気持ちになったか ・頻りに出した気持ちを認め、いいところをほめながら気持ちを高めロールプレイのウォーミングアップをしていく。 ・お互いの気持ちを聞きあうことで、相手の感情や行動を理解する。</p> <p>4 ロールプレイをする いそべ先生になってちびに話してみよう ・自由に自分に気持ちを表現できる雰囲気作りをする ・感じたこと、受け止めたことを共有する</p> <p>・言葉にならない感情を教師が取り上げていく。表情や相手との距離、視線の動きなどから感情を表現していることを、質問したり言葉で補助したりしていくことで、理解を深めていく。</p> <p>いそべ先生の今の気持ちは？ちびはどんな気持ちですか？ ・相手の対面立って見ることで、相手の感情や行動の理解が深められる。 ・教師がいそべ先生役になりモデルリングを提示した。</p> <p>もう1度ロールプレイをしてみよう ・真似ることから、あたたかい言葉かけで関係を築める体験し、心地よさを体感させる。 ・あたたかな感情の伝え方（言語、非言語による伝え方）を練習する</p>	<p>相手の気持ち 鈍乏、汚い 友達になりたくない</p> <p>相手の気持ち しゃべらないならもうずっとしゃべらなくていい。 嫌な子だなあムカムカする</p> <p>ちびの気持ち そんな子大嫌い一緒に遊びたくない</p> <p>ちびの気持ち びくびくして怖かった</p> <p>1回目 A:「どうしたの？ちび。」 B:「後ずさりして黙っている。」 A:「何かお話でもある？」 B:「(少し後ろに引いて沈黙したまま)」 A:「……………」 劇が進まなくてBがAに話しかける B:「私はちびをしてるのに、Aは何にも話しかけてくれない。」 A:「何にもしゃべってくれないから黙ってました。しゃべってくれないとわからない。」</p> <p>相手の気持ち なかなかしゃべってくれないから、ちょっとじゃない、かなり嫌でした</p> <p>ちびの気持ち そんなに知りたいのかなってびくびくした</p> <p>2回目 相手の気持ち どうしたの、困ったことある。 話したくないなら話さなくていいよ。ちびっていろんなこと知ってるね。花や山のこと、ちびはみんなの知らないこと知ってるよ</p> <p>ちびの気持ち ほめてくれることが嬉しかった</p>
<p>1 ロールプレイをする。 友だちになってちびと話そう ・両者の気持ちを理解できるように交代して演じさせる ・相手の気持ちになって言葉かけさせる</p> <p>2 ・ちびや、友だちの今の気持ちを体感させる。 ・相手のよさに気づき、認め合う気持ちを大事にする。</p>	<p>相手の気持ち 毎日毎日6年間もそうやって繰り返して頑張ってきたんだなって わかってあげられなくてごめん</p> <p>ちびの気持ち すごうれしかった ありがとう</p> <p>最後に言った子どもの言葉 「今までなかったことのないあたたかい気持ちになった」</p>

授業の考察

- ・教師の自己開示、よさをほめるなどのプラスの強化、本音を話しやすい雰囲気作りなどに努めたことで、子どもたちはとても興味を持ち、1回目が終わった後「今までしたことのない道徳だったね。またやりたいね。」と感想を言ってくれた。話し合いや指導が通り一遍のものでなく、自発性の高いものになり、問題についての理解を深める効果があった。
- ・児童Aは友だちの率直な評価を気にして表情を硬くすることが多くあった。高い自己評価の裏返しには大きな不安があることを感じた。反対に仲間によるプラスの強化には表情が和らいでほっとする様子が見られるなどその効果は大きかった。また、パートナーインタビューでは、回を重ねるごとに落ち着き、相手の答えを受けて質問する場面も出てきたことも大きな成果である。繰り返し体験することが必要であると考えた。
- ・ロールプレイの中で役割を交換してすることは相手の気持ちの理解を図る上で効果的で、共感性を育てることにつながっていくと思われる。
- ・モデルが限定される、強い考えに流される、多様な考えがでない、理解が難しい場面が多くある、マンネリ化するなど二人で行う授業は課題が多い。また、一回目の身近な場面を設定したも

授業実践2（児童会活動）

1 対象児童 高学年5人

2 児童の実態

少人数であるので共に活動する場面は多いが、教師を媒介にしたかかわりになりがちで、自分たちが主体的にかかわって活動することが少ない。互いに理解しあい認め合う関係には至っていない。自己中心的な聞き方や話し方が見られ、話し合い活動で話題がずれていくことがよく見られる。

3 ねらい（共感的スキル）（上手な聞き方）

- ・相手の話を理解して聞き、それに対して自分の考えを話すことができる。
- ・相手のよさを認めながら協力していくことができる。

4 指導計画

児童会話し合い活動の時間にショートエクササイズを10分間とってもらい、気持ちを切り替え、自己コントロール力を高めるエクササイズと、聞き方や共感性を高めるエクササイズを行っていく。

教師の支援

- ・児童理解を図り、表情や言葉などから気持ちの変化をつかみながら必要な声かけをしていく。
- ・良い点を認め意欲づけし、負の強化をしないように心がける。
- ・教師が個を認めることで暖かな雰囲気作りをし、楽しい活動を通して互いを認め合う気持ちよさを感じさせていく。
- ・友だちの様子を言葉などで説明し、言葉以外でわかる気持ちなどに気づかせていく。

5 授業の様子から

月日	エクササイズ	SSTとの関わり	ねらい	児童の様子
10/1	呼吸を教える あいさつフリー	感情の抑制 あいさつ	・気持ちの切り替えや心の安定（呼吸を教える） ・いい挨拶の心地よさを感じる	・「呼吸を教える」ではあまり呼吸を意識したことが無かったようで、鼻で息を吸って口からゆっくりと吐くということが捉えにくそうだった。また、落ち着かない様子も見られた。 ・「あいさつフリー」という単純なエクササイズでもやり方をなかなか理解できない児童もいたが、繰り返して行うことで理解することができた。間があいたり、順番を抜かしたり、ばらばらな流れのときは気持ちも合わず、最後に全員できたとき、「気持ちいい」という言葉が子どもから上がった。
10/7	呼吸を教える そうだねゲーム	感情の抑制 上手な聞き方	・受容して聞いてもらう心地よさを感じる	・新しいエクササイズを理解するのに時間がかかる。 ・ゲーム後、みんな柔らかくすっきりした表情をしている。「認めてもらった気がした」という感想などがあり、自分を肯定的に受け入れてもらう心地よさを感じてくれた気がする。 ・ペアを同じ人と組みたがる。少人数であっても固定的になりつつある。
10/21	呼吸を教える 背中合わせの会話	感情の抑制 上手な聞き方	・言葉以外でも聞くことができる体験する	・モデリングのとき、1回目は合わなかったの、こめる思いが足りない例として提示した。2回目であったとき子どもたちは言葉でなくても伝わることに驚き、早速ペアを組んでやっていた。2組とも1回目にぴったり合い、盛り上がっていた。
11/5	呼吸を教える わたしからのテレパシー	感情の抑制 上手な聞き方	・言葉以外でも聞くことができる体験する	・教師2人でモデリングを行った。1回目で数字がぴったり合った時「すごい」という歓声が上がり、意欲的な雰囲気になった。
12/2	呼吸を教える ふわふわ言葉とチェック言葉	感情の抑制 あたたかい言葉かけ	・言葉が引き出す気持ちに気づく	・障害のない人と同じような力を認められたとき嬉しいと子どもたちから出た。 ・相手のいいところを言うというのは簡単なようでなかなか難しく、何を言ったらいいかわからなかった場面があった。考える時間をもう少しとることでスムーズになると考える。
1/20	呼吸を教える あたたかい言葉のシャワー	感情の抑制 あたたかい言葉かけ	・あたたかい言葉をかけられる体験を通してよさを味わう	・前回と間が開きすぎ、しっくりこない感があった。 ・あたたかい言葉（よいところをいう）ということは意外と難しい、子どもたちとても苦労していた。 ・わからないからと言う事をパスした子どももいた。

授業の考察

- ・全体としてこのショートエクササイズへの反応はよく、子どもたちは進んで取り組んでいた。集中できにくい子や理解できにくい子であっても最後まで一緒に活動できた。「表情も笑顔が多く見られた。エクササイズを通して相手の気持ちを考えることの大切さに気づいたようだ。」という感想を担任の先生方からいただいた。
- ・友だちへの存在の認識や関心は他の子の様子が見えないことが多い。直接積極的にかかわらなければ人間関係は育たない。少人数だからみんながかかわっているわけではないことを認識し、教師の役割を改めて考える必要があると思う。あたたかい言葉が言えないということの裏には、子どもたちが友だちのよさがわかるようなかかわり方をしてこなかったということが言えるのではないだろうか。
- ・子どもたちは生活の中でストレスをうまく発散できずにいることが多くある。教師はまず本音を受け止め気持ちの安定を図り、それから解決していくためには何が必要か見極めていく。上手に自分を表現する力、自分の気持ちをコントロールする力などのスキルとともに基本的な力を育てる指導が必要である。
- ・今回は児童会活動の中で何回か行ったが、学部全体で計画的に、また機会を捉えて行っていくことで子どもたちや教師の意識が変わっていくのではないかと考える。

VI 研究の成果と課題

- ・研修を深めていく中で視覚障害や社会性についての理解を深めることができ、社会的スキル教育の指導をより系統的に指導することができるようになったのではないかと考える。また、子どもの見方が変わり、共感性の育成を図るための支援が教師自身の共感性をも高めてくれたように感じる。表情や視線、からだの向きや姿勢、言葉などの言語的、非言語的行動からのメッセージの響きが強くなり、子どもの気持ちや思いを推測するようになってきた。それによって適切な支援、不適切な支援などフィードバックしながら指導をすることで、より適切な支援ができるようになると思う。
- ・ショートエクササイズ (SGE) やVLFを使った道徳の授業を実施したが、何よりも子どもたちは興味を持って活動していた。指導の結果では、大きな子どもたちの変化は見られなかったが、あまり関心を持たなかった友だちの良さに気づく、かかわる、本音を話す、良さを誉めるなど小さな変化は感じられた。
- ・視覚障害児の自立を考えた場合、自立活動の指導にかかわる広い範囲での社会的スキルを考える必要がある。例えば、適切な食事作法などの自己介助スキルは、人と気持ちよくかかわるためには必要なスキルであるし、社会的場面での歩行やバスの乗り方なども社会的スキルに含まれると言える。今後は個別指導計画と関連させて総合的に子どもを捉え、カリキュラムに位置づけた計画的な指導をしていくことが必要であると考え、と同時に校外学習などでの体験活動を通し、社会的スキルの実践力を高めていくことも課題であると考え。

おわりに

長期研修を終えるにあたり、今回の貴重な研修の機会を与えてくださった山形県教育委員会の皆様、長期にわたりお世話になりました県教育センター所長鈴木強太先生をはじめ諸先生方、職員の皆様には心より感謝申し上げます。また、特殊教育部の先生方、直接御指導いただきました高橋指導主事には様々なことを親身になって教えていただきこの1年間が本当に充実したものになりました。感謝の気持ちで一杯です。そして、快く研修の機会と研究実践の場を提供してくださった県立山形盲学校の渡辺和子校長先生をはじめ御協力いただいた諸先生方に深く感謝申し上げます。